

▼入江子は禁裡に於ける歌道の家柄たる冷泉家の出である。従つて風雅の道に遊ぶ人である。或は文部省の美術展覽會の審査委員たり、御歌所の寄人たる如き、蓋し最も適任で、昨年初めて御歌所の伺候を命ぜられた時の如き、彼を知る人々の間には、非常に歓迎されたものだ。蓋し今日情弊の最も多き所、士風の最も缺けたる所は宮内省に如くはない。此の情弊の府に彼の如き公平な、人格のある人が入つたのは、其矯正に少なからぬ功があるだらうと期待せられたからである。此一事以つて、彼が立派な性格を持つてゐるといふ事を證明するものと言はねばならぬ。

▼彼はあまり政治などにたづさはるのを好まぬらしい。従つて研究會の幹部になつて居る事なども好まぬらしい。然し彼の幹部外に出る事は、會内を纏める上に於て少からぬ影響がある者と見える。之れ彼が依然として幹部に居る所以で、何か事があれば夫れに顔を出さねばならぬやうになつてゐる所以である。

▼男爵界の有力者としては、田健治郎、有地品之允がある。田は勅選の議員であるが、有地は互選議員の頭目である。男爵中の世話役、沖守固が先年卒去してから、めき／＼と勢力をつけて來た。有地は山口の藩士で、若し日清戦争の初めに、例の英船沈没事件といふ者がなかつたら、今は當然海軍大將として、海軍部内に長州派を代表すべき人なのである。然るに其の事件の爲めに、今の首相山本權

兵衛に一蹴し去られたので、今に其恨を忘れぬ者と見える。現内閣に對しては敵役の一人だ。片意地な裡に相應の機略もある。貴族院内の働き手である。

▼元來男爵界には働き手が多い。一代の功勞に依りて、男爵になつた者が多いからである。所が此一代男爵でない者の中にも又やり手がある。此等は多く公卿の末輩か、社司とか寺の別當とかいふ家柄の者である。社司の家柄より出た者には、長老千家尊福男がある。然し乍ら此階級の惡こすい働き手を代表する者としては、杉溪言長を挙げねばなるまい。實際此階級の連中は、随分如何はしい生活をしてゐる者が多い。従つて、貴族院内の穢多村組と稱せられる者は皆此階級の人々であつたのである。而して其頭領が杉溪で第二次桂内閣の當時大浦に買収されて、千家男に反抗した、清交俱樂部といふのが即ち夫れであつたのである。

▼然し杉溪は政治的野心などは案外ない男だ。根が奈良の興福寺中妙徳院の住職といふ家柄なのだから、政治などいふ頭もない。従つて近頃は、貴族院内の勢力といふ者も、殆んどなくなつたやうである。彼は人柄に似合す、南畫がうまい。此方面では相當の腕を持つてゐるさうである。其他畫でも詩でも、相當にやる。斯ういふ方面では、入江など、趣味を同うして、又華族間の一異彩であると言はねばならぬ。

地方長官論

(160)

政争圈内の有象無象

▼昨年の總選舉の際、政友會の陣笠連は、『我黨内閣』の下に總選舉を行ふのだから、決して心配はないと力んで居た。此の『心配はない』と云ふ一句に、言外の意味が含んでゐる。『我黨内閣』に反抗すれば役人の首が飛ぶのだから、知事でも、事務官でも、暗に政友會の候補者を援護すると云ふのだ。時の内相原は、『干涉をしてはならぬ』と訓令したが、夫れは表面上の體裁だけで、實際は選舉干涉は到る所に巧妙に行はれた。藩閥内閣の品川や白根のやりくちは餘りに露骨で、却て敵派の反感を激發させたが『我黨内閣』の候補者援護は裏面的に成功を期したのであるから、血を見るやうな騒ぎは無かつた。表面上に干涉の事實は顯はれずとも、自派の勢力を擁護する爲めに、干涉の行はれたのは否定すべからざる事である。

▼そこで、何れの内閣でも、中央政府の主要部の顔觸がきまれば、必ず地方長官の更迭を斷行する。而して其の更迭の標準は、其の人物、手腕の能否如何と云ふよりも、自派の利不利に由ることが多

い。地方の持て餘し者でも、無能の知縣でも、己れの黨派の爲めになる者は誡首しない。地方長官を利用して、黨勢を擴張しようとするからである。地方長官も亦其の呼吸を知つて居るから、何れかの黨派を援護して、陞進の階梯を得ようとする。殊に原一派と、大浦一派と鏑を削るやうになつてから、其の甚しきを致したのである。

▼昨年末に桂内閣が成立し、子大浦の内相たるに及んで、忽ち政友會最員の知事を誡首した。其の電光石火的の手腕は、頗る政界の視聽を聳動した。が、間もなく桂内閣が斃れて、本年二月山本内閣の成るや、内相原は遠慮會釋もなく、反政友會の知事を誡首した。其の更迭の理由は、老朽淘汰であつたが、内實は然らずして、子大浦に報復するの處置なる事を何人も認めた。

▼在來の知事の中には、清浦系もあれば、大浦系もあつた。是等は現内閣とは縁の遠い者であるから、内相原は是等に向つて斧鉞を加へた。が、原系や、奥田系の人物は榮轉もし、新任もされたのである。斯くて、地方長官の更迭には、政治的色彩の加味する事となり、遂に黨争圈内の者となつて了つた。

黨派關係より觀たる顔觸

▼地方長官の更迭には政治的色彩を帯びたが、其の何れの黨派に屬して居るかを截然と區分するのは

(161)

容易でない。政友系と思はれる者でも、案外非政友系の者もあり。又其の何れにも好意を表してゐる、所謂御都合主義の者もあるから、恐らく内相原と雖も眼鏡が違はぬとは云はれまい。さうした猫眼主義の知事は論外として、色彩の鮮かな者を挙げると、政友系が多数を占めて居る。これは、非政友系の多くは誠首されたからである。辛くも首を取り留めた少数者は何等か他に情實があるか、薩派との關係があるか、其の人物を更迭し難い地方的事情のある者のみである。更迭されないから政友會に降伏した者と見るのも早計であれば、新任されたからと云つて、直ちに政友系と見做すことも出来ない中には、薩派の關係とか、其他の事情の下に新任されたものも有るからである。さうして、同じく政友系と云つても、原系もあれば、奥田系もあるので、諸種の複雑した關係、錯綜した事情が伏在してゐる。官界陞進の手筈は、甘藷蔓と限つたものでなす。

▼山本内閣の大蛇を免れた者には、宗像政(東京)、大森鐘一(京都)、大久保利武(大阪)、大島久満次(神奈川)、服部一三(兵庫)、李家隆介(長崎)、岡田宇之助(茨城)、岡田文次(栃木)、俵孫二(三重)、佐柳藤太(滋賀)、小田切磐太郎(山形)、秦豊助(秋田)、阪仲輔(石川)、濱田恒之助(富山)、高岡直吉(島根)、馬淵銳太郎(山口)、川村竹治(和歌山)、鹿子木小五郎(香川)、深町鍊太郎(愛媛)、不破彦磨(佐賀)、有吉忠一(宮崎)、谷口留五郎(鹿兒島)等の二十三府縣知事である。

▼此の中で、非政友系と目すべき者は、大森、服部、李家、阪、俵、濱田、有吉の徒で、宗像も當然これに入るべきだが、昨今は多少灰色を呈してゐる。大久保は薩派の關係上、昔日とは態度を異にしてゐる。純粹の政友系と目すべきは、大島、川村、秦の輩で、谷口も亦同臭味であらう。殊に秦の如きは、遙拜殿問題で縣下の物議を醸し、政友會と新政黨の軋轢を激成して、自ら解決に苦んでゐる。猪口才で、大局を見るの明なく、到底知縣の器ではない。岡田(宇)、佐柳は、子大浦に抜擢されたが、奥田との關係上、現内閣側と見て可からう。

更迭されたる良二千石と悪知縣

▼更迭されたのに、轉任と、復職と、新任との三種別がある。さうして、復職された者は、政友系の有力者で、桂内閣の時に休職されたのである。其の顔觸を挙げると、安藤謙介(新潟)、依田鉉次郎(長野)、森正隆(宮城)、川島純幹(鳥取)等で、何れも野心満々たる原系の徒である。

▼轉任には榮轉もあれば、左遷同様のものもある。中村純九郎(北海道)、池松時和(千葉)、島田剛太郎(岐阜)等は政友系だけに都合が好く、湯淺倉平(岡山)などは、地方局長から蹴落されたのだから、何う見ても榮轉とは云はれまい。笠井信一(静岡)、寺田祐之(廣島)等は比較的榮轉であるが、法博松井茂

(愛知)、若林寶藏(山梨)等の非政友系でありながら、此の地位を得たのは聊か眉唾に値する。

▼新任知事には、南弘(福岡)、赤星典太(熊本)と云ふ珍しい顔がある。赤星の行政裁判所評定官の閑職から郷里の知縣になつたのは、錦衣を飾るものであるが、南に至つては、前内閣輪長で幅を利かした時代とは隔世の感がある。政友會大事と奉公すれば、或は舊夢を暖める事が出来るかも知れぬ。

▼事務官から拔擢された者には、添田敬一郎(埼玉)、折原己一郎(奈良)、堤定次郎(巖手)、永井金次郎(高知)、大芝惣吉(群馬)、川口彦治(大分)の徒がゐる。就中、後の二人者は政友會最員で、事務官當時には知事に反抗して迄も黨勢擴張に骨を折つたものである。大芝は福島で知事の西久保と反對に立ち、川口は大分で知事の千葉と極力政友會を助け、愛知に逐はれてからも例の辣手を揮つて居た。大芝が大浦系の黒金の後釜に据わり、川口の之も大浦系の昌谷の後を襲うたのは、榮轉以外に深い意味のある事であらう。

▼折原は手腕があるけれども、醜氣紛々たる男である。事務官時代に囹圄の人となり、信望を失つて居るから、牧民官としては如何はしい代物である。人材登用も、斯う極端になると、ありがた味が薄い。人材登用と云へば、香川輝(福井)や、高橋琢也(沖繩)など云ふ老朽者を拾ひ上げたのは、其の趣旨を没却したのでは有るまいか。又、寺田のやうな老朽無能で、徒らに時の勢に迎合する者を誠首せ

ぬのも老朽淘汰の精神に戻つてゐる。

▼子大浦に簡拔された警保局長の太田政弘(福島)や、熊本管理局長の田中武雄(青森)の新任は、ちよつと異彩を放つてゐる。人物としては田中はまだ問題の人ではないが、太田は美人系の産で、其の容貌は知縣中に一頭地を抜いてゐる。才人だけに陸進は速かであつたが、桂内閣の瓦解と共に腰を突いた。けれども、其の儘に委棄されずに、知縣に拾はれたのは、警視總監安樂などの推薦に依るものと見える。

學閥派と非學閥派

▼以上は大體黨派別から觀たのであるが、更に觀方を換へて、出身學校から色別を試みよう。今假に帝大出身者を學閥派とすれば、他は非學閥派を以て目すべきである。して、其の非學閥派中には、私學出身で文官高等試験に登第した者と、特別任用の者がある。

▼特別任用の者は、何れも古顔で、中村、大森、服部、宗像、川島、寺田、渡邊、安藤、高橋、香川等である。服部は明治二年に米國に留學し、文部省の少書記官、東京大學法學部長等を歴て、普通學務局長になつた。地方に出て、始めて巖手縣知事になつたのは二十四年だから、知縣中の最古參であ

る。學士會の名簿にも載つて居るから、赤門派と見られないでもないが、矢張特別のものである。宗像は憲政黨時代の遺物で、壇の浦知事を以て著聞してゐる。中村は海軍省の翻譯官や、臺灣の參事官を務めて、殖民地の事は多少知つてゐる。先年郵便局長から福井縣知事に擢んでられたので、原に隨喜も鈍腕なりに仕事が出来よう。

▼私學出身者は、鹿子木、依田、佐柳、岡田(字)、大芝、永井、田中の七人で、何れも年壯氣銳の徒である。鹿子木は早稻田、依田は明治、他は皆中央である。中央は文相奥田の關係して居る學校だけに、其の出身者は奥田系を以て目されてゐる。事務官あがりで、まだ幾年も経たない連中であるから、訓練の仕様一つで何うともなるであらう。

▼以上擧げた十七頭腦を除く外は、悉く官學出身者である。其中、高岡は札幌農學校卒業、阪は高商半退學である。岡田(文)は帝大選科の出身だが、外國語を巧に操るので、警視廳で調法がられた。生粹の赤門出身は二十七名もあるのだから、學閥派は最優勢である。今後特別任用の者は、漸次減退するし、私學出身の事務官も少數であるから、學閥派の頭數は増加することも減少することはない。けれども、學閥派も各其の好む所に依りて、某黨某派の勢力下に附著するから、政治的色彩によりて種々に分割さるゝに違ひない。

地方長官中の注意人物

▼知縣の人物も漸次低下して、並木の様に平凡化した。中には特色のある人物の無いでもない。古い處では服部、大森等であるが、年齢の上から云つても、最う淘汰圈内に足を踏み入れてゐる。大森は斷行力があるが、圭角があつて融通が利かぬ。服部は識見もあり抱負もあるが、文相にもなれず府知事で老いたのは、大臣運が無かつたのである。三十六年に勅選議員になつてゐるが、頭數だけの働きをなすの外、格段な活動もしないやうだ。彼れの食客から知事になつたのは、阪である。創意の人で、元氣もあり手腕もあるが、事を構へて平地に波瀾を起すやうな傾向がある。けれども、如才なく立働いて、難關をも突破するの魔力があるから、もつと伸びるかも知れぬ。若林は前任地の奈良では非難を受けたが、無能ではない。豪放で司法的材能に富んで居るから、風雲に際會すれば警視總監位にはなれるだらう。山梨では先づ若尾の機嫌から取り始めて、實業家を手に入れる積りで居るらしい。

▼大久保は甲東の伴で、外相牧野の弟で、商務局長時代には大に發達しさうに思はれたが、知事にな

つては矢張ぼんくら組である。無能外相の兄よりも、餘程段が落ちる。有吉は手腕の無い方ではないが、急に前途に光明が輝きさうでもない。宮崎に數年くすぶつて居る所を見ると、先づ落伍者らしい感じがする。法博松井は曾て朝鮮で警務總長を勤め、木内に推薦されながら、岡喜七郎とぐるになつて木内に背負投を喰はせたものだ。敏辣の一語で、彼れの人物が説明が出来るやうに思ふ。愛知は彼れの手腕を試みるに、最も適當な處である。

▼安藤と森は、原系中の手腕家である。地方牧民の事よりは、黨勢擴張に非凡の技倆を有つてゐる。森は新編では、あれ程優勢な國民黨を叩き潰して了つた。現住地の宮城では猫を被つてゐるが、『我黨内閣』の陣笠連は其の手腕に信頼してゐるやうだ。彼れは變物で、感情家であるだけ、夫れだけ面白い藝當を行り得るのである。安藤は檢事あがりで、人物に凄味がある。朝鮮王妃殺害事件の際、時の法相芳川に擢んでられて事に當り、手腕を顯はしたのが源で重用されたが、後に原系に鞍替したのである。

▼新進人物中で、異彩を放つのは南、湯淺、太田の三人であらう。南は陸進の速かなので、同窓から羨まれて居たが、一たび失脚して焼石の猪となる迄轉んで行つた。人物は婿養子だけに柔順で、穩健だが、才幹は秀拔だ。湯淺も三十臺で地方局長になつたから、出世の早い方である。思慮周到で、剛

直であるから、毛嫌ひもされるが、腕前は確かにある。尺蠖の屈するは伸びんが爲めであるから、須く屈して大に修養するが宜しい。官海游泳術だけで、世の中を渡れると思ふのは心得違ひである。

疑問の五妖星

福岡玄洋社と頭山満

▼石炭の福岡からは、石炭のやうな人物が出る。石か炭か不可解の人物が、ころく掘り出される。石炭が人の見えない所で大なる働きを爲すやうに、黒幕に居て仕事をする人物が多い。暗黒面の活動さう云ふ言葉を許すならば、福岡縣人は最も夫れに長じて居る。大きい人物は大きいなりに、小さい人物は小さいなりに、ダークサイドを歩いて、何等か意味のある仕事をする。所謂暗中飛躍を試みて、世人を驚倒する事が往々ある。伯大隈に爆裂彈を投じた來島恒喜も、政務局長阿部を刺した岡田満も、皆福岡縣人である。福岡縣人は暗黒史上の人物として、最も多くの頁を占める者である。

▼石炭の福岡には、石か炭か不可解の玄洋社がある。明治の政界に、一種の恐怖を與へ、又勘からぬ

刺戟を與へてゐる。大正の今日でも、まだ命脈を保つて、一種の空氣を作つてゐる。三多摩の壯士は僅かに過去の面影を有するのみだが、玄洋社は若々しい血が通つてゐる。志士とか、浪人とか云ふ者は、密接な關係を持つてゐる。其の空氣に觸れた者は、其の空氣に化されて、處士氣質の人物が出来る。夫れは必ず刺客に限つた譯でない、天下の浪人と稱して横行して居る人物もあれば、策士を以て任じてゐる人物もある。支那駐劄公使山座圓次郎も曾て此處に居た。杉山茂丸や、宮崎滔天なども亦關係がある。而して、其の首領は頭山満である。

▼頭山は政界に何れ程の關係があるかと云へば、現下の政界とは殆んど没交渉である。然らば、全く眼をつぶつて居るのかと云ふに、さうでも無い。時に彗星のやうな光芒を放つかと見れば、又糠星よりも小さく光つて居る。彼れは豪いのか、豪くないのか、不可解の人物である。掘出された儘の石炭の様な所もあり、能く磨かれた黒耀石のやうにも見える。豪いと見れば豪く見え、愚物と見れば愚物と見える。其の風采は、どう見ても村長以上の代物である。

▼尤も頭山は、少壯時代には餘り賢くも無かつたさうだ。高畑の塾に居た時は、能く糞をやり、同學生の鼻先に放す。多くの人が臭氣に辟易するのを見て、快心の微笑を洩して居る。愚物のやうだが、何處かに寛容した所があるので、其の將來を注目された。漸く長ずるに及んで、一筋縄で負へな

い人物となつた。一概に壯士と云ふが、普通の壯士とは趣を異にして居た。政界の俠客と云ふ言葉が最も能く當つて居るやうだ。彼れから此の一片の俠骨と、親分肌を取つて了へば、狸み尻をやつた昔の頭山のみになる。福岡の産だけに礦山に手を出すが、大した儲けを獲たと云ふ事を聴かぬ。十萬や二十萬の金を懐にしても、物の一月と經たないうちに奇麗に遣つて了ふ。乾兒にもやれば、待合にも仕拂ふ、料理屋にも仕拂ふ。有れば有るだけ費つて了ふ、札束は頭山にあつては木の葉も同然である。

▼頭山は酒を呷つて、耳が熱するに至つても、談論風發の活氣を帯びない。始終何等か考へ込むやうに黙してゐる。碁を打つ時でも然うだ。三浦梧樓は饒舌るが、彼れは黙々として一子を投ずる。感興の爲めに、輒く色を動かさない。が、叩けば巨鐘のやうにウーンと唸る。唯夫れだけである。議論よりも實行だと云ひさうな顔をして、凝と人を視る。本氣になれば、何を行き出すか分らぬと云ふのは、頭山を買被つて居る者の言葉ばかりでも無さ相だ。

内田良平と宮崎滔天

▼昔は天竺浪人と云ふ奴があつたが、今は支那浪人と云ふ特種の人物がある。支那ゴロ、臺灣ゴロと云へば聞えが悪いが、浪人と云へば何となく受けが好い。此の支那浪人の中にも、いかさまものが澤

山ゐる。南方派に加擔する者もあれば、北方派に聲息を通ずる者もあつて、夫れなく美しい汁を吸つてゐる。本當に隣邦の爲めを思つて、義俠義血を以て立つてゐる者は、曉天の星も昏ならざるの有様である。

▼支那浪人の中にも、種々な色別がある。滿蒙論者もあれば、南方派もあり。宗社黨派もあれば、袁世凱派もある。銘々勝手に働いてゐる。對支問題で憤起したのは、内田良平、中西正樹、中野二郎、川島浪速等である。其の雷同者中には、全く支那の事情を知らぬ者が多いが、彼等は支那の山水を跋渉した、生粹の跋渉浪人である。中西は先年吉林の山中で馬賊に襲はれて負傷したので、邦人の記憶に上つたが、夫れ迄は餘り知られなかつた。支那浪人の古株で、數奇なる經歷を持つてゐる。川島は團匪事變の際陸軍通譯として渡航し、肅親王の義兄弟になつた程、宗社黨臭味の男である。彼等の成す所は、單に對支問題のみに止まるが、内田良平のやる事は、尠からず意味を持つてゐるのである。

▼内田は天祐俠以來賣り出した男だが、今は長閑に食ひ下つてゐる。朝鮮に居れば、内地に居るよりも羽振が利く。増師問題の沸騰した際には、『日本之三大急務』と云ふ書を著して、増師の必要を説き大陸主義を謳歌してゐた。陸軍の機密費を利用して居ると云ふ噂もあるが、其處までは追及せぬ。今

回の對支問題でも、矢張滿蒙論者の急先鋒となつてゐる。政黨關係を離れて、あれ程までに問題の火の手を煽り、現内閣に肉迫した杯は、普通の支那浪人には出来ない藝當である。

▼頭山の玄洋社を提げて居ると、内田が黒龍會を率ゐて居るのは、一寸面白い對照である。後者はまだ政界に大した勢力は無いが、滿鮮のみに止まらず、外交方面にも、政界の裏面にも、暗中飛躍を試みるであらう。

▼孫黃派の支那浪人で、一頭地を抜いて居るのは宮崎滔天である。彼れは内田のやうに陰險な術策を弄せぬ、赤心を他の腹中に推すと云ふ風の男である。屁理窟には容易に屈せぬが、感情には極めて脆い。時事を談じて居ても、感奮すると聲涙共に下るを禁じ得ないのである。彼れは俠客肌と云ふよりも詩人肌で、涙を裏む事の出来ない質である。頭山のやうに茫漠とした所が無いが、天真流露愛すべき點がある。『宮崎には何でも打明け得るが、瞞すことは出来ぬ』と、彼れの友人が萬口一聲に云つてゐる。

▼宮崎は、孫黃等の革命運動の當初から黒幕になつてゐる。彼れには奇策とか、機略とか云ふものはないが、親分子分と云つた様な關係で、或度まで支那浪人を抑へる事が出来る。先年孫黃等の亡命當時世話した關係から、獻策するの便宜がある。先づ軍師格で帷幄に參したのだが、夫れ程功績が有つ

たとも思はれない、唯犬養などよりは、比較的孫資に信せられたと云ふに過ぎぬ。支那を離れては、餘り仕事の出来る人物とも思はれぬが、一個の妖星として観察すれば多大の興味がある。

秋山定輔と田中舍身

▼秋山定輔の名は、久しい間の疑問である。露探以来の名である。日比谷事件の際は、江間俊一の名と並んで光つて居た。『二六』の社長を退くや、彼れの姿は政治圏外に没し去つたが、新政黨の創立と共に再び視界に映じて來た。見ると、杉山茂丸の名と並んで光つてゐる。彼等は種々なる意味に於て新政黨の策士のやうに思はれた。けれども、實際は軍資金の調達や、代議士吸収などに就ては、餘り働いて居なかつた。働かずとも、ちよつと動き出せば、世間から然う思はれるだけ、夫れだけ彼等は政界から睨まれ居るのである。暗黒の人物——斯う書くと、自然に彼等の名が浮んで來る。杉山は勿論秋山なども、表面で仕事をしない方が、より多く世間から豪く見られるのである。縦令豪く見られない迄も、疑問の人物くらゐには評價されるのである。

▼秋山は肺疾で、今日までの壽命も危まれたのであるが、まだ却々冷たくなりさうでない。是れから、何かしら一芝居を打つであらう。其の技倆は、木下謙次郎などよりは冴えてゐる。其の芝居も亦、大

仕掛である。秋山の芝居の筋書は、總て彼れが天下を取らうとするの空想から生れるのである。曾て奉答文問題で官僚内閣の破壊を試みたのも、新政黨の創立に参加して議會の解散を豫期したのも、皆天下を取らんとするの打算から來たのである。

▼浪人組の田中舍身は、秋山とは全く別な軌道へ走つて居る人物である。彼れは一種の彌次馬である。政黨を創立するとか、天下を取らうとか、其様な考は持つて居らぬ。唯何でも蚊でも、彌次つて見たいと云つた風である。佐々木安五郎、伊東知也など云ふ類の論客である。策士ではない。問題の起る毎に、熱辯を揮つて、輿論を製造するのである。憲政擁護でも、對米問題でも、對支外交の攻撃でも、何でも御座れである。苟も自分の癪に障る事は、片ツ端から罵倒し、皮肉らすんば歇まないのだ。現下彌次の大將は、十目の見る所、十指の指す所、田中舍身であらう。

▼田中は狀貌偉偉、痘痕滿面の醜男である、佛敎家ではあるが、佛を後にして政治を談ずる。在學生の二三十名しか無い女學校を經營して居るが、政界の風雲が騒しくなると校外に飛出す。彼れは何者にも制肘されず、自由自在に活動してゐる。佛敎家にも嫌はれ、教育家にも好かれぬが、青年には愛慕されてゐる。口は悪いが、同情がある。選舉運動や、應援演説をやることかうまい。人物は照山よりも面白く、鳳南よりも、穉氣がない。時局問題で二三年騒いで居るうちには、何程か器も大きくならう。

日本富豪論

鐵 拳 禪

(一)

▼富豪の富豪たる所以を語るものは、人格に非ず、思想に非ずして、物質其の物也。黄金其の物也。人格崇高なりと雖も、家に擔石の蓄なくんば富豪に非ず、思想豊富なりと雖も米鹽の資に乏しければ富豪に非ず。物質を積み、鉅萬の富に達すれば、馬鹿、無學の如何に拘はらず、所謂天下の富豪たる也。

▼富豪は、素封也。貨殖傳中の人也。其の勢力は、時に王者に比すべきもの無きに非ず。然れども、其の人格に至りては又乞食に劣るもの無きに非ず。昨日の乞食も、黄金を積めば今日の富豪也。往年の富豪も財力を失へば、現時の乞食たるを免れず。素封の名、富豪の勢力は、一に貨殖に依りてのみ保維せらる。

▼富豪の富を成すは、冷酷を以て信條とす。人情蜜の如くなれば利害を打算するの餘地なく、利害の

打算に盲ふれば貨殖する事能はず。貨殖すること能はざれば、富豪となるを得ざれば也。世の富豪の冷酷と評せらるゝは、自家の信條を固執するが爲めのみ。

▼『金錢は他人也』とは、何人も知る所の俚諺也。黄金の前に兄弟なく、親朋なきは、古今東西同軌に出づ。されば『仁を爲す者は富ます、富む者は仁ならず』と云へり。『富』は即ち人情を離れ、義理を没したる、刻苦點爪の境地にあり。

▼然れども、總ての富豪を以て、如上の境地にありとは做すべからず。『富』を爲すの道程にありては非人情、沒義理、而して爪に火を點すの苦を嘗めたりと雖も、今日に至りては、仁を成すべく發心せる者なきに非ず。内心未だ望蜀を禁せずと雖も、表面散金の惜からざるを示す者なきに非ず。

▼己れ一代に鉅富を成せる者と、生れながらにして父祖の鉅富を承けたる者とは、其の信條、其の人格おのづから異なれり。既に鉅萬の富を擁して王侯の勢力を得、財界に對して至大の權威を有するが故に、努めて人格を修養し、人間並の信望を繋がんと欲す。所謂父祖の罪障を滅して、現下の安心を得んと欲する也。

▼道樂息子は、父祖が致富の苦を知らず。又、父祖が鉅萬の富を作れる素志を解せず。徒らに散じ、空しく浪費するを以て能事となし、折花攀柳の費に蕩盡す。斯の如きは、富の活用を知らざる也。黄

金の權威を無視する也。身は富豪なりと雖も、心は乞食の賤しきに居る也。

▼黄金は常主ある者に非ず、彼れ去らんと欲すれば即ち去る也。能者は之を得て富を成せども、愚者は直ちに瓦解す。今日富豪顔をなすと雖も、富の活用を知らざれば、倏忽にして瓦解すべし。財を以て、社會の爲めに盡す者は、死すと雖も長への生命あり。

(二)

▼致富の徑路は數多ありと雖も、要するに投機、高利貸、事業の三に過ぎず。前二者は單に金を儲けんが爲めの手段にして、殆んど社會の公益と没交渉なるも、後者は殖産工業の發達を圖り、國を富まし併せて自己の富を成す。歸する所は黄金にあるも、其の動機は異なれり。

▼事業經營者の頭腦、素より利害を度外にして計畫する者に非ず。利益を生まんことを期すること勿論なりと雖も、高利貸の黄金の爲めに囚はれ、社會を顧みるの餘裕なき者とは同一視すべからず。其の事業にして社會文明に裨補する所あらば、其の報酬として黄金に光浴するは決して罪惡に非ず。

▼其の目的の爲めに手段を擇ばずして、富を成せるは罪惡也。怠惰にして貧し、社會の寄生蟲たる者も亦罪惡ならずんば非ず。富豪を以て直ちに罪惡の結晶となすは貧者の偏見なるが如く、富豪を以て一種の國寶となすも亦奴隸的思想たる也。

▼富豪の吐月峰に比せらるゝは、其の富めば富むほど鄙吝なるに由る。吐月峰の名甚だ美なるも、之を訓じてタンハキとなすに至れば醜の極也。蓋し、溜れば溜るほど穢くなるの謂ならずんば非ず。

▼全國到る所、大吐月峰あり、小吐月峰あり。其の峰の重疊する所は、事業起らず、産業振はず、地方荒廢の源をなす。近時社會の健全分子せる中流の變調を來し、中農の瀕々として破産するは、吐月族の魔手に罹れる也。されば地方振興を策するもの、此の吐月族の跋扈を制せざるべからず。

▼東北は先年の凶作以來、吐月族の魔手に罹り、中農は殆んど高利の爲めに再び起つ能はざるの狀態にあり。政黨者流の東北振興を圖るもの、單に談理に止まり、根本問題の解決を努めんとせず。振興の聲愈々盛んにして、荒廢の度益々甚しきを加ふ。高利貸の金力は、談理の能く制する所に非ざれば也。

▼吐月族は黄金を鑛山より採掘せずして、人の懷中より掘る也。掘りて尙足らざれば、更に膏血を絞らずんば歇まず。東北に於ける吐月族は、齋藤善右衛門を以て首長となす。彼れの魔手一たび觸るれば、中農、地主、忽ちにして破産す。

▼齋藤は高利を貸付けて土地を奪ひ、其の魔力を東北に擅にするのみならず、其の手は遠く關西に伸び、本願寺の如きも亦其の魔力圈内にあり。彼れは慳貪、冷酷、黄金の他に何物をも知らず。之を貯

普し之を貸付くるを以て唯一の興味とす。黄金を以て生命とすること、虱の血を吸ふに異ならず。
 ▼中央に此の種の者を求むれば、尾張屋銀行の峯島の如き、稍之に類す。而して、高利を貸付けて土地建物を占領するの巧妙なる、貧弱なる銀行を壓迫するの辛烈なる、其の策を弄すること、或は齋藤の右に出づ。

▼彼等は私財の増殖に汲々たるも、公益の前には眼を閉づるを常とす。是れ、彼等が社會の非難を免れざる所以也。齋藤は近年學生貸費の法を設けて人材養成に盡力するが如きも、實は方法を更へたる高利貸に過ぎず。人材を抵當として學費を貸與するが如きは、人身賣買以上の變行ならんば非ず。

(三)

▼高利貸の富を積むや、石垣を築くが如く漸進的也。投機の黄金を攫取するや、鷲鳥の如く急進的也。昨日の窮措大の、忽にして紳商の列に伍するを得るは、此の種の金儲けならんば非ず。儲くる事の速かなるは、瓦解も亦急也。夫の鈴久が權花一朝の榮を擅にせるが如きは、其の顯著なる例證也。

▼投機に依りて黄金を得たる者は、或は事業に關係し、或は創立して、以て富の持久法を講ず。投機より高利貸に轉するの徒は、殆んど見當らず。彼等の黄金を得んが爲めの努力は一なるも、其の肌合に於て多大の相違あるに因らざるば非ず。

▼投機に鉅富を成せるもの、曩に天下の絲平あり。桑名の諸戸清六あり。皆富を以て一代に傑出せるも、社會事業に至りては殆んど見るに足らず。甲州の若尾逸平、根津嘉一郎の如き、又投機によりて富を得、然る後に事業界に轉じたる也。未だ社會的ならざるは、何等在來の投機系の富豪と異ならざるを覺ゆ。

▼事業と云ふも、其の性質一ならず。殖産工業の如き、貿易業の如き、鑛業の如き、國益を意味せざるに非ざるも、之を以て私腹を肥すの具となさば、決して國利公益の爲めと謂ふことを得ず。社會的なりと讚美することを得ざる也。

▼明治年間に崛起せる三菱の如きは、此の事業の裡より生れたる富豪也。海運業に、銀行業に、造船業に、新日本の文明に貢獻する所素より尠からずと雖も、之に因りて自家の富を増殖せるは疑ふべからず。而して其の鉅富に伴ふ所の暗影も亦、決して尠しと謂ふべからず。

▼三井、三菱の富愈々増大すれば、國內の貧民益々頭數の多きを加ふるや明か也。貧富の懸隔甚しきを致せば、兩階級の反目今日の如くにして止まらず。我が邦富豪の富力は、未だ甚だ大ならざるを以て、兩階級の敵視すること歐米の如くならざるも、暗流は既に此の岸を打ちつゝあり。

▼我が邦の富豪は、脚下の缺陷損失に對して狼狽するも、階級競争の來らんとするを思はず。常に自

家の贏利にのみ熱中して、社會的事業を閑却す。斯の如きは、富豪の社會的存在を自覺せざるに由る也。

▼銀行家安田善次郎は、勤儉力行して今日の鉅富を得たりと自稱し、又世間よりも然か信せられたり。其の致富の經歷には投機類似の所業なく、却て高利貸に似たるを發見す。營々努力、層々積富の苦心は、齋藤、鬼權の徒の及ぶ所に非ず。

▼高利貸は高利貸を以て立つも、銀行家は銀行家を以て任せざるべからず。社會の信用を保維し、自家の品格を傷けざるの用意を要す。彼れは自家の獨立主義を奉ずること極めて篤きも、社會的事業に對しては一顧眈をだも與ふるに吝也。

▼三井は慈善病院を創立し、大倉喜八郎は商業學校を起し、森村市左衛門は小學校を設け、大橋新太郎は圖書館を經營し、多少社會的傾向を有するも、安田は頑として慈善事業に關係せず。日電併合問題に至りて、其の面皮を剥がるゝに至れり。「富」の爲めの富豪は、毫も社會的に存在の價値を有せず。

▼吾人は、三井の病院、大倉の商業學校を以て、彼等の社會的事業の意味を解せりと讃嘆する者に非ず。或は患者の收容に遺憾ある、或は廣告に利用するの傾向ある、非難すべきの點點からざるも、鉅富を擁して何等社會的事業に盡さざるに比すれば、盡す事の優れるを賞せざるを得ず。

(四)

▼我が邦富豪の缺點は、歐米の夫れに比して、富力の大ならざるにも非ず。大なる事業を計畫せざるにも非ず。唯自家の爲めには、他を犠殺するも顧みざるの卑劣心なり。事業の爲めに事業を起し、黄金を是れ得れば、以て足れりとなすにあり。

▼古河の足尾銅山が鑛毒事件を惹起せるが如き、淺野のセメントが深川區民を粉殺しつゝあるが如きは、自家の利益を擁護するに急にして、公衆の安全と生命とを顧慮せざるの致す所ならずんば非ず。彼等富豪たる者は、宜しく社會の趨勢に鑑みて、過去に於て執り、現在に於て執りつゝある冷酷なる所業を改めざるべからず。

▼我が邦の富豪は、官府と結托して利益を壟斷するの弊あり。夫の御用商人と稱する者は勿論、中央の大富豪は政府の當局者と握手し、地方の小富豪は地方官廳と腹を合せ、國民の痛苦を意とせざる也。斯の如きは、少數富豪の利益の爲めに、貧富階級の戦を激發するもの也。

▼彼等は富を積みて、富の活用を知らず。富みて益々富まんとするが故に、鉅富を擁するに従ひて愈々卑劣心を増長する也。子孫の爲めに美田を買ふの無意義なるは何人も知る所、而も彼等富豪は何人も知る所の無意義を敢てする也。

▼米國のカーネギーは、富を活用する事を忘れず。其の富を以て、社會的事業に投じつゝあるは、富豪の分を知る者ならずんば非ず。近時我が邦にも、小カーネギーを學ぶ者現出するに至れり。富は子孫に遺すべきものとの舊習より脱して茲に到れるは、其の財力大ならずと雖も、亦注目し値せずんば非ず。

▼信州山形村大池の永田兵太郎は、私財三十萬を擧げて居村附近の社會的慈善事業に投じ、神戸の村野山人は、百萬圓を以て乃木神社の建立及び徒弟學校設立の計畫をなせり。其の額大なりと云ふべからざるも、是れ彼等の全財産なるを思はゞ、某々富豪等の濟生會に百萬圓を投じたと同一視すべからず。

▼村野は第二回總選舉以來、二たび選ばれて代議士となれるの經歷を有す。今回捨財の動機は、乃木將軍の死に感激せるにありと云へば、動搖せる時勢の空氣に接觸せることを俟たず。

▼永田、村野の以前と雖も、慈善事業若くは學校經營費中に寄贈せる者尠からず。然れども彼等の寄附額は九牛の一毛に過ぎず。善男善女の一厘を賽するよりも、尙少額たるを免れず。此の二人者に至りては、所謂小囊の底まで拂ひたる也。全財産を投じて、社會的事業の爲めに盡さんとする也。大に其の志を壯とせざるを得ず。

財界元老論

井上馨—松方正義—澁澤榮一

(一)

▼財界に隠然たる一大勢力が控へてゐる。表面には別に大した勢力のあるやうでも無いが、裏面に潜んで居る勢力は恐るべきである。で、一大勢力と云ふよりも、寧ろ一大潜勢と云つたが可いかも知れぬ。内閣組織の際でも、此の暗礁に觸れると内閣が成立せず、縦令成立しても破壊するやうな羽目になる。何れの内閣でも、其の意向を確むる爲めに、そつと探りを入れて見る必要はある。財界に阿附するとか何とか非難されても仕方がない。然うせぬと安心が出来ないから、其の意向を確めての上にするのである。又一事業を企てやうとすれば、矢張り其の賛成を得るか、縦令賛成は得ない迄も反對をされぬやうに用心して置かねばならぬ。そこで其の意向を確めて、成るべく暗礁に觸れないやうにする。若し實業界に紛紜でも起れば、其の一大勢力を利用して、居中調停なり、威壓なりを請はねば

ならぬ。今日の財界には然うした一大勢力が潜んで居る。何う名づけて可いか一寸分らぬが、假りに之を財界の元老と云はう。政治上の元老を真似たやうで可笑しいが、元老と云つた方が誰れにも分りよいのである。

▼財界の元老——是れは、觀察の仕様で、人物の選定が違ふが、十目の見る所、十指の指す所、皆が見てウンと頷く事の出来る人物を擧げれば可い。併し、玆で擧げると云つた所で、新に夫れを選舉するのでは無い。大抵見る所が決まつてゐる。小さい事を云へば、大阪財界や名古屋財界の元老と云ふ様な者もあらう。東京でも、銀行界や株式界の元老と云つた風の者もあらう。けれども、其様な狭い範圍だけの元老は、日本財界の元老では無い。玆に擧げる所の者は、勘くとも日本的の者である。地方的の者は、先づ其の資格は無い。斯う云へば、直ぐ何人も、指を侯井上馨、男澁澤榮一、侯松方正義の三人に屈するであらう。子田尻稻次郎なども入るべき順序ではあるが、彼れは理論の方面だけで實際方面には密接な關係はない。多少の關係は有るとしても、『大』と稱する程の勢力は無い。政府の財政に對しては、權威を揮ひ得るとしても、民間經濟には押が利かぬ。富豪としては、随分種々な顔觸はあるが、以上の三人の様な權威と、勢力とを有つて居らぬ。之より聊か此の財界三元老の勢力と周圍とを觀察しよう。

(二)

▼侯井上くらの他方面に活動した人は、大臣の中にも餘り無い。幕末には軍人であつたが、維新後になつて、政治家、外交家、財政家と云ふ風に縦横に手腕を揮つた。就中彼れの重んぜられて居るのは實業界の顔役で、世話好きであるからである。

▼侯井上の始めて財政に關係したのは、明治五六年の頃で、岩倉大使一行が歐米漫遊中、大藏大輔で其の留守居役を勤めた。當時は薩長土肥の暗闘が激しく、今日なら陸海軍の豫算分捕競争の様な事が文部、司法の兩省の間に行はれた。司法卿は江藤新平であつたから、却々頑強である。財政當局者の侯井上が如何に之を拒んでも、頻りに多額の經費を要求する。文部卿も亦盛んに要求する。到頭文部、司法の兩省と、大藏省の衝突となつて、侯井上は男澁澤と共に意見書を提出して、冠を掛ける事になつた。是れは明治六年五月であつたが、此の衝突は前年の豫算の時にも有つたので、侯井上は辭表を出さんとしたが、伯大隈が調停して漸く無事に收まり、六年には殆んど調停の餘地が無かつたので、其の儘となつて了つた。

▼侯井上の財政策は消極方針で、國費の徒らに膨脹することを憚慨して居る。彼れは飽く迄も勤儉貯蓄主義で、政費節減、國富増加と云ふ持説である。動もすれば、彼れは悲觀的に陥り易いが、其の遺

り口は無責任ではなく、頗る堅實である。が、國力の膨脹する新日本の財政策としては、餘りに消極に失した。挂冠後は財政上の關係を離れて、民間の實業界に一指を染めた。彼れは殖産興業の大旗を掲げて先收會社を起して、其の總裁となつた。而して、前山口縣令中野悟一、男藤田傳三郎の二人が兩翼となりて働き、益田孝も亦重役で大に社勢を緊張したのである。

▼明治八年大阪會議の結果、侯井上は再び政府に入つたが、其の後も三井組の顧問となり、藤田組の相談役として、實業界に幅を利かして居た。藤田組との關係は以上述べた所で明かだが、三井組の關係に就ては一寸説明せねばならぬ。由來三井組は舊幕時代の爲替御用で、維新後も小野組、島田組と共に、政府の爲替方となつてゐた。處が、明治五六年以來銀紙の差違が生じ、政府自ら金融の衝に當るの必要から、俄かに會計法を實施し、且政府の公金を嚴密に検査する事となつた。政府は民間の影響などは顧みずに、小野、島田に對して斷然たる處置を取つたのである。果して東京は勿論關東、東北に一大恐慌が襲來したのである。其の時、侯井上は、私かに三井組の主管三野村利左衛門に注意を與へた。之が爲めに三井家は、小野、島田の二家と運命を等しうしないで済んだのである。所謂侯井上は三井家の救の神である。然うした關係で、彼れは今日に至るまで三井の顧問となつてゐる。益田孝の三井物産に入つたのも、侯井上の推薦に依るのである。

(三)

▼侯井上は政府に入つても、外交や内政の方面だけで財政には關係しなかつた。當時は侯松方正義が藏相で、内閣創立後の財政を殆んど一身に負うて立つて居た。侯松方も最初は無難で通過して來たが、愈々帝國議會が開かれ、豫算が隅から隅まではじくられる時代になつては、安閑として居る事は出來ぬ。軍備充實と云ふ聲と共に、議會では豫算削減を絶叫し、官民兩黨の軋轢は益々激烈となつたのである。明治二十四年五月には松方内閣を組織し、首相兼藏相になつたが、選舉干渉の紛糾で、翌年の夏に瓦解して了つた。其の後釜に据つたのが、子渡邊國武である。が、財政が意の如くならぬ。到頭弱音を吹いて辭意を洩したので、遞相に移すと共に侯松方を引出して其の椅子に据ゑた。夫れは二十八年三月であつたが、戦後經營の意見が首相伊藤と合はない爲めに、翌年の八月に挂冠した。其の後任は又逆戻りして子渡邊となり、茲に有名な戦後經營の十年計畫と云ふものを立てた。而して一年ばかり行つて見たが、旨く行かない。旨く行かないので内閣が斃れ、其の跡に松隈内閣が出來た。兼任藏相は無論侯松方で、四千三百萬圓の公債を海外に賣出し、幣制改革を斷行して金貨本位制を採用する等、諸有積極政策を試みたのである。さうして、第二期軍備擴張をする爲めに、前藏相の十年計畫を變更したが、増税の必要を感じて來たので、愈々地租増徴と云ふ事になつた。が、進歩黨と薩派と

の間に軋轢を生じて、伯大隈は挂冠し、内閣分裂して、遂に交迭を見るに至つた。

▼其の後繼内閣は、所謂伊井内閣で、侯井上が藏相となつた。殆んど二十四五年も財政に關係しなかつた彼が出現したので、公伊藤も大に安心し、難關を切り抜け得るものと信じて居た。侯井上も乃公が出れば、圓滿な解決がつくものと思つて居た。さて愈々其の局に當つて見ると、章魚の足を切るやうに輒くない。彼れは此の難局に當つても、依然として年來の持説は捨てぬ。矢張消極方針を取つて出來得る限りの節約を實行し、其の不足額は止むを得ず増税に據る事とした。で十年計畫の費目中、不急の費目を順次後年に繰延べるの計畫を立てたのである。斯くて子渡邊の十年計畫は再び改められたのである。けれども、地租増徴案が議會の容るゝ所とならなかつたので、此の政策は實行されずに内閣は瓦解して了つた。

▼侯松方の財政政策は臨機應變の處置に出で、時に借金政略を談じ、外資輸入をして事業を起すの可なることを説き、積極方針で景氣を附けるが、侯井上は消極一點張である。個人としては質素儉約、國家としては政費節減、さうして國富を増さねばならぬと云つた風である。明治の初年に先收會社を起したのは、だいふハイカラな事業であつたが、當人ハイカラは大嫌ひである。

(四)

▼侯松方も、侯井上も、民間の銀行會社の頭取とか、社長とか云ふものにならぬ。前者は官途にのみ就て居たから、然う云ふ機會も無かつたが、侯井上は成らうと思へば、幾らも成れる機會は有つた。が、元老の手前輕々しく進退することが出來ぬ。何時も顧問とか、相談役と云ふ所で、御免を蒙つてゐる。侯松方は自分は當面に立たないが、其の俸を實業界に配置して居る。遣り口は却々利口である従つて其の勢力も年々に伸張するのである。

▼侯井上の關係は、單に三井、藤田に止まらない。貝島、古河、鴻池、今村の諸家にも密接な關係があり、公毛利の家政にも干與してゐる。彼れは感情家で、或時は熱鐵のやうになるが、或時は氷よりも冷かになる。究り冷熱の烈しい人である。で、親戚知友などに世話を頼まれると、熱心に斡旋もし親切に世話もして、其の人を感激せしめるが、癪に障ると所嫌はず叱り飛ばすのである。其の氣性さへ知つて居れば、長く變る事は無い。以上の富豪は、其の俠骨だけを買つて居るから、彼れと密接な關係を保つて行けるのである。

▼貝島太助は、侯井上に最も傾倒してゐる一人で、家憲まで持へて貰つてゐる。侯井上の貝島と知合になつたのは、明治二十三年二月に九州旅行の際であるが、其後貝島の炭礦事業の危かつた時、毛利家の資金を以て救済したのである。貝島は非常に之を徳として居る。侯井上は總て斯う云つた調子で

性。來。の。世。話。好。き。と。義。俠。心。と。を。以。て。一。旦。信。じ。た。人。を。援。助。す。る。に。吝。で。は。な。い。が。自。分。の。手。か。ら。金。を。出。し。て。人。を。援。ふ。と。云。ふ。様。な。事。は。餘。り。聞。か。な。い。

▼男。澁。澤。も。世。話。好。き。と。云。ふ。點。に。於。て。は。善。く。侯。井。上。に。似。て。ゐ。る。が。人。物。は。圓。滿。で。あ。る。侯。井。上。の。や。う。に。感。情。に。走。る。事。が。な。い。だ。け。紛。議。の。和。解。と。か。居。中。調。停。と。か。云。ふ。事。に。適。し。て。居。る。明。治。六。年。挂。冠。後。直。ち。に。實。業。界。に。入。り。夫。れ。か。ら。一。度。も。官。途。に。就。か。ず。幾。多。の。銀。行。會。社。に。關。係。し。た。か。ら。其。の。方。面。の。信。用。勢。力。は。大。し。た。も。の。で。あ。る。人。格。に。非。難。の。無。い。だ。け。夫。れ。だ。け。金。を。溜。め。て。も。餘。り。惡。く。言。は。れ。な。い。貧。乏。者。で。も。男。澁。澤。に。對。し。て。は。反。感。を。持。つ。て。居。な。い。や。う。で。あ。る。是。れ。が。他。の。新。富。豪。と。違。ふ。點。で。あ。る。

▼侯。井。上。は。藏。相。に。な。つ。て。味。噌。を。付。け。た。が。彼。は。如。何。に。推。薦。さ。れ。て。も。成。ら。う。と。は。せ。ぬ。事。實。上。の。藏。相。否。夫。れ。以。上。の。權。威。を。以。て。立。つ。て。ゐ。る。最。う。時。代。が。進。ん。で。來。れ。ば。何。時。ま。で。も。男。澁。澤。で。は。無。か。ら。う。が。今。日。は。尙。彼。れ。の。勢。力。は。あ。る。昨。年。の。桂。内。閣。で。も。彼。れ。を。利。用。す。る。爲。め。に。女。婿。の。博。士。穂。積。陳。重。を。文。相。に。擬。し。た。穂。積。は。學。者。肌。の。男。で。上。院。議。員。を。辭。し。法。科。大。學。長。を。も。罷。め。て。專。心。法。律。の。研。究。に。身。を。委。ね。た。の。で。あ。る。か。ら。遂。に。出。な。か。つ。た。夫。れ。が。却。つ。て。穂。積。の。幸。福。で。も。あ。り。男。澁。澤。の。爲。め。で。も。あ。つ。た。彼。れ。は。先。年。總。て。の。公。職。を。辭。し。て。か。ら。第。一。銀。行。を。根。據。と。し。て。居。る。位。の。も。の。だ。が。ま。だ。却。々。退。隱。さ。

せては置かぬ。時々實業界の活舞臺に引張り出される。經濟上の諸問題は云ふ迄もなく、外交上の問題にまで容喙する事を餘儀なくされる。財界の表面に立つ大立物は、何と云つても男澁澤である。

五大富豪の色彩

三井—三菱—住友—鴻池—安田

(一)

▼觸目一番、三菱は官具を覚え、三井は商氣を感ず。此の二大富豪より受取る所の氣分は臆て二家の異なる色彩を語るものならずんば非ず。

▼三井は舊幕の素町人也。商賈たること既に久しく、十呂盤の掛引、理財の才、先天的に備はれるを見る。三菱は土佐藩の士分也、王政維新の後、官界に入り、更に轉じて實業家となるもの、其の前

代の家風、性格、二家甚しき懸隔あり。

▼更に新舊の差別より觀れば、一は老舗にして、一は新店也。其の財力の上より云ふも、一は由緒ある金満家にして、一は役人上りの新富豪也。金満家には大福長者の風あり、優容迫らざる所あり。新富豪には才氣縱横の態あり。瞬時も油断せず。

▼大福長者は、弗箱を擁して茶室に隠る。金錢の勘定、取引、總て番頭の手を煩はす。其の帳場にありて、蟹甲に湯氣する者は旦那に非ずして必ず番頭也。丁稚は番頭の怖るべきを知りて、旦那の前にニコくす。

▼才氣縱横氏は、自ら信ずる所あり。自ら計畫を立て、自ら事務を處理し、自ら東奔西走し、其の頼む所の手腕を試みずんば歇まず。番頭は影に隠れて、主人は事務室の中央にあり。丁稚小僧の輩に至るまで常に主人の威風を仰ぎ、主人の眼の黑白を見て活動す。

▼吾人は、三井、三菱を以て總て斯の如くなりとは云はず、然れども何程か斯の如き所あり。三井は凡百の機務番頭の合議に決し、三菱は一切の金權主人の掌中に緊握せらる。前者を以て共和政治とすれば、後者は即ち專制政治とすんば非ず。

▼三井は陽氣也。其の營業振は花々しく、活氣あり。三菱は陰氣也。其の遣り口は堅實にして、滋味

あり。前者は自動車式にして、後者は馬車式也。一は坦路を走るに成功し、一は遲日長堤を驅るに適す。

▼致富の新舊よりすれば、舊きは堅實にして保守に傾き、新しきは豪放にして進取の途に出づべき筈也。然るに、三井、三菱は全く相反し、新しきは守成に傾き、舊きは却て進取の途に出づ。是れ其の共和と、專制との差より來れり。

▼三菱は、先代の財力を失はんとを虞れて倉庫を嚴密にし、其の遺業に全力を傾注す。三井は苟も發展の機會を得れば、更に進んで新境地を耕し、以て新勢力を扶植し、新富源を拓かんとす。一は主人當然の義務にして、一は番頭の取るべき必然の措置たらざるを得ず。

▼活不活は、更に新人物の吸收と否とに起因す。三井は要樞に人材を網羅し、又新人物の用ひるに足るものあれば、直ちに拔擢して好地位を與へ、手腕を發揮するの壇場となす。三菱は譜代の異材を斥け、事務的才物をのみ採用し、其の報酬の如きも、三井に及ばずと稱せらる。

(11)

▼專制政治の三菱は、男岩崎久彌及び男岩崎小彌太の二家に過ぎず。共和政治の三井は、新男爵の八

(196)

三井の先代彌太郎は創業の偉才を抱き、一代にして鉅富を成せる程の人物也。豪放、磊落、機智、共に兼ね備へて、風流の情話も亦尠からず。久彌に至つては、別個の趣味を有せず。自らの消極方針によりて事務に精勵するのみ。

▼三井の事業は、銀行、保険、倉庫、鑛山、造船等にして何れも地味なるもの也。造船の如きは稍危険性を帯ぶるも、一面國家的事業なるを以て、浮沈定り無きものには非ず。唯銀行の如く、保険の如く儲からずと云ふに過ぎず。

▼三井は事業の性質を選ばず。銀行、保険、倉庫、鑛山、製紙の如きは勿論、紡績、呉服の如き盛衰の甚しき事業にも關係す。殊に物産は、其の事業中の最も花やかなる者にして、三井の造船と並びて二家の特色なりとす。

▼三井に比して、三井の地味なるは、單に事業の性質の然るのみならず、其の營業振に於ても亦然り

三井は呉服店によりて流行界を刺戟し、社交上に色彩を添へつゝあるも、三井は今日までは草花々たる三井原によりて、都人士を驚かしめたるのみ。

▼銀行に至りては、三井、三井の派手と地味とを最も能く語るもの也。三井銀行は二千萬圓の大資本にして株式組織なるも、三井銀行部は僅かに百萬圓の資本にして、三井合資會社の一部たるに過ぎず而も其の責任の點に至りては、井銀の有限なるは、菱銀の無限なると孰れぞや。

▼斯の如く、兩家の派手と地味とに別るゝは、其の首腦者の趣味、性格、手腕を異にするに由らずんば非ず。三井の家長は保守的なるも、三井の總本家は其の何れに屬するか不明也。然るに、其の首腦部を見るに至りて、三井の進取的たる所以は瞭然たり。

(III)

▼三井の大番頭に、才人益田孝あり。三井に入りてより四十年、口も八丁、手も八丁、合せて十六丁ほどの技倆を有す。伶俐滑脱、細心周到、而も縦横の手腕を揮ふに至りては、快刀亂麻を斷つ概あり。

▼三井の總本家八郎右衛門は、三井合名會社の業務執行社員兼社長なるも、唯其の椅子を占むるのみ、

(197)

是れが帷幕にありて畫策し、内外一切の機關を總攬する事實上の權力者は益田也。益田は、斯かる意味に於て三井の中心人物也。

▼由來益田は、派手好の男也。其の事業に活氣あり、進歩あり。其の營業振の生彩煥發の觀あるは、彼の趣味性の發露ならずんば非ず。彼れは事業を以て趣味となし、其の事業に依りて趣味の満足を得んとす。事業の爲めに囚はれざる所に、彼れの趣味の天地はあり。

▼益田は派手好なるだけ、人物に何程か輕き所あり。其の趣味に行き、才に走るの結果、所謂才人輕薄の誹を免れざる事あり。侯井上は彼れの側にありて小言役を勤め、三井の事業、財政等を監視す。

▼三井の一族は、各其の職務を有すれども、男岩崎の如く自ら裁斷するに非ず。毎日、判と共に其の椅子にあり。八郎次郎の物産に社長たる。三郎助の鑛山部長たる、高保の銀行部長たるも、皆配下の人材に待ちて、業務を處理しつゝあり。

▼三井は、其の要樞に新進有爲の人物を配置す。年齢、學歷、功勞等は敢て問はず、唯だ其の手腕あるを登用す。三井の人物は、總て腕本位也。腕なきは落伍し、之あるは一躍して樞機を握ること難からず。

▼物産の山本条太郎は、學歷なきも霸氣縱橫の手腕家也。曩に理事を以て上海にあるや、其の鬼才膽

略群を抜き、三井物産をして重からしめたるのみならず、一面商業的の外交家の實を擧げたりと稱せらる。

▼銀行部に早川千吉郎あり、頭腦、手腕、人格、共に三井の重鎮たるに足る。其の下に新進の池田成彬及び米山梅吉あり。皆な三井の新智腦也。彼れ等にして三井にあらしめば、恐らくは課長以上に出でず。三井にありては、男久彌とともに洋行せる串田萬藏の如きも、今尙ほ一營業部長たるに過ぎず。

▼三井の朝吹英二は、早川と共に三井の中樞人物也。朝吹は趣味の人、清新の空氣に活きんとするの人格を有す。工博團琢磨は、鑛山に勢力を据ゑ、三井の一大柱石たるを失はず。

(四)

▼三井の益田は、先年退隱せる莊田平五郎也。彼れは堅實にして時勢を解せず、保守一天張の人物也。お家大事と奉公の誠を致すも、更に大事なる事業の擴張を策するに吝なるのみならず、引込思案に機會を逸せしこと勘からず。

▼益田は儲ける機會あれば、必ず之を放たず。機會なきも、猶且之を利用せずんば歎まず。彼れの豪富

は人の知る所、繪畫骨董の類を合すれば優に五百萬圓に達すべしと。然るに莊田は月給五百圓の外餘得なく退隱の際二十四萬圓の配與を得たるに過ぎず。大番頭の財力、二家に於て斯の如き差異あり。

▼三井の番頭にして、職務以外の儲け事を敢てするは獨り益田に止まらず、新進の人物之を試みざるはなし。腕本位の三井は番頭悉く富み、薄給の三菱は然らず。三井の山本の如きは、一支配人にして百萬圓以上の富を成せるも、三菱の人物にして彼れ程度の者は何程か風車の觀なくんば非ず。

▼益田對莊田は、三井、三菱の派手と地味とを遺憾なく説明す。益田の下には新進氣鋭の人物ありて、活氣横溢す。莊田の下には堅實の老人ありて、石橋を叩きつゝ渡るを常とせり。

▼豪放洒落の豊川良平を除けば、他は悉く莊田式色彩を帶ぶ。銀行部の三村君平の如き、鑛山の工博南部球吾の如き、本店の莊清次郎の如き、孰れか手堅き人物に非ざる。莊田既に去ると雖も、彼れが三十年間染め立てたる彩色は、容易に改飾し得べきに非ず。

▼豊川を以て政治家となさば、大石の茫漠と、犬養の雋銳とを併せたるが如く、巨然たる首領的人物也。毫厘の勘定は彼れの長所に非ざるも、事を行るに周密の計畫と、十二分の用意とを以てす。

▼豊川は、群雄駕御の才力あり。其の背後に金力あること勿論なるも、彼れは人材を蒐集し來りて、三菱の周圍に配置す。其の遣り口花やかならざるも、堅實にして精力自ら充實す。

▼副社長小彌太は、英國仕込なるも、米國風と云はまほしき所あり。事業的頭腦あり手腕あるを以て無爲に安んずること能はざるかに見ゆ。而して、在來の保守より轉じて、進取に向はんとするに似たり。

▼豊川の管事として、彼れの片腕となれるは、三菱將來の爲め慶すべき現象也。小彌太に伯父彌太郎の血の環れるあり、良平に群雄駕御の才力あり。彌太郎に配するに平五郎を以てせるが如く、小彌太を助くるに良平を以てせるは、蓋し、好個の對照ならずんば非ず。

(五)

▼安田は、其の堅實なるの點稍三菱に似たるも、三菱の如く穩健にあらず。其の遣り口の辛辣なる、辛辣にして財界を縦横に斬り捲くる所、安田獨特のものと言はざるを得ず。其の富力の漸く増大して、三井、三菱の次位に立てるは、此の獨特の辛辣を揮ひたるの結果也。

▼安田は銀行王と稱せらるゝも、銀行以外の事業にも亦關係す。關係すと雖も、三井、三菱の如く、特設直屬のものに非ず。或は投資の意味に於て關係を結び、或は抵當流れとして攫取せるもの也。

▼安田は飽くまでも、銀行中心也。銀行を中心として、諸方面に貸付け、而して羽翼を張り、盛んに

活動を試みつゝある也。彼れは、相當の擔保と責任とを以てすれば、其の實業と虚業たるに論なく大膽に貸付を斷行して、少しも躊躇せず。而も、失敗に歸せざるのみならず、之が爲めに禍を轉じて福となし、自個勢力の發展に資す。

▼「轉んでも唯は起きず」と云ふ俚諺は、安田の遣り口を穿ち得て骨に徹するもの也。夙に起きて儲け、轉ぶも尙成功を忘れず。彼れは一城を抜けば一城を固め、一壘を陥るれば一壘を守り、漸次歩武を進むるの、勇猛なる征服的態度は、財界をして目を峙てしむ。

▼安田の家族的組織は、舊富豪三井に類す。創業の人善次郎は名義上退隱して、家督を養嗣善三郎に譲れるも、彼れは保善社の大總統也。安田家全般に亘りて、其の峻嚴なる監督を怠らず。

▼大總統の下に、善三郎、善之助、其他都合十一家あり。新進の善雄をして更に一家を創立せしめば十二家となるべし。安田は都下に多くの地所を有するが故に、其處に邸宅を構へて一族を配置す。

▼三井十一家の旦那は、大抵番頭任せなるも、安田十一家の主人は、總て自ら致々として執務す。前者は名義上の權力者にして、後者は實際上の手腕家也。新舊富豪の色彩の差は、又此の處にも觀取することを得。

(六)

▼往年、三井と東西に相對せしは、大阪の鴻池也。鴻池と云へば、寧ろ三井以上の大福長者の如く世人の耳に響き居たり。今日に於ては、三井、三菱は勿論、遙に住友、藤田に駕されんとす。住友は舊富豪たるに於て、三井、鴻池に譲らず。其の家系に至りては、遙かに夫れ以上にあり。

▼住友は舊幕の時、既に別子銅山を以て鑛業界に雄視せり。然れども、彼れは幕末の悲運に際會して殆んど破産の窮境に瀕せしが、廣瀬宰平の敏腕能く之を未だ頽れざるに挽回し得たり。

▼爾後、住友の家運大に張り、今日に至りては、銀行を始め、別子鑛業、伸銅、鑄鋼、若松炭業、倉庫、電線製造の七大事業を營めり。而して、新文明と接觸するの點に於て、鴻池の舊套を保守するとは其の趣を異にせり。

▼三井、三菱の評語を以て、鴻池、住友に當て箴むれば、一は地味にして、一は派手也。但し派手の氣分は三井の夫れと異なる所あるも、其の新進氣鋭の人物を登用する點に於て、營業振の活氣横溢するの點に於て相似たるものあり。

▼住友の當主吉左衛門は、公德大寺及び侯西園寺の實弟也。明治二十五年養子となり、既に二十餘年

間斯界の空氣を呼吸せるを以て、尋常貴公子の亞流に非ず。畫策經營の才子に加ふるに、高潔なる氣品を以てす。其の家長として、人材を網羅統率するには詭向也。

▼男住友の帷幕に參する者、鈴木馬左也あり。彼れは帝大出身の法學士にして、殆んど一手に切て廻しつゝあり。寛容の主人に配するに、勇斷果決の手腕家を以てす。其の事業の緊張する、謂はれなきに非ず。

▼男鴻池善右衛門は、温厚、守成の人也。彼れは其の主たる銀行業に意を注ぎ、東京方面に新勢力を扶植せんとするが如きも、其の支店は未だ住友の活動に若かず。彼れにして、如上の四大富豪と雁行し、若しくは之を雁行せしめんと欲せば、大に振ふ所なかるべからず。

五大銀行總裁論

日銀總裁子爵三島彌太郎——正金頭取井上準之助——興銀總裁志
立鐵次郎——勸銀總裁志村源太郎——鮮銀總裁市原盛宏

四總裁一頭取の政治系統

▼日露戰役前までは、政府者の辣手が銀行に加へられなかつたから、日銀でも、正金でも、政治系統の外に超然として立つことが出来た。縱令政治系統内の人でも政府者の手足とならず、銀行獨自の方針で進んで行くことが出来た。處が、日露戰役の際から、辣手が漸く加はり、政府者の爪牙に引つ掻き廻さるゝ様な始末となつた。當時の首相桂、藏相曾根等が日銀に高壓を加へて、總裁山本達雄をして辭職の餘儀なきに至らしめた。而して其の後釜には、理財局長の松尾臣善を据ゑた。松尾は循吏ではあり、拔擢を辱うしたのではあり、日銀其の物の性質とか、機能とかを健全に發達せしめやうとはせず、唯々諾々藏相曾根の命を惟れ奉じたのである。折角基礎を築き上げて、政治系統外に立つて來た日銀も政府の理財機關となり、大藏省の一局と化して了つたのである。

▼夫れ以來、内閣は日銀のみならず、藏相監督の下にある銀行に眼を著ける事になつた。而して藏相なども銀行家より抜き、直接間接に民間銀行家に媚を呈するやうになつた。孰れの内閣も、其の第一の難關は財政であるから、金融機關の操縦を度外視する事が出来なくなつた。夫れだけ、財界にも政治系統が結び付き、政治的勢力が扶植さるゝに至つたのである。西園寺内閣は藏相に勸銀の山本達雄

を抜いて財界を呀と云はせ、山本内閣は日銀の男高橋是清を藏相に陞任した。で、藏相と銀行總裁とは一種の關係が結ばれ、政府者は銀行を手足とするに非常な便宜を得る事となつた。今後は銀行界に於ける政治系統は濃厚になる一方で、従前の如く政府に對して權威を持つこと能はざるに至るであらう。

▼男高橋が藏相になると、其の後釜に据ゑられたのが、正金頭取の子三島彌太郎である。彼れは現内閣の首相山本とは最も關係の深い薩派の一寵兒である。夫れに藏相とは、正金時代に兄弟弟分の關係がある。新任の正金頭取は井上準之助で、子三島の下に副頭取を勤めて居た男である。大分出身の關係から、農相山本とは先輩後輩の縁があり、又屢々拔擢されてゐる。此の二人者は、どの方面から見ても現内閣系統の人物である。勸銀の志村源太郎、興銀の志立鐵次郎は舊内閣の任命だが、其の政治系統は灰色である。實業界より云へば、志村は三菱系の代表者で、志立も准三菱系位の處にある。推薦者は豊川良平で、拔擢者は前藏相若槻である。若し若槻と熱い握手を交換して居れば、志立は長闊とも見る事が出来やう。孰れにしても、志村と志立は非現内閣派である。

▼鮮銀の市原盛宏は、最も鮮明なる非現内閣派である。彼れは公伊藤に簡拔された者で、朝鮮の財界に御輿を据ゑて随分長い年月を経てゐる。勢力も可なり扶植したらしい。現内閣の利益とも衝突する者がありと見えて、薩派や政友會から白い眼で睨まれて居る。志村のやうに財閥關係の無いだけ、彼

れの地位は危からう。

『不如歸』の主人公と紳士道の保維者

▼子三島は、縦令夫れ程の人物でないにしても、世人の好奇心を惹くに足るものが二つある。其の一は鬼總監と唄はれた三島通庸の伴であること、其の二は小説『不如歸』に現はれた川島武男のモデルであること——是れが、彼れの名聲を高からしめる原因となつてゐる。然るに、彼れは馬鹿でない、却々確かりした人物である、鬼總監の血を受けて、怪辣慄悍、冷靜沈著、と云ふ代物で、奇策縦横と云ふ活動的才能を有つてゐる。『不如歸』の武男のやうな感傷的の性格や、温情花の如きものや、そんな詩的分子は藥にしたくも無い。重厚の貴公子に非ずして、權變を弄する謀將である。川島よりも、寧ろ千々岩に似てゐる。實際公大山の娘を娶つたのだが、彼女の病痾に囚はるや、家風に合はないと云ふ理由の下に離縁してゐる。薩摩隼人だけに、女一匹などは、大した問題にして居ない。『不如歸』のモデルと云ふ處から想像して、子三島を以て『早く歸つて頂戴な』の武男さんとなさば、大に失望する事があらう。

▼子三島は、政治家と云ふよりも、一箇の事務家である。正金に關係して居つた爲めでも有らうが、

數字が能く見える。經濟の事情にも暗くない。事務を執れば、其の事務を片ツ端から處理して行く。貴公子のやうに虚位を擁して、其の椅子に收まり返つて居るのではなく、自ら手を下して處理して行く。政治家としては餘りに策を弄して策の爲めに人格を傷けるが、事務家としては侮るべからざる手腕があつて、滅多に失策をするやうな事はない。

▼彼れは二度までも米國に行つてゐる。而して其の修めたのは、農政學と昆蟲學で、今日の彼れの仕事とは没交渉のものである。役人としては、北海道廳技師、遞相黒田清隆の秘書官となつたゞけである。秘書官を罷めてから、彼れは政治の方に釣り込まれて、研究会の一員となり、上院に議席を占めるに至つた。是れが抑も彼れの名を成す最初で、上院の論客、研究会の策士と云へば、必ず三島彌太郎の名を擧げる事となつた。長閑に壓迫されて、追々と凋落しかけた薩派には、彼れの如きも亦少壯政治家として意を強うせしめたのである。

▼彼れを財界の人物としたは、云ふ迄もなく侯松方である。上院の花形役者を正金に飲め込んで、此の方面にも勢力を扶植せしめたのは、薩派の手抜かりの無い所である。新華族の子には、才子肌の伯後藤猛太郎や、事務家の男郷誠之助等がある。伯後藤は或る意味に於ける疑問の人だが、男郷は其の手腕は相應に認められても居れば、相當の地位も得てゐる。子三島に比すれば、政治的野心のないだ

け、財界には發展するであらうが、進む處は大概知れ切つてゐる。子三島は未知數である。肌合から云つても、男郷などは違つてゐる。日銀を踏臺にして、薩派の勢力を扶植し、將來は藏相になる抱負を持つて居るらしい。西園寺内閣の時は、藏相推薦を辭退したと云はれて居るが、夫れのみで彼れに野心の無いとは斷定されぬ。彼れは鐵腕を練つて、來るべき時機を待つて居る者である。

法學士井上は、餘り早く上り過ぎる程、早く上り詰めた。彼れは大分閥を負つて居なければ、副頭取までも上れたか何うかは疑問である。疑問ではあるが、副頭取位は相當の處である。處が、水町袈裟六の兼任を解かれると同時に、一躍して頭取に陞つた。子三島に比べると、まだ貫目が足らない。單に事務家として、財界に放り出せば、子三島にも劣らぬ手腕を發揮するであらう。輪廓の大小は逆も比べ物にならぬ。

彼れは明治二十九年の帝大出身で、日銀に其の半生を送り、四十三年に紐育代理店監督から、正金副頭取に轉じたのである。彼れの手腕を認められたのは、日露戰役の際に、國債募集事務整理の任に當つた時にある。人物は圓満で、多趣味である。容易に人に許さなかつた高山樗牛が、彼れを評して『日本人としては稀有の紳士道を保維する者』だと云つて居る所を見ても、紳士の典型である事がわかる。個人としては申分は無いが、頭取としては何程の成功を收め得るだらうか。子三島の日銀をして

中央銀行の機能を完全に發揮せしむるや否やの疑問なるが如く、井上の頭取の手腕に於ても暫らく大なる疑問點を打つて置く。

三閥具備の寵兒と福澤の女婿

勸銀の志村は、明治二十二年の帝大出身で、興銀の志立と同期生である。三十になるやならぬに工務局長に陞進し、人をして其の異數なるを驚かしめた程の幸運兒である。其の幸運の淵源は何處にあるかと云ふに、本人の才幹は云ふ迄もないが、三閥を併せ負つて居る所にあると認められて居る。然らば其の三閥とは何かと云ふに第一は學閥——彼れは帝大出身の銀時計組である。第二は財閥——彼れは富豪三菱と縁戚の關係がある。第三は閥閥——彼れは男岩崎小彌太の従妹を娶つて居るので、財界に幅が利くと云ふ點にある。そこで、彼れは頓々拍子に陞進して、勸銀副總裁となり、次で總裁ともなつたのである。

志立は財閥關係は薄いが、福澤諭吉の女婿で、進路に妨げのある方ではない。然るに、彼れは志村のやうに坦路を進んでは居ない。迂餘曲折もあり、波瀾もある。さうして其の波瀾は、彼れ自身が起した傾きがある。彼れは好んで險阻を辿り、困難な途を歩んで來て居る。志村は甲州人であるが、其ら來て居るのである。

志立は日銀ではストライキ組の一人として退き、九州鐵道には一年半ばかり居るうちに仙石貢と衝突して罷め、住友銀行には前後八年勤務したが總理事の鈴木馬左也と衝突して飛び出してつた。彼れは一種の骨があつて、容易に人と折合はない。苟も是非の論すべきあれば、上役の者と抗争して下らない。銀行家でありながら、圭角があつて、浪人風な氣質がある。新聞記者には適して居るやうだが『大阪朝日』の經濟部長となつて、左程評判もなく、其の手腕も勝れてゐると思はれなかつた。矢張り彼れは學閥の銀行家で、圭角さへ没すれば、其の方面で成功する人であらう。

由來興銀は財界の伏魔殿と云はれたゞけ、情弊の縋まつて居る所である。仲買總裁添田の方針を一變して、眞に興銀の興銀たる所以の實を擧げるでなければ、其の發展を期し難き状態にある。彼れは志村などよりも氣骨があり、客氣があるから、左顧右眄する所なくして、廓清を行ふであらう。廓清を行ふには、同じ穴の貉では出來ない。彼れの如きは、先づ適任である。伶俐にして圓滿なる點に於ては、無論勸銀の志村とは比べものにならぬが、それだけ亦將來が面白い。どうか充分の活動をして

貰ひたいものだ。虚情は銀行家の禁物である。

權勢爭奪の焦點鮮銀の總裁

鮮銀の市原は、濫澤系の人である。熊本の産で、同志社を卒業し、米國のエール大學にも學んでゐる。仙臺の東華學校長となり。同志社政法學校教頭となつた時分は、宗教界の一權威であつた。新島襄の感化を受けた人物として、青年から崇拜されたものだ。が、いつしか方向轉換を行つて日銀に入り、金庫課長心得となり、名古屋支店長となりて、全く實業界の人となつた。明治三十五年、男濫澤に隨行して海外を視察し、歸朝後第一銀行の横濱支店長となつた。次で横濱市長に推されたが、三十九年に辭して、再び第一に舞ひ戻り、取締役兼韓國支配人と出世した。鮮銀總裁となつたのも、其の縁故關係に由るのである。

市原は、よく熊本人に見る一種の蠻氣があり、抜作のやうに見えて伶俐な所がある。一見温厚の長者風で謹慎の態度に出るが、ちよい／＼と策を弄する事がある。宗教界に入つて宗教界に留まらず、天國から足を踏みこらせて、十呂盤の上に落ちたのは、所謂肥後人の氣質を露出したのである。其の遣口は金森通倫や、横井時雄などに稍似てゐる。横濱市長時代には器量をあげたが、朝鮮赴任後は可な

り非難がある。非難はあるが、又一方には盛んに發展して、大連、長春、奉天等に支店を設置したのである。公伊藤の歿後、彼れは總督寺内に取り入つてゐるが、夫れだけ現内閣には喜ばれない。薩派でも政友會でも、滿韓の利益に垂涎して居るだけ、鮮銀なり、滿鐵なりを自己の勢力圏内にしようとして居る。で、滿鐵總裁や、鮮銀總裁の更迭やが、持ちあがつて来る

今日市原には大した失態もないから、彼の儘にして、もう少し手腕を揮はせれば可いのであるが、政友會側では野田卯太郎を後任に擬して、運動を試みてゐる。卯太は三井系の人物で、原敬の乾兒で、何程か侯井上の庇護も蒙つてゐる。曾て勸銀總裁の椅子を狙つた際には、三菱系の志村に蹴落されたが、今回こそはものによつと必死になつて居るらしい。市原の同情者には男濫澤などが控へて居るが、野田の後援ほどに有力でない、緊揮一番しなければ、無能の大塊に嘗められるであらう。

民間五銀行の首腦

第百銀行池田謙三—北濱銀行岩下清周—三井銀行早川千吉郎—

第十五銀行園田孝吉—村井銀行村井吉兵衛

民間五銀行——と標題を置いて、民間五大銀行とせぬのは、銀行を標準とせず、人物だけの評論を試みようとしたからである。夫れならば、強ひて五人と限らずとも可からうと云ふが、本誌五周年記念であるから、成るべく『五』に縁のある者にした。七周年なら七福神とでもする方が結構至極なぢやが、まだ夫れには二箇年の間隔がある。今年はこの邊の所で、延喜を附けよう云ふので、御叮嚀、御親切にも、顔觸の面白さうなのを五人選んだのである。

若し是れが、都下の五大銀行となると、ちよつと選び憎い。世間では第一、三井、三菱、十五、第百を以て五大銀行と稱して居るが、其の資本金、諸預金の上から見ても、是れよりも大きいのがある。安田は即ち夫れである。彼れは單獨でも五大銀行の第四位くらゐには据れようが、更に其の系統の諸銀行を合すれば、日本随一である。誰やらが銀行界の大魔王と云つたが、安田は其の財力の點のみならず、遣り口から云つても確かに大魔王である。

單獨の安田に雁行する者は、川崎、東京、東海、豊國の諸銀行である。其の下には、中井、村井、二十、丁酉、森村、八十四、二十七、帝國商業の諸銀行が控へてゐる。森村は小資本ではあるが、預金高は村井や二十などを凌いでゐる、創立者の信用其物と、營業振とは、銀行の盛衰に非常な關係がある。近年東京大阪間の取引が頻繁なるに伴ひて、大阪の諸銀行は東京に羽翼を張つて來た。そして

其の營業振の華々しいのは、北濱、住友、鴻池、浪速の諸銀行である。就中大資本の一千萬圓の北濱が諸方面に活動してゐる。

斯う云つて見ると、標題の民間五銀行は、其の大小の差別觀から來たので無い事がわかる。其の人物は、即ち標題の側に陳列してある通りの人物で、第一流の銀行の頭取もあれば、第二流の銀行の經營者も居るのである。さて、其の人物は、果して銀行界の注目を惹くに足る敏腕家であらうか。

第百の池田

池田謙三は、しまりやである。能く舌を出す、金は出さぬと云はれて居る。銀行家は一種の生きた金庫番で、金を出したり入れたりするのが本分であるのに、出さぬと云ふのは不思議である。恐らく何かの誤解であらう。成程平生を見ると、綿服に銀時計と云ふ質素な風をしてゐる。節儉で然うなのか、鄙吝なのか、偽善を粧うて居るのかは知らぬが、兎に角眞面目な人物のやうに見える。感情の激しい人物は、時に冷血とも指彈され、時に濃情とも賞讃されるのであるが、池田は其の何れの極端にも走らず冷静な常識の人物である。情實など云ふ事を顧みない、頗る銀行的頭腦の發達して居る人物である。夫の安田善次郎と何程か似寄つた型で、其半面に非難を有するものも、其處にあらう。

池田の第百は、銀行としては第二流にあるべき筈だが、社会からは優に第一流の銀行として認められて居る。彼れが専務の時代から、第百の池田か、池田の第百かと云はれた程、銀行界に信望のあつた者である。其の營業振は如何にも堅實である。彼れは能く喋舌るので、大風呂敷を擴げると思ふ人もあるが、實際は却々大風呂敷どころか小風呂敷も擴げない。時々起る財政上、經濟上の諸問題に就て意見を吐露するが、大抵當らず障らずの穩健主義である。近年は多少氣焔を吐くやうになつたが、爲めに胸中に屢氣樓を描くやうな事はない。終日兀々と執務し、正直勤勉を標榜して立つてゐる。名を賣る爲めに、諸種の會社に關係すると云ふ事はせぬ。二三會社には關係はあらうが、雄飛的野心は起さぬ。飽くまで第百の池田に安んじてゐる。だから、自己の關係銀行から、他の關係會社に、情實的貸付などを行ふことは毛頭ない。銀行家としての彼れは、徹頭徹尾堅實である。綿服銀時計主義である。議論を闘はして、『あのね、ね、ね』を連發するのは、銀行界の評判となつてゐる。

關西財界の雄

岩下清周は、理性の人である。劣敗者の自滅に歸するのは當然だと云つた風な顔をして、將來のないは者は顧みないが、働きのある者は何處までも援ける。そして、其の材幹を發揮させ、大成させるこ

とに盡力する。彼れは、財界の英雄主義者で、弱者の同情家ではない。何でも人間は辛抱が大切である、辛抱すれば此處に自然に金が生れる。其の金で以て事業をする、成功するまで辛抱する。辛抱すれば屹度成功すると云つた風に、倫理的に人生の半面を歩いて居る人である。彼れは信州人だけに辛抱が強く、又伶俐で、機敏に立廻るのである。

岩下は高商の前身たる商法講習所の出身で、暫く同校の教師をして居た。其後、三井物産に入り、十年間は米佛等の支店長となつて外國に居た。歸朝後は總支配に擧げられ、夫れから陸進の途が開けて、財界の勢力者となつたのである。此の間に彼れは侯井上に食ひ下り、公桂と握手して、抜くべからざる勢力を大阪に扶植した。今日彼れの周圍、毀譽紛々たるものあるに拘はらず、大阪で事業を起さうとする者は、彼れを開却することが出来ぬ。其の肩書を見れば、代議士、北濱銀行頭取、阪神電氣、豊田式織機の各取締役、大阪瓦斯の監査役、營口水電の社長、滿鐵の監事、大阪商業會議所特別議員と云ふ四方八面に關係がある。人を使ふことや、部下を統率することは下手では無いが、細利に拘泥するので、人格は疑はれるやうな事がある。

併し、岩下は噂ほど惡辣な男では無さ相である。曾て巴里に居た時、公桂は公使館附武官として同地に勤務して居たが、まだ素寒貧であつたので、屢々彼れのポケットマネーを借出したさうである

其様な關係があつたので、公桂は岩下と昵近にして居たのであるが、世間からは岩下の方が權勢に阿附したやうに云はれて居る。一體が權家の表門から訪問せず、裏門から出入するが如き態度があるので、餘り善く云はれないのである。けれども、北濱銀行の柱石となり、幾多の事業にも關係し、代議士にもなつて居ると云ふ活動振は、精力の弱い者の眞似得ない所である。

園田と早川

園田孝吉の前身は外交官で、久しく海外に在つたので、何となく上品で、辭令に巧みである。初對面の人にも、惡感を抱かせるやうな態度が無いので、交際上には非難の尠ない人である。生國は薩摩であるが、蠻勇的な、野豬的な所はない。如何にも英國紳士と云つた風な感じがある。此の感じは何人も同一だと見えて、彼れは英國紳士の型だと云ふ事に一致して居る。が、彼れは唯其の型だけの人物で、敏腕家では無い。曾て、日銀や正金に居たが、大した腕も振はず、失敗もなかつた。其の無難な所が、園田の特色で、十五の頭取に擧げられたのである。

園田の型は、能く十五の性質にはまつて居る。此の銀行は華胄界の機關と稱されるだけ、大資本を擁してゐる。そして、其の營業振に頑固な偏狹な所はない、園田の人物相應な貸付をやつてゐる。夫

れで居て、比較的成績が擧つてゐる。三井は、資本の點に於ては十五を駕して居る。先づ民間銀行の第一位で、商工業界に勢力を持つてゐる。其の主腦は、是れも役人上りの早川千吉郎である。

早川は金澤の生れで、明治二十年の帝大出身の法學士である。加賀藩士と云ふ縁故で、侯前田の家政顧問になつてゐる。彼れは何等主角のない、圓満な人物である。單に性格が然うである許りでなく、顔其の物が之を象徴してゐる。其處が即ち彼れの人に愛され、信用される點で、侯前田に信頼されるのも偶然ではない。

今ざつと彼れの經歷を洗つて見ると、彼れは大藏省の參事官で、可なり手腕を認められて居たが、遂に中上川の知る所となつて、三井に入つたのである。法學士ではあるが屁理窟は言はず、實務に當つて腕を鍛へて、漸次に地歩を占めて來た。それに先輩にも善く、後進にも惡からず、新舊の調和劑ともなり、上下の楔子ともなる機才がある。然らば暫間のかと云ふに、決して然うではない。保つだけの品位は十分に保ち、成すべき事は十分に行ふ。小心翼翼と云ふ風では無いが、濁肉派たり得る惡度胸はない。園田の溫良に稍、活氣を加へたやうなものだ。そこで、中上川の歿後は、一躍して事務となり、銀行界第一の人氣者となつたのである。

早熟の村井

村井吉兵衛と云へば、餘程の老人のやうに思はれて居るが、まだ五十歳の働き盛りである。然るに彼れの老人と思はれるのは、其の名の聞えること既に古く、其の成功したのが年少の時分で、所謂早熟の人であつたからである。

村井の名の始めて社會に知られたのは、サンライズとか、ヒーローとか云ふ巻煙草と同時である。一般には巻煙草の名が早く聞えて、次に村井の名が知られたのかも知れぬ。兎に角、ヒーローとか、サンライズとか云ふ廣告は、日本全國の名勝の風致を害する程盛んに試みられたので、驚異と憎惡との二つの眼で見居たものだ。此の時は村井の僅かに二十七歳の時で、米國人から其の製法を學び、自ら製造して賣出したのであつた。賣出の順序から云へばサンライズが最初で、ヒーローは其の次である。前者に成功した彼れは、直に米國に渡航して其の製法を研究し、其の得たる新知識で以て後者を製造したのである。

村井は京都の生れで、是れぞと云ふ教育を受けて居ない。父が煙草店を開いて居たので、彼れは小僧となつて働いてゐた。素より機敏な男だけに、早くも巻煙草の有利なる事を觀て取り、其の機運に

鞭ちて進んだのである。自分の製造の巻煙草が、果して其の圖星に當りて大に儲け、三十五歳の時は合名會社村井兄弟商會の社長となつたのである。兄弟商會の名がハイカラなので、殊に世の注目を惹いた。明治三十五年には再度の洋行をなし、米國の煙草會社と協同して、五百萬圓の外資を輸入し、其の商會を株式組織に改め、全資本一千萬圓の大會社とした。是れが、天狗煙草の岩谷松平の反感を買つて、大に攻撃されたのである。

さる程に、煙草專賣法が實施されて、村井は政府から一千萬圓以上の代價價格を受取つた。で彼は銀行業で暫く骨休めをしようと思ふので、資本金百萬圓を投じて村井銀行を創立したのである。其の資本金は三井の二十分の一であるが、村井一家の機關とはせず、財界一般の金融機關として活動してゐる。けれども、其の信用は、銀行夫れ自身よりも、創立者の手腕を信するに由るのである。彼れは此の一銀行だけで満足するものではない、隼の如き眼を石油界に注いでゐるやうである。彼れはまだ春秋に富むことであるから、餘り狡猾な手段を弄せず、品性を修養して、財界に大を成すべきである。

鐵道及海運界の五人物

日本郵船社長男爵近藤廉平——大阪商船社長中橋徳五郎——東洋汽船社長淺野總一郎——滿鐵總裁中村是公——電車部長井上敬次郎

疑問の航路補助

北守南進の聲の裡から叩き出されたのが、海軍擴張である。海軍擴張の機運に促されて、航路補助問題の熱度が日一日と高くなりつゝある。海軍擴張は假想的戰時の準備で、航路發展は平和の刻下に於て必要なる計畫である。で、其の航路發展に就ては何人も異議のない所であるが、航路補助と云ふ事は研究を要する問題である。而して、其の問題の下に横はつて居る大會社は、大阪商船及び東洋汽船、夫れに日本郵船と云ふ既得権者である。

此の三會社の中で、規模の大きいのは云ふ迄もなく日本郵船が第一で、次に大阪商船、東洋汽船と云ふ順序である。が、規模が如何に大ききとも、經營者其の人を得なければ發展せぬ。脳髓に病所が

あれば肢體の働きが自由ならず。其の働きが自由でなければ、大兵肥滿の人物と雖も何の役にも立たないのである。如上の問題の三大海運會社の主腦は、如何なる人物であるか、表裏兩面より之れを觀察する。

今、吾輩の組上にある主腦者は、曰く日本郵船の男近藤廉平、曰く大阪商船の中橋徳五郎、曰く東洋汽船の淺野總一郎即ち是れである。

バロン近藤

男近藤は、日本郵船の前身三菱會社時代より二十五年勤続して居る。丁度彼れが三菱の横濱支店長となつた時であつたが、共同運輸會社が新に起つて、猛烈なる競争が開始された。當時の神戸支店長は吉川泰治郎と云ふ敏腕家であつたが、彼れは之と東西相應して新設會社に肉迫し、奮闘頗る努めたものである。結局兩社は日本郵船の名の下に併合され、茲に本邦海運界の覇權を握る事となつた。次で彼れは部長となり、副社長に進み、遂に社長の地位を贏ち得たのである。

素より日本郵船は彼れ一人の事業ではなく、彼れ一人の功勞だけでない。が、日本郵船と云ふ者と男近藤とは、其の發達の上に至密な關係を持つてゐる、男近藤が幹部に居らすとも、日本郵船は發達

するには發達したろうが、彼れが居た爲めに今日の如き發達をなしたとも云ひ得るのである。併し彼れは自ら大事業を計畫し、新彩を發揮すると云ふ創意の人ではない。既設事業の整理者となり、夫れを整理しつゝ漸次發展し、擴張して行くと言ふ順調に進むのである。間接にもせよ政府保護の下に立つて、發達して來た日本郵船などには適當な人物であるが、民間事業界の波瀾に投じて尙能く游泳し得るやは疑問である。

男近藤は徳島の出身で、豊川良平の妹婿である。少時漢籍を修め、變則に英語を學んだと云ふ位で普通學の素養はない。素養は無いけれども、多年世間學を修めて來てゐるので、人物も相應に出來て居り、海運界の事情には精通してゐる。始め豊川の傳手で三菱の社員となり、追々男岩崎彌太郎に認められて、播州吉岡の銅山所長に擢んでられ、更に高島炭坑に轉じて所長川田小一郎の下に事務を執つて居たが、用ひるに足る人物であると折紙が付いたので、遂に横濱支店長の要樞に据ゑらるゝに至つた。斯の如く彼れは、官吏的段階を踏み、殆んど何の苦勞もなしに今日の地位に陞つたのである。彼れの金力を握り、バロンになつた徑路は、中橋や淺野に比べれば極めて平凡である。平凡な者はバロンにもなつたが、事業界の幾波瀾を凌ぎ、更に大なる波瀾を乗切りつゝある淺野などは、種々な非難を蒙つてゐる。

セメント淺野

▼日本郵船の汽船數は八十隻で、其の總噸數が三十五萬噸、東洋汽船は九隻、七萬七千百十七噸餘である。前者を海上大王とすれば、後者は海上小王くらゐの差はあるが、大型最進式の汽船を所有し、南米、北米等に定期航路を開いてゐる。此の海上小王が、高輪臺下に金の鯨銖を朝日夕日に輝かすの邸宅を持つて居る、セメント淺野總一郎である。

▼彼れは富山の醫者の倅であるが、醫者になるのが可厭で、十二三歳から商人になる下稽古を始めた明治四年東京に出て、獨立營業を試みたのは、お茶の水附近で一杯水屋と云ふ珍無類の商賣である。夫れから赤門前でおでん屋を開き、多少の儲けがあつたので、横濱に赴いて味噌小賣業を營み、漸く商賣の呼吸を覺えたのである。が、彼れは小さな儲け位では腹の蟲が承知せず、何か大儲けをしようとする苦心焦慮の結果、石炭の廢物利用を企てたが、此の妙案が運命を開くの鍵となつて、遂に數萬圓を儲け、石油より進んでセメント業を營み、今日の鉅富を築き上げたのである。而して一杯水や石炭滓も利用の仕方によつては、黄金を産む事が出來ると云ふ事實は、淺野の手で立證されたのである。

▼淺野は斯様な世路の辛酸を嘗め、社會の風浪に揉まれて來たので、其の人物も海岸の巖のやうに出

來てゐる。趣味と云ふ程の趣味もなく、爛れて見ても意味はなく、唯頑丈なだけである。甲州、越後と共に成金系統に属する富山の産だけに、辛抱強く、機智横溢してゐる。手腕辛辣で、目的の爲めに手段を擇ばずと云ふ點は、否定する事は出来ない。彼れに取るべき所は、妙に計畫の頭腦が有つて、新事業を創意する事である。此の事業的手腕のある點は、安田なども信じて居るやうである。

▼淺野は人格野鄙だと云ふ非難がある、此の非難の爲めに彼れは事業上餘程の損をして居る。東洋汽船の重役問題なども、究り茲に起因してゐる。伊東祐忠を排斥して、女婿の白石元治郎を擧げたのは暗い影を伴ふものと斷定された。由來同會社は、四十一年以降萎靡不振の域にあつたが、著々財政の整理を圖り、内部の刷新をやつたので、近時順潮に向つて來たのである。夫れだけに、斯る内訌があつたので、一時は危機を叫ばれたが、とうやら無事に解決がついた様である。淺野は事業的手腕はあるが、部下を統率する徳に缺けて居る。事面倒になれば、蠻勇をやつ付けて了ふと云つた風である。難關に突き當れば、倍一倍の勇氣を振つて突破して行く所は可いが、社會に對しては多少し光明の眼で接しなければならぬ。女婿白石などは帝大出身で、學識才幹のある男だから、宜しく岳父の智識となつて、社會的事業を起さしむ可きである。

法學士中橋

▼大阪商船の中橋は金澤の生れで、明治十七年の赤門出身である。此の頃彼れと共に、名物男と稱されたのは、金子堅太郎であつた。金子は官界に入つて、巧みに游泳して居たので、二たび大臣になり子爵をも授けられた。然るに、中橋は役人には爲つたが、管船局長となり、鐵道局長となつたゞけで民間に下つたから、無爵の實業家に過ぎぬけれども、爵位は必ずしも人物を測るの尺度ではない。中橋が無爵であるからとて、金子より豪くないとは云へぬ。今日の金子が政界から隱退して居るのに、中橋は關西の實業界に飛躍し、海運界に雄視して居るのは、或はより以上に豪いかも知れぬ。

▼夫れは各人の觀察で、何うでも可いとして、是れから中橋の人物と事業を觀よう。彼れは其の姓名の如く中庸を得て、徳のある人物である。五徳のやうに火に掛けても熱せず、感情に走らず、鐵瓶も支へれば、土鍋も載せて、實力だけの働をする人である。柄に無い藝當をやつて、大向うの喝采を博さうとする野心はない。其の風采を見ても、重厚朴訥であるが、機才の閃きはある。實力を内に蓄へて外に露はさないが、一旦露はせば其の遂行力は非凡である。

▼大阪商船は、明治十六年の創立で、當時は資本金五十萬圓であつたのを、二十七年十月に一千萬圓に

増資したが、結果が思はしくないので、三十一年二月に五百五十萬圓に減資する事となつた。其の内部の改革やら、財政の整理やらを斷行する爲めに入社したのは中橋である。彼れは既に、役人として海運界に手腕を揮つた經驗を持つてゐた。其の跡仕事は容易でなかつたが、彼れが熱心に事に當つた結果は良好で、在來の頽運を挽回したのである。而して再び増資計畫を立て、三十九年には一千六百五十萬圓の會社となし、遂に今日の發展を見るに至つた。瀕死の大坂商船を蘇生させ、面目を一新したのは中橋の功勞に歸さねばならぬ。此の點、男近藤の日本郵船に對する功勞以上の價値がある。

▼中橋の事業は、獨り之に止まらない。彼れは宇治川電氣に快腕を試み、市政刷新にも努力した。但し、市政刷新は或度まで其の目的を達したが、大なる成功として謳歌する事は出来ぬ。夫の腐敗は既に久しいのであるから、根柢から改善するので無ければ駄目である。是れには、流石の中橋も今以て手を焼いてる有様である。昨年彼れは代議士となつたが、其の當選資格が一問題になりさうで有つたので、辭職して了つた。あゝ云ふ人物が一人でも政界に居れば、面白いのであるが、一通常議會をも經過しないのは惜むべきであつた。

是公と井の敬

▼海運界を去つて、鐵道界を見渡すと、滿鐵に中村是公がゐる。電鐵の方面には、市電の電車部長に井上敬次郎がゐる。鐵道院に永年勤続した副總裁平井晴二郎は、鐵道界の功勞者である。今は支那政府の鐵道顧問になつてゐるから、茲には省く事とした。現總裁の床次は、特に鐵道界の人物と見るべきほどの功績が無いから、是れ又茲に擧げぬが至當であらう。

▼で、海運界の三人物に對して、鐵道界は二人物——雙方で五人物と云ふ事になる。滿鐵の中村はまだ辭職もせぬのに、早くも後任問題が八釜しい。而して、其の後任候補者は一人娘に型入の格で、伊集院彦吉、平岡定太郎、辻博添田壽一、佃一豫、柳生一義、河上謹一等の呼聲が聞える。誰れの呼聲が一番に高いか低いかわからぬが、『一』に縁のある人物の多いのは奇體である。先づ、どの顔を見ても適任らしい者はない。數年間經驗を積み、經營方針なども會得して來た是公を排斥し去つて、新顔を當て嵌めて見た處で、果して何程の手腕を揮ひ得よう。若し眞に政争を離れ、系統に拘泥せず鐵其の物の發達を圖る積りならば、少くとも是公以上の人物を擧げねばならぬ。徒らに役徳を當て込みに薩派なり、政友系なりを新任すとせば、恐るべき情弊を招來するのである。

▼井上は熊本の出身で、自由黨の壯士などをやつて居た。壯士と云つても、當時の壯士は今日の不良少年見たやうな者ではなく、年こそ若かれ總て燕趙悲歌の士であつた。自由民權の理想に憧れて、天

下國家の事を痛論して居た。彼れも亦其の亞流で、自から國士を以て任じて居たのである。偶ま北米歸客の成功談に心酔し、大に儲ける積りで、海外に渡航した。行つて見ると、名にし負ふ黄金國でも金門灣頭の波の平が黄金と化る譯でも無かつた。何か事業を起さねば金儲けが出来ぬものと悟つたので、歸朝後熊本移民會社を創立した。處が、人の懐中から金が零れるやうに儲かつたのである。移民の味——一たび此の味を嘗めた彼れは、餘りに刺戟が強烈なので、長くやつて居ると神經衰弱に陥ると觀て取つたので、儲けた金を抱いて、星亨一派に依りて企畫された街鐵に入つたのである。是れが抑も鐵道界に、頭を擡げるに至つた第一歩である。

▼街鐵外二鐵が併合されて東鐵となり、夫れが東京市に買收されると同時に、彼れは市電に入つて、電車部長となつたのである。井上は電氣工學のノートに親んだ事は無いから、そんな學理は深く知らない。學理は深くないが、實地の經驗があるから、經營の手腕は確かなものである。彼れは役人となつた事のないだけ、其の臭味はない、事務を見るにもこせつかないで、鷹揚な所がある。細事をほじくらないで、大局を觀てゐる。以前は三錢均一の主張者であつたが、現時の四錢均一(通行税共五錢)に默從した。時勢の推移に依る進歩と云へば、然う見られぬ事もないが、競争者が無いから値上すると云ふのでは、正理を知りつゝ、非を遂げんとするのだ。近時更に五錢均一の議が起るが、恐らく市會の

説で、井上の意見ではあるまい。彼れは如何に森久保一派に關係あるにもせよ、公益の爲めに在來の持説を捨てるやうな事が有つてはならぬ。彼れの手腕を以てすれば、今日の賃金で、充分に電車の運轉が出来ぬ事は無からう。

實業界の新進人物

池田成彬—米山梅吉—門野練八郎—成瀬正恭—土方久徵—生田
定之—加納友之介—綾井忠彦—串田萬藏—武藤山治—和田豊治
—田邊熊一—粟津清亮—村瀬春雄—海老原介太郎—玉木爲三郎
—原錦吾—北里裳袈男—高倉藤平—安藤保太郎—中島久萬吉—
井坂孝—木村清—寺島成信—中島滋太郎—藤田平太郎—松方巖
—正作、幸次郎、正雄、五郎、乙彦、正熊、義輔—神田鐺藏
—岩本榮之助

(一) 金融界

三井銀行の花形

三井銀行の花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形
自らは自らの花形

▼改革後の三井銀行は、新進氣鋭の人物を其の要樞に据ゑてゐる。専務の筆頭は、圓滿にして敏腕の聞えある早川千吉郎で、其の左右兩翼の觀あるは、池田成彬と米山梅吉の二人である。彼等二人は、三井銀行の改革者たる靈腕辣手の中上川彦次郎に抜擢せられて歐米に派遣され、銀行業の見學をして歸朝せる新智識である。中上川の歿後は、早川の雙翼となつてゐるが、彼等は其の遺圖を繼いで、ますます發展の策を講じてゐる。三井銀行の花形と云へば、先づ此の二人と、夫れに營業部長の門野鉢八郎を挙げねばならぬ。

▼池田は、中上川の女婿である。慶應義塾卒業後、三井銀行に入り、足利支店長の際に歐米見學に赴いた。米山は青山學院に學び、夫れより米國に渡航して苦學すること八年、シラキユースの宗教學校を卒業して歸朝した。歸朝後は雜誌記者となり、教員となつて衣食の資を得て居たが、素より其の望む所ではなかつた。漸くにして日鐵に入り、次で三井銀行に轉じたのである。前者の平坦な路を歩ん

で來たのに比すれば、後者は難關を蹴破し來つて、始めて廣野の道に出でた程の相違はある。して、血洗となつて米國に學んだ彼れが再び海外に航する時は、平坦な路を進んで來た池田と同じく三井銀行の銀行業見學者であつたのだ。人間の出世は、其の出立點の如何には依らぬ。其の運命と、努力との如何に因るのである。

▼米山は愛嬌があつて、初對面の人にすら不快感を與へぬ。洵に如才のない銀行家である。輕薄だと非難する者もあるが、交際上手と輕薄とは自ら違ふ。輕薄とは操守の確くないこと、其の態度の輕佻浮薄なことである。無愛嬌の人にも輕薄な者はあるが、愛嬌のある人でも輕薄で無い者は幾らもある。米山の如きは、即ち後者に屬する。銀行家としては、趣味もあり、手腕もあるので、外交方面の適材である。曾て横濱支店長の時、外國人との取引に重きを置いて、自分で華客廻りをして擴張した結果、從來の取引に三倍した好成绩を挙げたさうである。之を見ても、彼れの適材の那邊にあるか分るのである。

▼門野は慶應義塾の出身で、三井銀行に入つてから二十年間一日も缺勤しないと云ふ程の勤勉家である。酒は連日痛飲しても平氣で、酒の爲めに職務を怠ることは無い。徹宵酒に浸つても、翌朝九時にはちやんと銀行に出勤する。事務を執ることが敏捷で、眞面目で、頭腦も散漫ではない。夫れに如才

なく、人づきが好いと来て居るから、營業部長としては其の人を得たと云はねばならぬ。將來は池田の後を襲ひて、事務の椅子に据ゑらるべき人であらう。

頭取成瀬正恭

▼三井の池田成彬、十五の成瀬正恭は、銀行界の對幅のやうに思はれた時代もある。池田の米國仕込で米國風あり、成瀬の米國仕込であり乍ら英國風のあるのを、一種の對照としたのである。彼等は共に同年の三田出身で、銀行は異なるが殆んど同等の地歩を占めて來たのである。第十五銀行の保守的で、頭取園田孝吉の氣風に化されてゐる事は何人も認める所であるが、成瀬は其の下に在つて幾分づつ新空氣を流入したのである。

▼成瀬はコーネル大學卒業後、歸朝すると程なく横濱正金銀行外國係となり、轉じて日本貿易銀行の取締役支配人となり、後擢んでられて十五の副支配人となり、遂に本店支配人となつたのである。而して、彼れは今や丁酉銀行の頭取として、其の手腕を試みつゝあるのである。

▼成瀬の始めて園田に知られたのは、横濱正金に就職以來である。園田は當時頭取であつたが、深く其の材幹の用ひるに足るべきを知つた。で、園田は十五に入ると同時に、彼れを登用したのである。

彼れの材幹は、園田によりて其の光彩を發揮したのである。彼れは明敏果斷、業務を刷新するの手腕を持つてゐる。單に舊套を死守する人では無く、縱令夫れを守るにしても、自分の考慮を加へて、多少の改善を施しつゝ守る人である。支配人としてよりも、頭取として却て成績を擧げ得るかも知れぬ。性來多藝多能であるが、殊に圍碁が好きである。其の圍碁にも、思慮周密の半面が表はれてゐる。才氣に任せて横柄に振舞はず、交際振が圓滑であつて、冷酷性を露出しない爲めに受けが好い。

日銀の雙璧

▼日本銀行の營業局長土方久徴と、國庫局長生田定之とは、注目し値する人物である。土方は明治二十八年の赤門出身の法學士で、生田は明治二十三年の三田出身である。前者は富豪三野村の女婿で幅が利き、後者は自分の才腕を以て進路を拓いて來た。圍碁、球突等の遊戯も、兩人互角と云ふ事である。

▼生田は、月給十八圓の下級から漸進して、米國に留學を命ぜられ、歸朝後検査役、調査役、小樽支店長等となり、三十九年に現今の椅子を占むるに至つたのである。彼れは才の人で、才の爲めに身を誤りはしまいかと思はるゝ程、才氣縱横生彩煥發と云つた風である。其の趣味の如きも亦多方面で、

唄も歌へば踊も躍り、柔術もやれば野球もやる。政治經濟の事を談ずるかと思へば、文藝、美術の事を喋々と辯ずる。其の造詣は深いと云ふ事を得ないが、廣く通じて居る事は確かである。其の何でも屋と云ふ所が、彼れの人氣のある所で、屈托せずに暢氣に世を送り得らるゝ所以である。

▼土方も、其の何でも屋なる點に於て生田に似て居る。神經衰弱者の多い赤門の出身中では、珍しいほど多趣味の才人である。若し其の才と、婢とで苦勞する人がありとすれば、必ずや彼れは其の一人であらう。赤門を出ると直ぐ日銀に入り、營業部第一課の書記となりて月給二十五圓を頂戴し、翌年函館支店の營業課主任となり、次で歐米に派遣されて英國ハース銀行に實務を修め、歸朝後検査役となり、日露戰爭の際國庫局長に進み、四十一年現地位を占めたのである。生田より五年遅く日銀に入り、二年早く國庫局長になつた所を見ると、學問及び閑閑が餘程手傳つて居るやうである。併し手傳つて居るとしても、之が爲めに彼れの奇才と敏腕とが、其の價値を失ふものではない。彼れが三野村長屋の第一號に居て、天下の財界を睥睨して居るのは、ちよつと面白い圖である。

加納と綾井

▼住友銀行の加納友之介と、村井に居た綾井忠彦とは、其の養子たるの點に於て似てゐる。加納は前

代議士立川興の弟で、二十二歳の時加納甚之助の家を繼ぎ、綾井は本姓は伊東儀藏であつたが、養家を嗣ぐに至つて全く新粧の別人となつたのである。

▼加納は明治二十九年帝大出身の法學士で、農商務省で役人の稽古を始めた。其の手習の上手になつた時は、もう參事官となつて商工局に居た。夫れより衆議院書記官、拓殖銀行理事等を歴て、三十六年住友銀行に入り、東京支店長となつたのである。世話好きではあるが、何處か役人臭のあるので人づきが悪く、ともすれば冷罵を浴せ掛けるので、氣の弱い銀行員などは唯最ら縮み上つてゐる。一高時代には端艇や擊劍の選手となつて運動界に鳴り渡つて居たゞけに、今日でも竹刀自慢である。態度の悠揚迫らず、ピシ／＼財界に切り込んで行く所は、此の擊劍の呼吸から悟入したのかも知れぬ。住友支店は北濱の夫れに比して、活動が鈍いやうであるが、大に活人劍を揮つて、不景氣の挽回策を講ずべきである。

▼綾井は明治二十三年の郵便電信學校出身で、通信技手から一轉して、實業界に投じたのである。長く米國で苦學したゞけに、英語に堪能で、英文計算書の作成に長じてゐる。村井銀行の副支配人より進んで、支配人となつたのは明治四十年である。律義者で、偏狹ではあるが、業務を見ることは熱心である。村井銀行には、男振のよい村井貞之助が居るかと思へば、商賣に拔目のない倉知誠夫が居る。

其の下に又、斯う云ふ人物の居つたのは、面白い配合と云はねばならぬ。

三菱銀行の逸材

▼三井銀行の新進氣鋭の人物を網羅して居るに反し、三菱銀行は比較的舊い手堅い人物を配置してゐる。營業部長の申田萬藏は、三菱では先づ新進の部に組み入れて可からう。

▼申田は、日本橋の海產物商の件で、米國仕込のハイカラである。ハイカラの勘ない當時は、實際ハイカラで有つたのであるが、今日は稍蠻殻に近い方である。彼れは明治十八年帝國大學豫備校に入り米國に航してペンシルバニア大學を優等で卒業したが、同窓の中には子三島彌太郎、男岩崎久彌なども居た。卒業後直ちに紐育のブラウン商會に入つて實務に従事した。本邦人が外國人と肩を並べて仕事をすると云ふ事は樂ではないが、敏腕の彼れは輒く行つて退けたのである。明治二十七年歸朝すると共に、三菱銀行に聘せられて、大阪神戸の各支店副支配人となり、三十四年本店に入りて副部長となり、漸く現今の地位を贏ち得たのである。若し彼れを他の銀行にあらしめば、頭取か副頭取ぐらゐに成つて居たかも知れぬ。

▼申田は、銀行家中では至つて無粋な方である。家庭以外に出て、豪遊を試みる事はしない。鄙吝で

あるかと思へば、然うでもない。全く左様な事は嫌ひなのである。餘り物事に拘泥しない方だが、思慮があつて、却々確かりして居る。分厘の勘定と雖も、苟くもせぬ。銀行家の典型で、三菱風の人物である事は疑ひない。

(二) 紡績界

紡績王第二世

▼紡績界の人物と云へば、誰しも指を日比谷平左衛門に屈する。彼れは赤手空拳で實業國の一角に據つて、紡績業を大成統一したのである。で、世人は彼れを稱して紡績王と云つてゐる。此の稱呼は決して不倫ではない、彼れは確かに紡績王と稱されるだけの事業をやつて居る。而して、此の紡績王を補翼した者が三人ある。曰く武藤山治、和田豊治、佐久間福太郎、即ち是れである。就中、佐久間は年少氣鋭の人物であつたが、早く此の世を去つて了つた。

▼武藤は明治十八年の三田出身で、和田と同窓である。卒業後は米國に航して寢食を共にし、桑港の煙草工場の職工となつて具に辛酸を嘗め盡したものである。當時の志望は、和田は醫者で、武藤は政

治であつたが、歸朝後相共に紡績界に入るに及びて、昔日の親朋は競争者と化し、互に其上に出でんことを欲するに至つたのである。

▼武藤は紡績界に身を投ずる迄には、新聞廣告取次業を試み、横濱の外字新聞の翻譯係兼記者となり、大同團結に加盟して政治動運もやつて見たが、何れも志を成すに至らずして去り、三井銀行に入つたのが開運の序幕で、遂に鐘紡に關係するに至つたのである。最初は武藤も和田も副支配人であつたが和田は東京工場に置かれ、武藤は擢んでられて神戸工場經營の任に當る事になつた。其後和田は失脚して富士紡に轉ずるの止むなきに至つたが、武藤は依然として鐘紡に據り、其の基礎を築き上げて、所謂「武藤の鐘紡」たらしめたのである。

▼武藤は鐘紡に適處を發見してから、決して右顧左眈しない。一心不亂である。他の實業家は、多少地位を得れば諸種の事業に手を出す、彼れは紡績業以外には指を染めない。彼れ程の手腕があり、機略があれば、他の會社に關係しても成功を贏ち得るのであるが、夫れをしない。鐘紡大事と働いてゐる。其處が、彼れの特色である。手腕から云へば、無論和田の方が切れるであらうが、切れ過ぎる爲めに反抗を買ふことがある。一片の俠骨も有るのであるが、動もすれば非難の聲が聞える。武藤は大した徳望があるとも思へないが、惡聲を發する者がない。政治に志した程の男であるから、策も

あり略もあらうが、夫れを露骨に現はさない。野心があるのか、無いのか分らぬ。花柳界に黄金を撒いて赫夜姫を集めるやうな事はせぬが、能く新しい本を讀んでゐる。實業界の新智識を攝取し、新空氣を呼吸し、時代に遅れないだけの覺悟はしてゐる。和田は無愛想な男で、没趣味であるが、太つ腹である。武藤は智術を弄するが、趣味を解して、何となく温かな感じを與へる。若し紡績王第二世を押し立てるとしたならば、其の地位を得るものは、和田に非ずして武藤なるべきを信ずる。

日清紡の田邊

▼越後生れの者は辛抱強く、慾深く、蓄財に巧みだと云ふ事である。日清紡の専務田邊熊一は、矢張その越後人である。彼れの辛抱強いことは、日清紡に入つてからの勤め振を見ても分る。紡績王日比谷のお眼鏡に叶つて其の秘書役となり、巧みに録鏝を藏めて、忠實に働いたものだ。日比谷も亦、田邊の用ひるに足るを認めて、何彼と面倒を見てやつたのである。が、佐久間の生きて居る間は、頭はあがらなかつたが、佐久間の目を瞑ると同時に、其の全權は期せずして彼れの手落ちたのである。

▼田邊は、日清紡入社以前は、郷里に居て、卷町長となつたり、縣會議員に推されたりして、地方政界の牛耳を取つてゐた。中央大學の出身と云ふので、烏なき里の蝙蝠の格で、同町の青年に持てた

とは云ふ迄もない。既に實業界で相當な地位を得た彼れは、縣會議員と云ふ履歴の上に、代議士を加へなければ満足が出来ないので、多少の抱負を實行して見たいのと、夫れや是れやで、新潟縣から打つて出ると、衆望の歸する所忽ち當選した。彼れは一回のみならず二回までも當選して居るので、政友會代議士中でも、新米と同一視されては居ない。何かの委員などの顔觸にも見えるやうである。美人系の出身としては、風采骨柄が劣つてゐるが、辯舌は拙くない。お手前物の工場法案では、黙つては居ない。事業界の代表者として立てれば、立つて行かぬ事もあるまい。

(三) 保險界

保險博士粟津

▼一時其の明晰な頭腦で保險學を講じ、年少氣銳の手腕で保險界を切り捲つた爲めに、保險博士と稱された一人物が居た。夫れは誰あらう、今日傷害保險の新しい試みをやつて居る法博粟津清亮、其の人である。粟津は明治二十七年二十四歳で帝大法科を出た秀才で、高商出身の法博村瀬春雄と共に、保險界の二博士とも稱されてゐる。が、保險博士と云ふ方が一般に通りがよい。

▼保險博士の粟津は京都人で、其の人と爲りが温良で、常にこやかな顔をしてゐる。大學を出ると、更に大學院に入つて保險學を専攻し、政府の依頼を受けて保險業法其他の取調をやり、保險界に勘かぬ貢獻をしたのである。二十九歳の時は、既に有隣生命の取締役となつて幅を利かして居たが、世の中でも彼れを捨て、置かなかつた。彼れは保險業者を代表して萬國保險大會に臨み、歐米を視察して、まず／＼保險業の蘊奥を極めると同時に實地の應用をも忽にはしなかつた。歸朝後、五大法律學校及び慶應、高商等の保險講師となり、傍ら『保險雜誌』を發行して居たが、帝大で保險業の講座を開くや其の講師にも聘され、保險界に於ける一種の權威者となつたのである。明治二十七年より三十四年頃までは彼れの大に持てた時代で、其の間に設立された保險會社は、大抵彼れの手を煩はしたものである。其後彼れは自ら傷害保險を創立して、本邦保險界に新境地を開いた。彼れが理論と實地を以て保險界に獨歩するの觀あるは、學究の徒の企及すべからざる所である。

保險界の三雄才

▼帝國海上の村瀬春雄は、傷害保險の粟津清亮と相對して、特立の地位を占めてゐる。粟津は社長で、自ら經營するのだが、村瀬は副社長で、まだ一個の使用人たるを免れぬ。が、海上保險の知識力量

は、各務謙吉を措いては、外に覇を争ふものが無いとの事である。

▼村瀬は福井縣の醫者の伴で、神戸中學より高商に入り、夫れを中途でよして歐米に遊び、ペンシルバニア及びライプチヒ大學で海上保險學を専攻した。明治二十六年に歸朝し、二十九年より今日に至るまで高商の講師となり、且帝國海上の常務より進んで副社長となつたのである。學生時代には運動好で、體質頗る強健であつたが、三十九年以來膽石病に罹り、之が爲めに思ふやうな活動が出来ずに苦んでゐる。粟津の保險界に飛躍を試みて居るのに、村瀬の書齋に親しんで學究の風あるは、其の健康が許さぬ爲めである。

▼明治生命の海老原介太郎は、二十一歳で三田の理財科を出で、英國に赴いて倫敦保險研究會の正會員となり、保險學を研究して歸朝した斯界の新人物である。彼れが保險界に盡した功勞は、明治、日本、帝國の三大生命保險會社の依囑を受けて、國民の死亡率を調製した事である。此の死亡率は、生命保險業の基礎となるべき資料で、必ず無ければならぬ者であつたが、彼れの調製以前には何等據るべきものが無かつたのである。で、海老原の調製は、之を誇張して云へば、本邦の保險界に新光明を與へたのである。

▼仁壽生命の玉木爲三郎は、明治二十七年赤門出身の法學士で、保險に関する法律の知識を有つてゐる。彼れは大學卒業後明治生命に入つて實務の研究をなし、現行商法及び保險業法の發布と同時に辯護士となり、保險會社の内情を精探するに努めたものだ。夫れが爲めに、彼れは保險會社に関する實際の知識を得、明治三十四年の恐慌時代に大同生命、加島銀行等の整理を遂げ、遂に仁壽生命の支配人に擧げられたのである。

▼海老原は事務の人で、事業の整理とか、經營とか云ふ方面の手腕は玉木に及ばぬ。玉木は慶應、高商、法政各大學の講師をやり、大に組織的保險學の新旗幟を翻したのだが、夫れが容易に實行されぬ。海老原のは理論よりも實地で、其の調べあげた事が明日を待たずに直ぐ役に立つのである。玉木は根が辯護士だけに策を弄する傾向があるが、海老原は三十五歳までも獨身で居たと云ふ程の變物で、餘り慾が深くない。彼等の發達は、寧ろ今日以後にある。

原火災と北里生命

▼本邦保險界の大立物は、何と云つても阿部泰藏である。阿部は保險學者でも何でもないが、保險界の情偽に精通してゐる。保險會社の經營に就ては、獨歩の手腕を有してゐる。保險學者の矢野恒太が相互生命、楠が太平生命、粟津が傷害保險と新機軸を出してゐる間に立ち、阿部は嶄然頭角を擡げ

て保険史上に光彩を放つてゐる。今日の保険界で阿部の名を知らぬ者もなければ、阿部の提撕誘掖を受けない者も亦稀れであらう。火災保険界の手腕家と呼ばれる、明治火災の原錦吾などは、大に恩顧に預つたものである。

▼原は年齢も最う五十近いから、新進人物としては何うかと云ふ人もあるが、まだ却々新進氣鋭である。彼れは過去の人ではなく、まだ是れからと云ふ所がある。將來大に伸びさうに思はれる。同じ火災の焼け木杭の中でも、芽が吹くやうな潤ひを持つてゐる。人物も下等でなく、襟度の廣潤な所はある。古い考へに囚はれずに、新生面を拓かうと云ふ努力もある。明治火災の今日の基礎を据ゑ、更に發展しようと思氣づいて居るのも、彼れの施設と努力とに待つ所は尠くない。

▼原は明治十八年の高商出身で、其の後教授となり、後名古屋、京都等の商業學校に教鞭を執り、傍ら商業會議所に席を列ねて、到る處の商業界に新智識を流し込んだのである。けれども、平凡な教師生活では彼れは財界著名の人物とはならんのだが、今より七年前に我が火災保険界に一大恐慌が起つた時に、五大火災保險會社の盟主となつて、保険料の協定をなし、纒かに瀕死の危機より救ひ得たのである。是れが爲めに、彼れ原錦吾の名は財界の注目する所となつたのである。

▼帝國生命の北里斐斐男は、醫博北里柴三郎の弟で、代議士藏原惟郭夫人の實兄である。彼れは明治

二十六年赤門を出ると、帝國生命に入った。三十三年歐米の保險業を視察して、歸來營業部長、支配人を経て、四十一年常務となつた。入社當時は、大に新智識を振り廻して刷新とか、改良とかを叫んで、著々夫れを斷行して居たが、今日では何程か整理が就いたので、其の發展策に骨を折つてゐる様である。人物が濃厚で、奇策縱横と云ふ實ではないが、ちよい／＼と味な事をやる。酒の強いのと、男松尾臣善の女婿だと云ふ事は、保險界の評判になつてゐる。

高倉藤平

▼有隣生命は、命旦夕に迫つて今や如何ともすべからざるの狀態に立ち至つた事がある。夫れは加東徳三が相場に手を出して穴を明け、之を引受けて經營した松崎松三郎も持ち切れなくなり、あたら名の有る保險會社も危機に瀕したのであつたが、忽ち飛鳥の如く現はれて三十餘萬圓を投じて首尾よく整理の目的を達したのは、大阪の富豪高倉藤平である。是に於てか、高倉の名聲は頓に揚り、中央財界の視目を聳動するに至つたのである。

▼高倉は努力主義の人である。大阪米穀取引所の理事長で、土地會社の理事で、大正貯蓄銀行の實権者である。性來彼れは太つ肚で、氣前が好いので失敗もしたが、又今日の成功を贏ち得たのである。

年少早く株式界に身を投じて、株屋の小僧となり、せつせと働いて居る間に客筋なる紀州の豪農神田清左衛門の知る所となり、資本を出して貰つて仲買店を開業したのである。其後人の爲めに大に失敗したが、再び引返しがついて、日露戦役以來今日の巨富を成し、遂に堂島の取引所の理事長となつたのである。

▼高倉は、何でも負ける事は嫌ひである。相場界に立てば、勁敵であれば勁敵だけに強く當る。曾て岩本榮之助を向ふに廻して、華々しく闘つたのは有名な話だ。夫れならば弱い者を酷めるかと云ふに、さうではない。任侠的氣風があるので、自己の信する者に援助を求めらるれば可厭とは云はぬ。援け得られない迄も、援けてやらうとする。細君は又彼れに劣らぬ女丈夫で、貧民學校を起して、教育方面に力を盡さうとしてゐる。高倉が物質界に勇しい武者振を見せると、細君の精神界に努力するのは、面白い對照である。

(四) 電氣事業界

電燈の安藤

▼電燈の安藤は二人ある。一は市電の安藤保太郎で、一は日電の安藤兼吉である。兼吉は東京市會議員で、其の方面に掛けては却々の凄腕で、下谷派の智腦と稱されてゐる。が、電燈事業の經營に就ては、殆んど此の事業と終始し來つた保太郎に一籌を輸する。保太郎は市電のみならず、何れの電燈に關係するも、其の手腕を示し得べき人物である。

▼保太郎は明治法律學校の出身で、根氣の強い男である。月給十二圓の馬鐵庶務課の雇から叩きあげて、課長となり、幹事となり、電鐵の三社合併の際常務取締役となり、東京市營後は電燈部長となり、電燈と云へば直ぐ安藤の名が聯想される程、左様に光輝ある姓名となつたのである。併し彼れの働き振を見ると、馬鐵時代も、東鐵時代も、現時も餘り變りはない。例に依りて例の如く、朝から晩まで兀々と働いてゐる。彼れのは事務を執つてゐるのでなく、間斷なく働いて居るのである。統計に取つて見たなら、腰を掛けてゐる時間が、立つて働いて居る時間よりも尠いかも知れぬ。

▼彼れは電燈問題では、問題の火元のやうに云はれて居るが、一體彼れは好んで問題を惹き起すやうな破壊性は持つて居らぬ。東鐵時代には社長と社員との間に立ちて調和の任に當り、營業方針、執務の統一、車掌運轉手の監督まで手落なく行つたものである。唯自己の所信を貫くに於ては、何人にも屈しない事がある。三錢均一問題の際の如きは、街鐵の立川と殆んど半年に亘る筆陣を張つて下らな

かつた。今回の如きも亦、彼れは公益の爲めに自己の所信を貫かうとしたに過ぎぬ。公人が公益の爲めに確信あるの言を吐き、有利なる經營策を執るのは當然の責務である。

▼安藤保太郎を一言にして評すれば、精力主義の人である。根氣の續くだけ働き、少しも骨身を惜まない人である。斯う云ふ人の下にある部下は、定めし怨言を洩すであらうと思ふが、案外人の和を得てゐる。安藤の爲めには、進退を共にしようとする者が尠からずある。唯餘りに微細な點にまで蚤取眼をするので、事務員臭味の脱せぬ所はある。斗酒を傾けて綽々たる餘裕を示す程の雅量を平日持つて居れば、もつと豪い人物になり得るであらう。

電線會社の男爵

▼横濱電線會社は、古河家の一事業である。其の社長は、古河潤吉の從兄弟で、古河鑛業事務所の商務局長であつた男中島久萬吉である。彼れは當主虎之助の輔佐役で、古河家の事業に對しては隠然たる勢力を持つてゐる。

▼男中島は始め慶應義塾の童子寮に學び、後高商に入つて、明治三十年に卒業してゐる。卒業後、東京株式取式所、京釜鐵道等に入つたが、公桂の第一次桂内閣を組織するや其の秘書官に擧げられ、其の西園寺内閣の時まで引續き首相秘書官となつて居た。古河鑛業事務所に入つたのは、其の辭職後である。

▼彼れの父は、最初の衆議院議長中島信行で、母は伯陸奥宗光の妹である。が、母は彼れが幼少の時に亡くなつたので、繼母の湘煙女史に鞠育されたのである。斯うした血統を承けてゐる彼れは、年少時代の理想は政治家であつたが、商業教育を強ひらるゝに至つて、其の性格が一變したのである。年少の粗放な風は抜けて、態度までも悠揚な貴公子となつた。夫れに辯舌が爽かで、社交に長じて居るから、秘書官よりは外交官、外交官よりは社長などに向きさうである。テキパキ事務を處理し得る人ではないが、大局を觀て機宜の處置を取つて行き、細かい事は部下に一任すると云つた風の長所がある。將來は政治界に顔を出すであらうが、今日は社長の椅子に收まつて居る。興味ある彼れのフィルムは、是れから展開するのである。

(五) 海運界

井坂と木村

▼東洋汽船創立の當時、押しも押されぬ腕ツきが三人居た。曰く白石元治郎、井坂孝、伊藤幸次郎、即ち是れである。然るに、伊藤は會社の仕打に憤る所があつて出て了ひ、白石は淺野の女婿となつて、問題の渦中に投じ、獨り毅然として立つて居るのが井坂である。

▼彼れは水戸の人である。其の産地を知りて彼れに接すれば、黃門の水戸と云ふ聯想から一種の力ある聲が、彼れの唇を洩れるやうに思はれる。横から見ても縦から見ても、其の魁偉なる容貌を見ても、剛健なる水戸人を代表するかに見える。郷里の中學を出て一高に學び、明治二十九年に帝大の法科を卒業した。其の年に東洋汽船が創立されたので、直ちに入つて重要な椅子を占めたのである。一旦人と争へば勝たずんば止まずと云ふ程の、剛情我慢な男であるから、自分のやるだけの事は手落なくやる。苟も他から指彈されるやうな、後暗いことはせぬ。夫れに頭腦が明敏で、體力が強健であるから、事務を處理することも捷く、三晝夜くらゐは不眠不休で働いても平氣である。斯う云ふ人物は得て部下に對して冷酷なものであるが、彼れは業務に忠實なるだけ、能く部下の業務をも理解し、同情を以て之に接してゐる。で、手腕のある者は手腕に依つて用ひ、智腦ある者は智腦に依つて擢くと云つた風に、其の進路を開いてやるのである。非難の多い東洋汽船に居て、人望を失しないのは、此の美點あるに由るのである。

▼大阪商船の木村清は、帝大の出身で、文書課長となつてゐる。餘り口數を利かない、無愛嬌な井坂とは違つて、温厚で、淡白な、そして世才に長けてゐる好人物である。井坂の氣質は東洋汽船の營業振を語るものとすれば、木村の呼吸は大阪商船の空氣を説明するものではあるまいか。

郵船の新材

▼日本郵船の寺島成信は、海運界の文章家である。明治二十二年の三田出身で、始め海軍の編纂課に入り、七年間勤續して居たが、三十年男近藤に知られて日本郵船の社員となつたのである。日露戰役當時は大阪支店の助役となり、四十年に本店詰となつて、まだ監督課助役ぐらゐの所にゐる。彼れは相當の意見も持つて居り、又文章を能くすると云ふ矜持が有るので、上席者に阿附することをせぬ。一問題の起る毎に意見を述べる、所謂侃々諤々の言議を貫かうとするので、餘り持てないのである。▼彼れは懸賞論文に當選した事が二回ある。其の爲めに、彼れの名は財界に知られてゐる。一は明治二十八年經濟雜誌社で『海運論』を募つた時で、之は一等賞を得てゐる。一は先年大阪朝日新聞の懸賞に應じた『對外商業政策』である。之は一千圓の賞を得てゐる。其他、彼れの著述には『海事總攬』と云ふのがある。今後ますます修養すれば、彼れは海の學者として一方に覇を稱する事が出来るかも知れぬ。

▼是れもまだ文書課長であるが、法學士中島滋太郎は、一種の性格を有する人物ではあり、頭腦もあれば手腕もあるのであるから、將來頭角を擡げざるに違ひない。彼れの外、帝大出身者は、専務兼主船部長須田利信、専務兼庶務部長堀達、船客課長小林政吉、保船課長藤島範平等が、星の如く列つてゐる。

(六) 事業界

男爵藤田平太郎

▼大阪の勢力圏を三分して其の一を保つ者は、藤田の勢力である。藤田の勢力は、住友の勢力と拮抗し、鴻池を凌いで居るのである。舊富豪としての鴻池、住友を推すと同時に、新富豪としての藤田の財力を觀過する事は出来ぬ。而して、三家とも當主は新進人物の列に入るべきである。

▼男藤田平太郎は、一代に卓越した乃父傳三郎の如き積極的企畫とこそ試みないが、父業を大成するには、最も得易からぬ人格である。總て大事業をやつた人の後には、著實な人を要する。二代目が初代よりも大膽奔放であるとか、霸氣満々として居るとか、少し出過ぎると、折角築き上げた基礎を滅

茶々々にして了ふものである。古來覇業を成した英雄の後には、大抵守成に傾いて居る。守成を捨て、進取に出でたものが、自ら滅亡を招いてゐる。男藤田の二代目が、事勿れ主義を取り、消極方針で行き、努めて基礎を鞏固にしようとするのは、二代目當然の経路である。新富豪男岩崎の二代目も矢張、此の守成、消極で、其の根柢を固めて來たので、健全な發達を遂げてゐる。

▼男藤田は、社交界には餘り顔を出さぬが、事業に對しては常に慎重なる考慮を怠らぬ。商才もあれば機略もあり、自ら事務を處理するの手腕もある。殊に大阪の市政に對しては尠からず注意を拂つて、種々の忠言も試みれば、居中調停の勞を取つてゐる。先代の傳三郎ほどに押が利かぬやうであるが、一個の見識を備へて事に當ることは、彼れを知る者が皆認めてゐる。

松方の七人兄弟

▼財界の元老、侯松方の伴が七人が七人皆實業界に在つて、盛んに其の勢力を扶植してゐる。今戸籍面の順序に列記すれば、長男巖、次男正作、三男幸次郎、四男正雄、五男五郎、六男乙彦、七男正熊、八男義輔である。此の外に男が二人、女が五人あるが、財界に直接關係がないから省く。

▼如上の松方兄弟は、五郎を除くの外は、皆歐米に於て教育を受けてゐる。で、何れも常識に富み、

理財に長じ、社交も亦巧みである。乃父の勢力で、實業界に地位を得てゐると云ふ事も無論あらうが、實力ですん／＼進んで行く點も確かにある。

▼第十五銀行副頭取の巖は、獨逸で經濟學を修め、明治二十六年に歸朝し、二十九年創立當時の丁酉銀行頭取となり、十五の監査役を兼ねて居た。夫れから一兩年後には十五專務となり、遂に今日の地位を得たのである。彼れは名義上の外交官試補となつたが、留學上の便宜に出でたもので實務は執らぬ。全く金融界の人として、終始し來つてゐる。酒は随分いけるが、温厚篤實で、公平に忠實に職務に執掌してゐる。銀行家としては、先づ無難な人である。

▼正作は佛國及び白耳義に學んで、外交官となり、全權公使まで進んだが、健康の爲めに辭職した。男岩崎の女婿で財力があり、父侯爵の勢威で押して行けば、大使ぐらゐには成れさうであつたが可けなかつた。辭職後は猪苗代水電の重役となつて、指を實業界に染めて來た。外交官の經歷からして、夫れを不適任だと云ふではないが、創業の會社よりは守成の銀行に向きはしまいか。總領の巖と同じ途を進んだ方が、好適處を發見し得るであらう。

▼川崎造船所長の幸次郎は、却々の手腕家で、實業界の寵兒となつてゐる。彼れはエール大學を卒へて歸つてから、日本火災の支配人をして居たが、侯松方の首相となつた時其の秘書官となつた。川崎

造船が株式組織となり、社長川崎正藏が退隱するに際して、彼れは其の社長となつたのである。二兄の重厚な性格とは違つて、機敏で、潤達である。總てに於て積極的で、言論も實行も大膽で、活氣横溢してゐる。片ツ端から切り捲つて、如何なる難關でも突破すると云つた風である。事業界のみならず政治界に興味を持つて居て、代議士にもなつて居る。政派は何れにも屬さないが、政友會に同情を持つてゐる。政變の時には、其の頭を政界の黒幕に突込ひのを見ても、滿更道樂でやつて居るとは思へぬ。

▼浪速銀行頭取の正雄は、眞面目な、温厚な人物で、其の態度まで長兄に似てゐる。巖は温厚過ぎて沈鬱だが、正雄は人づきが好く、圓轉滑脱で、事務の才がある。夫れは獨逸仕込と米國仕込の差で、同じ型の色彩を異にしてゐる迄で、米國より歸朝後、帝國商業銀行に入り、轉じて浪速の神戸支店長となり、本店支配人となり、更に專務の職にあること六年にして、現今の地位に進んだのである。

▼日本製綱專務の五郎は、帝大出身で、其の名の示すが如く計數に明かで、事務の才に長じてゐる。乙彦は活動家で、幸次郎の如く機敏潤達の才人である。學習院を出てハーバード大學に學び、歸朝後日本石油の重役となつた。伯山本の女婿で、英語に巧みである。其の弟の正熊は駒場農學校の出身で、帝國製糖の常務。義輔は法科大學を中途で廢し、市加古の銀行で實務を練習し、歸朝後日本銀行に入

り、現に調査役をやつて居る。斯の如く松方兄弟の食ひ込んで居る所を見れば、侯松方の勢力の如何に廣く行き渡つて居るかを知らるに足るであらう。

神田 鍾藏

▼紅葉屋銀行の神田鍾藏は、その人格に就ては世間に毀譽紛々たる人であるが、兎に角金儲けの天才として一般には認められてゐる。天才か、非天才か、それは別として、彼れが事業界に於ける今日の活動振りを見れば、誰れしもその傑物たることを否み得ない。殊に近來彼れが徳望を得るに汲々とし、稍々人格の完成に努めて居る跡のあるを見れば、彼れが一般碌々の徒と異なる所が明かである。彼れは丁年少時代は覇氣勃勃であつた。手つ取早く金儲けをしようと、名古屋の株式界に現はれた。夫れは丁度彼れが二十二歳の時であつたが、其の翌年には日清戦役が起り、平和克復と同時に名古屋取引所株は暴騰したので、忽ち數萬の富を握るを得た。が、二三年の間に大損失を招いて本野默阿彌となり、家財道具を賣拂つて上京したのは明治三十二年の冬である。夫れ以後の彼れは、刻苦奮勵、具さに艱苦を嘗めた。冒險的投機を避けて、努めて健實な現物の一方に傾倒した。その結果、三年の後に、

債の大注文を引受け又海外輸出の先鞭を著けた。且つ神田の理想は、國債を紙幣同様に融通せしめるといふ點にあつたが、更に我國社債類の流通不便なるを慨し、自ら社債週報を發行して内外の市場に向つて其の信用を高める事に努めた。

▼彼れは雅氣の多い男ではあるが、其實正直な、案外無邪氣な處のある男である。非常な精力家で且つ勤勉家であることは言ふ迄もないが、亦公共的事業に對する趣味も少くない。此の點は世間で誤解して居る向が多いやうに思はれる。四分利借換の引受全部八千五百圓を、直に貧民學校特殊學校に寄附したなども、神田の美なる一面を證明したものである。殊に洋行中、彼れは海外に於ける日本青年の萎靡振はざるを憂ひ、倫敦、紐育、伯林、の各日本人會に多額の金を寄附したり、實業研究生を派出したり、専ら此の方面に力を盡して居る。夫人は女子大學の出身で美貌に兼ねるに才媛の譽ありし人。要するに今後の努力次第で何の點まで發展するか、將來の豫知し得ぬのが神田の神田たる所以である。

岩本榮之助

▼贅六は金に吝だと云はれて居た。儲ける事は儲けても、使ふ途を知らぬと指笑されて居た。處が大阪の相場師の岩本榮之助が公共事業の爲めに二百萬圓を提供したと云ふので、關東實業家の膽ツ玉を

挫いた許りでなく、何程か贅六の面目をあげた。而して、其の二百萬圓が彼れの財産の二分の一だと聞くに至つて、果斷勇決を賞するの聲が四方に起つた。

▼岩本は法螺吹きかと思へば、然う法螺を吹かない。時々は豪語する事はないでもないが、至つて思慮周密な男で、金儲けに掛けては抜け目がない。吝でないだけに周囲の人からも可愛がられ、財界の信用も厚いのである。彼れは幾ら散財しても、儲けようとするれば儲け得る確信を持つて居る。だから、二百萬圓は喜捨の手始めで、今後儲けるに従つて各種の公共事業に散財する積りだと云つてゐる。子孫に残す爲めの黄金なら、餘り蓄めない方がよいが、社會的事業に投じて老後の慰藉を得ようとするなら、若いうちに大に腕を揮つて儲くべきである。

視界に映ずる陸軍の將星

(一)

▼將星の如く列る——洵に美しい形容詞である。戦時に於ては血腥い將軍も、平時に在つては畫趣の人で、其の帽章肩章から云つても、勳章を胸に輝かした恰好から云つても、星の如くと云ふ形容詞

の徒爾ならざるを感ずる。眼を開いて陸軍の分野を見ると、其の將星が、満天の星宿のやうに耀いてゐる。大きな星の光芒におされて薄く見えるもあれば、糠星のやうでも強い光明を放つて居るものがある。雲に遮られて姿を失つても、其の雲が去れば勢力を回復して鮮かに光つて居るものもある。閔に遠い者は小さく見えるが、却々馬鹿に出来ない程大きなものがある。それは是れから、視界に映ずる明星を始め、天王星、海王星に至るまで、此の一指を以て指呼して見ようか。

▼元帥府は公桂の設けたもので、軍事參議院は伯寺内の陸相時代に成つたものである。是れは陸海軍共通のもので、其の元老、元勳と云ふ様な人々が祭り込まれてゐる。陸軍の元帥は山縣有朋、大山巖、奥保鞏で、黒木爲楨は與らぬ。黒木は戰將の器で、軍政家ではないが、人格なり手腕なり當代に傑出してゐる。奥は日露戦役に難局に當つた爲めに、其の卓抜なる手腕を發揮した。人物は沈毅で大きい所はあるが、少しく阿堵癖がある。乃木とか、黒木とか云ふ將星と、其の光が違つてゐる。奥の性格の光が金色であれば、反感を持つ軍人もないのであるが、夫れが有るばかりで、如何程輝いて居ても、其の光が薄いやうな氣持がする。將星は將星で、枯木の間からでも光つて居れば趣のあるものだ。

▼陸相の地位を得たものは、師團長や何かで居ても、軍政家の風が有ると稱された人物である。木越安綱、上原勇作などが夫れだ。寺内正毅は豫告の人ではなかつたが、或機會でメキ／＼頭を擡げて來

た。今日は朝鮮總督で收まつて居るが、其の方面でも皮肉に仕事をやつてゐる。韓國を併せる事から、統監府時代の積弊の掃蕩を試みた段取まで、武斷的だとか、壓制的だとか、素的滅法に攻撃されたが、著々やるだけの事は行つてゐる。東拓總裁の宇佐川一正、關東州の福島安正、臺灣の佐久間左馬太などは、其の方面相當の人物とも思はれないが、依然として其の職に止まつてゐる。宇佐川は兎角の評がある、大きな玄關だけ張つて居ても事業があらんで仕方がない。佐久間は風采骨柄の偉大で、蕃族を壓してゐるが、唯夫れ壓して居るだけである。椅子に腰を下して眠つて居ても、民政長官にさへ手腕家が居れば成績を擧げ得ると云ふ人物である。福島は英氣颯爽としてゐるが、殖民地的人物でない。參謀本部などは好い据り所と思ふが、敬遠されたのを見ると、何か事情があるのだらう。

(二)

▼參謀本部の總長が長谷川好道で、陸相は楠瀬幸彦である。どうも反りが合ひさうも無いと見られて居るが、お互に砲火を浴せるやうな事も爲まい。増師は陸軍の豫定行動だから、楠瀬でも肘鐵をドンと呉れて、サーベルを自分の腹に當てるやうな愚を演じまい。長谷川と本來の反りが合はんでも、今の所増師で内輪喧嘩を始めさうにもない。次官の本郷房太郎、軍務局長の柴勝三郎何れも生彩がある。

本郷は用意周到で、事務的手腕がある。妙に部下に人望のある男で、能く人物の能不能を鑑別して用ひる事が旨いと云はれてゐる。柴は押の強い男で、自己の所信を貫くまでは、泥溝板を踏み外す迄やると云つた氣風で、意志の人である。軍政的手腕の無いではないが、より以上に參謀官の適任者と認められてゐる。第四師團長大迫尙道を總長に据ゑて、柴を次長にでもすれば、理想的だがな抔と云ふ聲を屢々聞く。之を聞いたなら、現次長の大島健一などは快くあるまい。大島は山縣の秘書官を勤めて、大に信任されたものである。閩外の人は白い眼で睨めつけるが、彼れは夫れほど依怙偏頗な質ではない。器局は宇佐川などのやうに大きくは無いが、夫れだけ事務的手腕が勝れてゐる。長谷川には、相應な女房役である。

▼仙波太郎は陸相候補者を以て目されてゐるが、寺内とは反りが合ふまい。洋行後は蠻骨に大分磨きがか利いたと見えて、少し圓みが出來たが、義太夫口調で戰術を讀むと云ふ離れ業はまだ止めない。唯餘りに鋒鋦を露はさないと云ふ迄で、豪放は依然として豪放である。智能才略一世を蓋ふほどの傑物ではないが、將星中では異彩を放つてゐる。用兵家としては、井口在屋、松川敏風と伍して、決して遜色はない。成功者は大抵氣驕つて新進に蹴落されるが、仙波は豪放ではあるが細心な點があり、無性者らしいが勉強家で、新知識の吸収には怠らない。近來大に油が乗つて來たから、其の前途頗る注

目に値する。

(三)

▼軍務局長は、桂太郎を出して以来、其の椅子に値打がついて、寧ろ次官などよりも重く見られる傾向がある。柴の本郷よりも注意人物視されて居るのも、其の爲めである。今、試みに過去の軍務局長を一瞥して見よ。

▼中村雄二郎は現に製鐵所長官で、技術官としては傑出してゐる。日清戦役以前の技術官で、當時は大佐で砲兵課長、次で軍事課長と云ふ順序に進んで來た。本省に居た日月は短くないが、軍務局長としては格別の手腕を揮ひ得なかつた。人物は圓満で圭角がないから軍政に向きさうだが、霸氣に乏しいので素晴らしい仕事は出來ない。長岡外史は、彼れと反對に、霸氣満々、手腕縦横と云ふ人物である。中村の下に軍事課長で居た頃から頭角を現はし、局長に進むに至つては、省内を縦横無盡に切り捲つて居た。教導團を廢止して現今の下士採用制度に改めたのは彼れの事業で、桂が師團司令部を設けて師團編成を告げた以來の目ざましい遺口であつた。一時は長岡大臣と稱され、陸軍部内の明星として輝いて居たが、妬雲の襲ふ所となつて、美名の下に歐洲に追はれ、歸朝後廣島の旅團長でくすぶつて

居た。現に高田の師團長で穴籠りをして居るが、仙波と共に、長く田舎に埋没するのは惜しい人物である。

▼政變の際に、次官から第三師團長に轉じた岡市之助は、人事課長の時に手腕を認められた。人物は穩健で、圭角はないので、ぼんくら様に見える。多くの人は好人物と見て、馬鹿にして掛かるが、とつてい然うは欺かれない男である。攻城野戰の勇ではないから、舞臺面では華々しい格闘振を見せないが、黒幕の一重の裏では眼の光まで違つて、天下一擲の畫策をも敢てする。其の切れ味と云つたら、凄いものである。然うした策士であるだけ、長閑からは重寶がられてゐる。田中義一は岡のやうに、周密な畫策は出來ないが、露骨に切り捲つて行く、突貫的豪傑である。頭腦が粗笨で、街氣はあるが、器局の大きい所がある。三寸の舌頭に人を説き伏せるとか、一種の腕を揮つて部下を籠蓋するとか、そんな事は朝飯前にやつてのける。事務的手腕に長じて居るとは思へないが、事務の大綱を握つて、誤なく指導して行くだけの眼識はある。明星長岡とは別種の光彩を持つてゐるが、霸氣のある所が稍似寄つてゐる。新進の將星中では、性格の光の鋭さは、輒く視界を去るものではない。

(四)

▼師團長で傑出して居るのは、第一の一戸兵衛である。一戸は青森縣の出身で、系統から云へば餘り羽振の好い方ではないが、人格や力量の點で推服されてゐる。陸相になれば陸相の職も執り得る人物であるが、軍政家に轉ずれば或は仕損じがないとも限らぬ。上田有澤は、日露戦役では失敗がちであつたが、夫れ程のぼんくらでは無い。智略があつて、外國語にも達して居り、辯舌にも長じてゐる。攻城野戦の適材ではないが、軍政家として立てば、相應に仕事が出来よう。

▼教育總監の淺田信興は、戦將の器で、陸軍教育の適材であるかは疑はしい。日露戦役には旅順攻撃に参加して、偉功を樹てた一人である。大迫尙敏も當時の勇將であるが、重厚な人格は、學習院長の適任なるを語つてゐる。東京衛戍總督の中村覺は、白樺隊の指揮官となつて陣頭に立ち、戦役中の餘興としては見事なものであつた。人物は溫柔で、交際社會には持てるが、戦將としては其の器を疑はれてゐる。騎兵出身の秋山好古は、豪膽剛直の資質で、傑物と云ふことが誰の眼にも映する。長沼秀文は奉天戦争の殊勳者で、夫れ以來頭角を擡げて來た。松川のやうな謀將ではないが、奇智があつて、當意即妙の早業を演ずるに適してゐる。

▼第六師團長の梅澤道治は、花の梅澤と稱され、其の名は兒童走卒にまで謳はれてゐる。當時は摺澤靜夫、黒澤源三郎と共に、仙臺出身の三將軍と持て囃されたが、露西亞通の黒澤が經綸もあり、抱負

もあつて、梅澤よりは勝れて居たやうだ。蓋し梅澤は戦將の器で、黒澤は軍政家として手腕を現はし得る男であらう。が、少將だけで首になつた。

▼其他、雲際に光を曳いてゐる人物には、侍從武官長の内山小二郎、旅順要塞司令官の青木宣純、下の關要塞の柴五郎、由良の阿部貞次郎、野戦砲兵監星野金吾、騎兵監豊邊新作等がある。柴は會津の出身で、中でも異彩を放つてゐる。

海軍の五雄才

(一)

▼海軍の大立物は、悉く薩人である。元帥府に祭り込まれてゐる伊東祐亨、東郷平八郎、皆薩人である。日清戦役當時の花形樺山資紀、日露戦役當時の花形上村彦之丞、片岡七郎、柴山矢八、鮫島員規等は、總て薩人である。海軍の要樞は、全く薩人の専有であつて、薩人でなければ海軍々人で無いと云ふやうな時代もあつた。が、時代の推移と共に、漸次他州人が入り込む事となつた。又一面から見れ

ば、薩人だけでは到底人物を補充する事が出来ないで、門戸を開放して他州人を迎へねばならぬやうな事情もあつた。今日こそ薩派的觀念を抱いて居れ、少壯氣銳の山本權兵衛は、軍務局長時代に海軍部内の廓清を試み、老朽淘汰を斷行して、他州人と雖も用ゐるに足るべき者は、大に登用したものである。大に登用したと云つても、要樞は悉く薩人で占めて居たから、實は佐尉官ぐらゐの進路を開いたに過ぎなかつたのである。併し乍ら、其の結果は今日に現はれて、海軍の要職も他州人に與へる事になつたのである。生れは他州人でも薩化して居る者もあるから一概には云へないが、純粹の薩人は日露戦役後大に減少を示してゐる。

▼數の上では、確かに減少を示してゐるが、海軍擴張と共に増殖しない迄で、實際は目に見えるほど減少して居るのではない。其の要樞は依然として薩人、乃至薩化人で把握してゐる。海相の齋藤實は岩手縣出身ではあるが、閨閥關係上薩派の色彩に生きてゐる人である。次官の財部彪は宮崎縣出身で、權兵衛の愛婿である。政務機關は薩と薩の手に握つてゐるが、さて軍令機關はと見れば、軍令部長は薩人の伊集院五郎である。次長の藤井軌一は岡山縣人であるが、薩化してゐる人物である。而して是等を統率して立つ所の人物は、云ふ迄もなく山本權兵衛である。彼れは大将で、首相であるからではない。彼れは夙に海軍の中心人物となり、長の陸軍に對して、薩の海軍を代表して居たのである。で、

海軍の全權は、殆んど彼れの掌中に握られて居たと云ふも、過言ではないのだ。山本は普通ならば、矢八のやうに引込んで居るべきだが、彼れはまだ却々老人連とは伍さない。今度罷めても最う一度位は首相になる積りでゐる。縱令元帥になつても、海軍の實權を握つて居て、放すものでは無からうと云はれてゐる。夫れ程に、山本は海軍を薩の手から捨てまいと、頑張つて居るのである。

▼横濱鎮守府司令長官の山田彦八、第二艦隊司令長官の伊地知季珍は、薩人であるが、軍人であつて軍政家ではない。伊集院は軍令を握つて居るが、軍政方面に出れば、やはり軍政方面に活動し得る人物である。第一艦隊司令長官の出羽重遠は福島縣人であるが、薩派に重きをなして居る。伊集院、出羽共に海相の椅子を占めるか何うかは問題である。財部は一躍して海相になつても可からうが、彼れの爲る前に、誰か一人其の間に挾まるに相違ない。島村速雄か、松本和か、彼等の名も、豫想者の中に入つてゐる筈である。

(二)

▼島村は高知縣の出身で、佐世保鎮守府司令長官をやつてゐる。松本は東京の人で、艦政本部長である。島村は日露戦役の際嶄然頭角を顯はし、特に其の報告の文章の簡潔莊重なるを以て知られた。頭

脳が明晰で、雋敏で、部下を操縦するの才もあるので、注目されてゐる。松本は軍政家として、出羽と雁行するの一人である。出羽は精悍で、おれを三日でも可いから海相にするなら、長の陸軍に對して開戦して見せる杯と、増師問題の際に威張つて居たものだ。松本はそんな強がりには云はないが、却々しつかりした所がある。松本を挙げれば、又朽内曾次郎を忘れてはならぬ。松本は交際に長じ、朽内は事務に鍊達してゐる。山内萬壽治は濁肉派のやうに云はれて居たが、山本の智脳となつて、或方面に凄腕を揮つたものである。

▼第三艦隊司令長官の名和又八郎は石川縣人で、教育本部長の吉松茂太郎は高知縣の出身、舞鶴鎮守府司令長官の八代六郎は愛知縣人である。八代は、和歌山縣出身の有馬良橘と共に、其の名を謳はれた男である。有馬は勇敢、八代は洒脱、善く其の地方色を表はしてゐる。八代は旅順閉塞隊の勇士を送るべく、星夜甲板上で別離の尺八を吹いたので、風流の名が高くなつたが、彼れは士氣の振作を口にして居るだけ、己れの身を持つること嚴である。そして親分肌があつて、阿賭物に淡泊な所は中京人と思はれない程である。唯其の風流洒脱の點は、確かに好個の中京人である。

▼吳鎮守府司令長官の加藤友三郎は、前海軍次官で、廣島縣の出身だ。八代は豪放で洒脱、伊知地は豪放で勇猛、山内は剛膽で勁烈と、斯う鎮守府長官を比較して來ると、加藤は如上の人物よりは赤錆

がとれてゐる。思慮周密で、籌略がある。軍政方面にも手腕を揮ひ得る男ではあるが、參謀から叩き上げたゞけに、軍令部などは適處かも知れぬ。財部は日露戰役の際に軍令部參謀で、精力の強いのと、的確な計畫を立てるので稱されてゐた。夫れが次官に轉じたのであるが、今日は山本の後援で以て、齋藤の智脳となつて、海軍省を切つて廻してゐる。山本の愛婿と云へば、夫れが海軍に最う一人ゐる。山路一善と云ふ男だが、財部に比べると、頭腦手腕共に問題にならぬ。併し權兵衛も何か見る所があつて娘を遣つたのだから、滿更捨てた人物でもあるまい。大器晩成の格で、財部の毛碌した時分に頭を擡げるかも知れぬ。

(三)

▼ちよいと此の邊で觀察點を換へて、海軍文學の人材を物色しようか。先づ凝と眼を注ぐと、前に擧げたる島村がゐる。「此日天氣晴朗なれとも波高し」との報告文は、彼れの執筆に係ると稱された。夫れから、新熟語で有名な「舷々相摩す」の作者に、秋山眞之がゐる。其他、小笠原長生、佐藤鏡太郎、まだ佐官ではあるが「此一戰」の著者水野廣徳がゐる。水野の著書は、出版界に黄海の大海戰以上の刺戟を與へたとの評判。

▼眞之は、將軍秋山好古の實弟で、愛媛の産である。佐藤は山形縣の出身で、國防論者である。秋山は神算奇謀と云へば餘り褒め過ぎるが、遠慮して雄大な計畫を立てる。兄貴ほどでは無いが、豪膽で、沈著な態度を持してゐる。佐藤は細心周到で、調査が綿密であるが、其意見を發表する時は放膽文で、何等躊躇する所がない。對手國に對して遠慮しなければならん事でも、平氣で痛快に論破する。前者を美文家とすれば、後者は論文家である。此の二者に比すれば小笠原は紀行文家ぐらゐな所で、あつさりして居る。人物も亦其の通りで、洒落で淡泊で、經綸策などを喋々する人ではない。海軍戰術家の双璧と云へば、當分佐藤、秋山二人に屈するの外なからう。

▼薩の海軍も、斯う新人物を擧げる事になると、非薩人が多い。殊に山形縣には、有望な奴が澤山ゐる。此の程佐世保水雷隊司令官になつた上泉徳彌は、其の豪い點に於て佐藤に劣らぬ。鎮海灣の經營を完成したのも、彼れの功多きに居るのである。薩派からは、毛嫌ひされてるやうだが、頭腦も手腕も群を抜いてゐる。又、山下源太郎は、戰術上の新智識を以つて鳴つてゐる。其の後進には、今村信次郎、下村忠助等の刀劍組が控へてゐる。

▼水路部長の川島令次郎は、石川縣の出身で、才氣煥發の好將官である。肝付兼行のやうな學者肌の男ではないから、適材の適處にあるものと思はれぬ。彼れは一昨年南清革命の時、第三艦隊司令官として南清の警備に當つて居た。圓轉滑脱で、交際が旨く、機宜の處置を取るに敏捷であつたから、歐米の軍人間に惡評を蒙らなかつた。海軍外交家とでも云ふべき、一種の手腕を持つてゐる人物である。

警察界の人物

(一) 藩閥の牙營

▼日比谷原頭、濠を隔て、宮城に相對せるの處、二個の建物巍然として相對立せるを見る。一は白壁にして、一は赤煉也。一は極樂浄土の歡樂境にして、一は白熱地獄の閻魔の府也。前者は帝國座にして、後者は是れ茲に吾人の論せんとする警視廳也。寔に是れ絶妙なる好對照たらや。

▼警視廳は、之を官制の上より見れば、内務省に屬隸すべき一行政廳に過ぎず。従つて其勢力又微々たるもの、特に仰々しく評論の價値なきが如しと雖も、實は必ずしも然るに非ず。

▼其故如何と云ふに、彼には、司法行政の二警察權を有するが故に、若し其の主腦者の人物、才幹如

何に由りて、或は時に内相の疊壁を摩し、時の内閣大臣をして畏怖せしめ得ざるものなしとせず。況んや、時の政府に反対なる在野黨をして畏怖恐懼せしむるもの必ずしも勘なからず。

▼若夫れ、單なる一個の市民に至りては、其生活生命の安寧保安に對し、恰も生殺與奪の權あるかの觀なからず、明治二十年に於ける保安條例の如き、日露講和談判當時の日比谷燒打事件の如き、近くは大正政變に際せる騒動事件の如き、一は在野政客に對するクーデターにして、一は市民に對する壓迫なり。共に警察權濫用の結果なり。

▼之を一個人に對する警察權亂用の結果、無辜の人士をして其の冤罪に泣かしめ、或は一생을不遇に泣かしむるの實例、僕を換ふるも盡し能はざるものあるべし。其の尤も顯著なる最近の實例として、彼の二本榎五人殺當時に於ける嫌疑者として目されたる炭屋の如き、寔に氣の毒なるものなからず。彼は一朝、愚惡なる時の警吏に睨まれたるの單なる故を以て、遂に産を破り、身を破り、永年住み馴れたる居住にも住ふ能はず、一家流離の悲惨に沈淪したりと云ふ。爰に於てか吾人、警察權の威權を疑ふ能はざらんとするも能はず。

▼元來警視廳は、行政廳として、最も多く直接市民に接するものたるが故に、其の警察權を行使するに當りてや、必ず清直を旨として、其處に一點の私心を挿むべからず。若し然るにあらざれば、何を

以てか市民は、其堵に安んじ得るものぞ。

▼殊に警視廳は、行政警察廳なるが故に、常に政争の圏外に立ち、其の在野の人たると、在朝の人たるとに論なく、法の命ずる處に従ひ、尤も公平無私ならざるべからず。然らざれば、何を以てか、府の安寧を保ち、市の秩序を樹て得ん。

▼然るに從來の警視廳を見るに、名は行政警察なるも、其實、恰も是れ一個の中央政府の隱密機關の如き觀を呈せり。故に警視廳の眼中には、市民の保護よりも、時の政府の保護に重きをなす。従つて機密費の多くは、政府の隱密機關たらんが爲めに消費さるる元より其處也、豈怪ひに足らんや。

▼今次日比谷騒擾事件に憤慨せる東京府會が、所謂機密費の大部分を減削せる、寔に其當を得たるもの也。吾人をして云はしむれば、現時の警視廳の如きは一利なきにあらざるも百害あり。故に斷然之を廢廳して、之を府廳に隸屬せしむること、恰も各府縣に於ける警察部の如かしむるにあり。何ぞ必ずしも警視廳を特設し置くの要あらんや。

(二) 閔族の傳令使歴代の總監

▼警視廳は、明治八年歐米の警察制度の視察を了へて歸れる、薩人陸軍少將川路利良の建議に依り創

設せらる、而して彼は亦實に其の第一期の長官たりき。

▼今次警視廳が日比谷に建築せらるゝと共に、彼の銅像又建立せられたるもの、一つは其創設者たる
と、一つは又彼が、明治十年西南役に於て、巡查隊を組織して活動し、其の鎮撫に與つて功ありしに
由らずんばならず、譬へ彼に、今日の警視廳をして、中央政府の隱密機關たらしめ、歴代の總監をし
て、藩閥政治の爪牙たらしめ、傳令使たらしめし端を開くものありしとは云へ、彼が今日本邦警察制
度の基礎を築きし其功は没すべからず。寔に彼は警察界の元勳、恩人として、第一人者たるを失はず。
▼彼れの死後、警視總監の代はること十七人の多きに及べりと雖も、其中、二三を除けば、總て薩人
を以て之に任じ、薩人にあらざれば警視總監たる能はざるの觀あり。爰を以て世人は、警視廳を目し
て薩閥の園内なるが如く思惟す。然れ共是れ近視者流の觀のみ。

▼甲東、大久保利通以後、歴代内相の椅子は、多く長人乃至長人化せる者の占有する所に係り、特に
山縣侯の恩威の行はるゝもの最も深き故を以て、最近政友會内閣を除ける歴代の警視總監は、大抵
長閥の感化を被らざるものなしと云ふ、敢て不可あらず。

▼斯かるが故に、歴代の總監は、概ね、長閥の忠僕に甘んじ、閥族政府の傳令使を以て任じ、閥族官
府の威嚴を保持するを以て唯一の信條となせるが爲め、彼等の眼中には國民なく、議會なく、政黨な

き、決して怪しむに足らず。

▼彼等は國民を視るに國家の費用を負擔するが爲めのみの奴隸の如くなりとし、議會には、唯政府の
要求に反對するの權能なき一種の諮問府に過ぎざるが如く見ゆるなり。政黨なるものは有害無益なる
政治上の盜賊の如く認めらるゝなり。彼等は、政黨退治を以て盜賊退治と毫も異ならずと信せる輩也。
かゝればこそ、彼等は白晝平氣に、市民の權利を蹂躪し、政黨に對しクーデターを行ひ得たる也。

▼歴代の警視總監を見るに、通じて蠻骨猛氣惡辣の人たるの觀なからず。殊に三島通庸の如き其の最
優なるの者、明治二十年時の伊藤内閣の歐化政略が、激烈なる輿論の攻撃を受け、物情恟々として形
勢穩かならざるや、内相山縣の命を以て、クーデターの執行者たりしは彼也。

▼彼が總監となるや、常に非番巡查を召集して、今の本郷彌生町淺野邸内に於て、或は擊劍、或は綱
曳を行はしめ、又或時は品川砲臺に率ゐて牛飲馬食を爲さしめしなど、常に巡查の意氣を鼓吹するに
勉めたるが如きは、彼が市民に對して威を以て壓せんとしたる用意たりしに外ならず、以て彼の如何
に蠻骨猛氣の人物たるかを知らん。

▼三島に次いで、藩閥家を以て最良の好傳令使となし、模範的總監となせし者に大浦兼武あり、彼の
曩きに園田安賢の如き、身總監の位地にありながら、廳員を警視廳の大廣間に集めて、非政黨内閣の

大演説を試み、自ら警吏を煽動せんとしたるが如き、閩族に對し露骨なる忠僕振を示したる者ありと雖も、到底大浦の比にあらず。園田は見識を街々嫌ひあるに反し、大浦は徹頭徹尾實行的なり。彼は口の人にあらず、手の人也。

▼何れの政争、何時の政變にも、其側面には必らず警察權の爪痕を印せざるなし、随つて技倆ある警視總監は其位地を超越したる政治的演奏者の一人たるを得べし。此の意味に於て大浦の如きは、最も其近き人物として認識せられたるもの、如し。

▼彼れは任に警視總監にありしこと、前後二回、常に政黨内閣の建設に反對する急先鋒となり、最も頑強なる非政黨論の主張者として在野政客を震撼せしめたるものなりき。彼は政黨内閣と立憲制度との關係を正解し得るの智識を有せしにはあらず、只本能的に政黨を憎み、官府萬能主義者たるの人物なりし也。彼が當時、非政黨派の勢力を扶植せるに於て力あり、長閩派の好傳令使たりしや明也。

▼然れ共、彼が總監として、閩族の爪牙たりし外、何等罪の償ふべきものなかりしやと云ふに必ずしも然らず。些か角を矯めて牛を殺すの嫌ひなきにあらずしと雖も、花見取締の内訓の如き、道路取締の如き、惡徳記者の退治の如き、見るべきものなからず。

▼殊に其の警察協會を利用して部下警吏の常識修養に勉めたるが如き、又彼の當時の第一部長松井茂

(現愛知縣知事)の懸案になれる、常備消防制度創設の如き、尤も其功顯著なるもの也。然れ共、彼の、特に労働者懇親會を禁止したる措置に至つては、多少警察權濫用の非難は免るべからず。若夫れ、○主義者の追急壓迫、其度を過ぎ、反つて○○思想を促進せしめたる形跡あるの如き、最も彼の失態たらざるべからず。

▼之を要するに、彼は警視總監として、藩閩家よりは三島以來の好長官となしたるも、世人よりは、其毀譽相半ばせるものなるが如し。

▼三島、大浦に次いで、最も蠻骨猛氣あるもの、公柱最終内閣に總監たりし川上親晴とす。實に彼れは、之を曩きにしては三十八年日比谷騒動事件當時に於て、群集を激動せしめし主腦者たり。之を後にしては、今次の政變に際し、良民を鐵蹄にかけしめ、遂に彼の燒打事件を誘起せしめたるの人物也。明治維新以來三度なき稀有の大珍事に、再度共其主人公たるを知らば、彼の性格は稍々彷彿たるものにあらずや。

▼彼が今次の騷擾事件に關し、府會議員の質問に答へたる其言に「騎馬巡查を出し、抜刀を許す程度如何は一の問題にして、之を具體的に説明するは至難の事に屬す。然れ共、九日の騷擾の如きは正に其必要ありと認む。實際彼等は憲政擁護を口にするも、其實は彼等自身が憲政を撲滅するものなり。

憲政を撲滅するは即ち狂徒也。狂徒は尋常の手段を以ては取扱ふ事能はず。是れ騎馬巡查を出し抜刀を許せる次第也』云々と。

▼嗚呼何ぞ其言の大膽にて無暴の甚だしき、恰も彼は、最初より群集を目して狂徒なりとしたるらし。若し彼の言を以てせば、當時の國民は殆んど狂徒なりし也。何となれば當時の國民は殆んど皆口に憲政擁護を叫び居たれば也。然るに何ぞ知らん、彼の所謂狂徒は、先帝陛下の御不例に際しては、終日終夜、二重橋畔の石上に坐して、其御全徳を祈り奉りし、皇室を中心とせる忠良の民人たりし也。

▼人心熱狂の餘り、多少軌道を脱したりとて、直に之を以て暴徒と見做すは酷也。況んや初めより之を狂徒なりと目するに至りては、彼に常識ありや否やを疑はしめざる能はず。偏狹なる閥族的思想、狹隘なる官僚的識量を持てる彼の如き者をして政局の實働者たらしむ、寔に危い哉。

▼斯く歴代の警視總監なるもの、其の多くが蠻骨猛氣にて惡辣、閥族擁護の爲めには手段の如何を顧みざる底の非立憲家なるが中に、稍々面目を異にせるものに、龜井英三郎あり。安樂兼道あり。安樂は身政友會内閣に總監たりし者なれば敢て不可怪とせざるも、龜井にありては然らず、身藩閥内閣に在りて、比較的公平なる態度を持せし、亦又珍ならずとせざる能はず。

▼寔に彼は歴代の總監中、稀に見し濃厚篤實謹嚴の人なりき。彼に官臭なからざるにあらざりしかと、

他の總監の如く閥を作らず、常に人材登用主義を持して、閥外より多くの新進有爲の警官を拔擢し、多年廳内の濁れる空氣を排除するに力めたり。

▼從來警視廳は犯罪捜査の補助機關として、拘摸、博徒の如き所謂惡漢を謀者として使喚せる結果、恰も犯罪を擧ぐるに犯罪を以てせるの奇觀を呈し、遂に拘摸、博徒の横行跋扈となり、警吏の腐敗となり。殆んど警視廳の權威を危ぶましめたるの觀ありき。

▼然るに彼龜井の警視總監に就任するや、此弊害の一端を試み、先づ時の赤坂署長本堂平四郎をして、仕立屋銀次一派の拘摸を檢舉せしめたるを手初めとして、湯島の吉伊藤吉太郎、龜甲勝渡邊勝太郎、巾著屋豊公清水熊次郎、傘屋浪次佐々木浪治、根津の仁三公等の拘摸、及び關東一の稱ある博徒佃政等を期年ならずして一網打盡せしめ、警察界の搜索上に一新紀元を畫したるの功績、明治警察史上に特筆すべき價值なからず。

▼然れ共、彼が、當時の太田第一部長の建築になる、從來の派出所制を廢して立番制となし、市内の警察は殆んど倍加せるの改革は、些か失敗の譏りあり、遂に今春の制度整理と共に、再び舊に改復せられたりと雖も、斯の改革制なるもの、必ずしも制度其者の惡かりしにはあらず、只警察費に不足せるより、失敗なるかの觀を呈せしもの。必ずしも彼の不明失敗となすは酷なるに近し。

▼安樂兼道は、今次の就任と共に、警視總監たること二回、其前後の跡を見るに、未だ大なる失策なきと共に、何等譽むべき功績あるを認めず。是れ彼が主義の人にあらす、事の善惡に關せず、其時代の風潮に克く迎合して、如才なく立ち廻る所謂御坐成主義の人たるが故也。

▼彼は、世の非難を受けず、自己の椅子の安全を期するが故に、自己の内閣に不忠ならざる限り、反對黨に敵を求むること莫く、是れ後に大なる手腕、何の功績なきに依らず、比較的人望を有せる故也。彼が曾て千代田瓦斯に於ける其社長振り、近くは支那外交問題に關せる國民大會に對して、彼の取れる伶俐なる柔懷手段の如き、克く彼の性格を現はせるもの。彼は如才なき一個の吏務官と見れば大差なきが如し。

(三) 廳内の屬僚

▼警務部は元の第一部に該當するもの、今次の制度整理に當り改名せる也。此所に長たる者を小濱松次郎とす。彼は芋の畑に育ちしと云ふ外、何等人物として見るべきものならず、其小心狹量、事に當りて殆んど要領を得ざる、到底廳員の任命、賞罰、行政事務の監督などの重任に堪ゆる者ならず。

▼之を前の一部長太田政弘に比す、人物、學識、手腕共に數段の差あり。太田が人材主義を以て、適

材を適所に配置し、巧みに人と事との調和を圖りたるに反し、彼は同黨異閥、芋の畑の繁殖を圖るの外、何等能なき男也。彼が第二部長時代に於ては、某々等に利用されたる結果、兎角の非難高かりしに見て、彼の人格を推し得べきのみ。

▼長谷川保安課長は、千葉の出身にして、洋行歸りの新進法學士也。前太田一部長の拔擢せる英材の一人にして、太田の桂内閣に警保局長となるに及び、彼を推舉して現位地に据らしめたり。

▼體驅堂々、性磊落豪放なる太田に酷似せるものあり。加之、談話に巧みにして、對人をして不知不識の間に曳き付くるの妙味を有し、且つ頗る機略に富み、下情に通せり。彼が將來は寔に多望也。

▼官房主事湯治は、表面至極快活放膽を装へ共、其實案外小心なる人物也。昨年未府下に強盜の横行出沒頻々たる時に當り、國民新聞社員某、彼を訪ふて警視廳の方針を聞くや、豪然として彼は『小數の警官を以て、廣大なる東京市を取締らしむ、多少の強盜ある怪むに足らず、若し余の宅に強盜の來るあらば、叩き殺すのみ』云々と、其談話翌日の紙面に記載され、總監より其の無責任を叱せらるゝに及び、彼恐懼、昨の豪放に似ず、只管國民社に取消を頼めりといふが如き、彼の稚氣人物知るべきにあらすや。

▼元の第三部、現衛生部に長たる栗本醫學士は、性質溫厚篤實、閥に偏倚せず、屬僚に威張らず、些

の警官臭味に染まらず、俗中超然たる處あり。多年部長の椅子にありて、執務に倦まず、衛生防疫の研究に怠らざる、内外の信望故なきにあらず。先年來飲酒の爲め、多少健康を害せる處ありしが、近時少しく快復し來れるが如し。

▼高等係長松井吉太郎は、八方美人主義の如才なき人物也。彼は常に時の政府の使扈に従ひ、各政黨の間に出入し、時に待合に議員を擁して、大に幫間振りを示しつゝ、何ものをか得んとする處、彼の至人格は其處にあり、彼は寔に適所の適材たるの觀あり。

▼捜査係長山本清吉は、自ら大才子を以て居れど、其實極めて小才子也。彼は小學教員より身を起せるものにして、前係長鬼武藤の下に上席警部として、専ら詐欺、恐喝犯の主任たりき。當時の彼は、極めて沈黙寡言、自重的人物なりしが、一度係長となるや、全く如才なき、多言家と化したたり。

▼彼が今日鬼武藤以上に、其技倆を買被らる、所以は、彼が最も新聞政策に長じ、又絶えず新聞を利用して自己廣告を怠らざるが故也。彼の實力は、今日世人の思ふが如き敏腕なるにあらず、彼の功名心に急なる、自己廣告の爲めには蛇蝎視すべき惡辣なる手段を講じ來れるが爲也。

▼其尤も顯著なる實例として、斯の有名なる小松遜信次官斬の犯人檢舉に關し、當時芝口署長たりし三原の功名に歸すべかりし犯人を横取して、恰も自己及部下の功名なるかの如く装ひ、之を新聞紙に

堂々發表せしのみならず、實際苦心せる芝口刑事は何の賞與に有り付かざるに反し、芝口署の報告によりて拔駈けの功名をなせる、部下の某刑事が多大の恩賞に預かれるが如き、彼は此種の惡辣なる手段を敢てする卑劣漢也。

▼又其の最も甚だしきは、最近、横須賀に於ける酌婦殺し事件に關して也。當時其犯人は東京方面に逃亡せる形跡ありしより、同地警察署は、犯人の何人なるかを指名して其逮捕方を依頼し來れるを以て、犯人を逮捕せば直に同地に護送すべきなるに、狡獪なる彼は、東京に於ける一二の犯跡ありしを口實として、既に犯人は早くより、本廳の着目せる者なりとて、之れが護送を肯せず、恰も自己の明により逮捕せるかの如く誇らんとして、記事差止の解除を待たず、東京市内の各新聞社に之を發表し、堂々記載せしめたるより、横濱検事局は直ちに各社を告發するに至れり。茲に於て彼の責任問題廳の内外に起りたることの如き、彼は自己廣告の爲めには、手段を選ばぬ大膽惡辣なる人物也。

(四) 市内の警察署長

▼市内に警察署長たるもの、日比谷に廣上、外神田に千田、日本橋堀留に黒瀬、京橋北紺屋に福島、三田に田中、芝高輪に山下、麻布鳥居坂に法元、麻布霞町に田賀屋、赤坂に黒川、青山に吉田文一、

小石川富坂に廣田、本郷元富士に前田、駒込に中野、上野に矢野、下谷坂本に市村、谷中に東藤、日本堤に齋藤、本所相生に寶田、大手町に川上、原庭に石垣、向島に淺野、深川西平野に大山、扇橋に三浦、洲崎に竹川、水上署に出元、早稻田に三原、麴町に橋爪、西神田に永吉、四谷に前田、築地に岩田、神樂坂に本堂、日本橋久松に野田、愛宕に宮越、淺草象潟に古川等也。

▼以上の各署長中最古参として高給に居るもの、神田錦町の山下嘉太郎、芝愛宕の宮越正良、日本橋久松の野田耕夫、淺草象潟の古川權九郎の四者とす、山下は人材登用主義の龜井總監時代には既に、愛宕より深川西平野に左遷されし老耄せる凡骨にて、今次制度整理に際して彼自身既に『首』たるべきを覺悟し、最も愛翫措かざる數百圓を投せる益裁すら、之を賣放して準備し居れりと云ふ、然るに『首』とならざりしは彼自身も以外とせるならん。

▼宮越は不得要領にして、些の事務的手腕すらなき、一個の舊式警官に過ぎず、然れ共彼は安樂總監に關係あり。今次制度整理に彼れの關與せしもの多しとの噂あり。

▼野田は舊き獨逸協會の出身にして、一個の事務家と云ふの外、極めて平凡也。

▼古川は後藤派の人たるが故に、現總監には良からず。默々例の鬚骨を發揮して、千束町の白首を畏怖せしめつゝあり。

▼元の赤坂署長として、仕立屋銀次檢舉に名を作せる本堂平四郎は神樂坂に左遷されて、頗る不平なるらし。然れ共彼が實力ある名署長たるかの觀あるは、恰も山本搜索係長と等しく新聞政策によれる自己廣告の巧みなりしが爲めなり。されども彼は山本の如く惡辣ならず、稚氣ある男也。彼の未だ赤坂に署長たるの時、一巡查を石川五右衛門に假装せしめて管内に放ち、部下の巡查に逮捕競争をなせしめ、優者に自己秘藏の名刀を與へて、翌日の新聞に之を記載せしめ、以て名署長の虛名を博して、欣々然たりしが如き、尤もよく彼の性格を語るものなからず。

▼築地の岩田重義は、軍人上りにして、元警官練習所長たり。性豪慢不遜、人民に接するに恰も士官の兵士に對するが如く、一に威壓を以てするが故に、至る所評判甚だ宜しからず。

▼四谷署長前田慎吾は、今次の改革に際し、薩摩の關係を以て新に入れる法學士也、彼が未だ部下を統轄するの才能なきは、最近新聞の問題となれる署内新舊巡查の軋轢に見て明かなり。現に小濱警務部長は、彼を推舉するに當り、(彼の技倆を危ぶみ)殊に川崎警部を後見役同様に西平野署より轉任せしめたりと傳ふるものあり。

▼西神田署長永吉綱は、署長としての署長也。彼は一見事務に放漫なるが如く、一切を部下任せにするの觀あるは、是れ彼の傑出せる所以にして、他の吏務的亞流の徒が、小過なからんとして小心恂々

たるに反し、彼は常に其大綱を宰するの外は、一切部下をして自由手腕を振はしむるの大度あり。又彼が部下に過失あるや、自ら其責任を負擔するに潔き、彼が部下に推重せらるゝ所以寔に其處なり。

彼は今次の改革により警視に昇進せるもの。生國は薩摩にして、西郷翁の血族也。

▼南元町署長緒方惟一郎は、苦學生より晩年赤門を出たる立志傳中の人也、部下と共に苦樂を分つとは此人の事也。凡骨多き署長の内出色の觀なからず。

▼七軒町署石川精吉は、新場橋署長鈴木元吉と共に埼玉縣の巡查たりしもの、彼前年知事市川阿蘇次郎に知られて、清國警務學堂に顧問たること三年、歸朝後、萬世橋署に長となり。今次の改革に際し、同署に左遷されたる。是れ彼が闊外たるの故也。實務的手腕に於ては現今彼の右に出づるものなしと云ふも敢て不可ならず。

▼北紺屋町署長福島は、龜井總監の就任と同時に、地方より拔擢されたる秀才の一人也。彼は警務課長時代に、戸口調査簿の整備をなし、現今比較的完備せりとの評あるカード式索引は彼の發案になるもの、▼麴町署長橋爪慎吾は、元刑事課長たりしことあり。性質緘黙、沈著にして果斷に富む。人材登用主義の人なるが故に、部下の推重あり。彼に不遇の觀あるは闊外に獨立獨歩するの故ならずんばあらず。寔に彼は廳中老練家の第一人にして、山下、宮越輩の遠く及ぶ處にあらず。

第二部

(1)

現代文士分布觀



小川幸錢氏作

第

二

卷

現代文士分布観

關東—東京、群馬、千葉—信越—長野、山梨、石川、新潟—東北—秋田、宮城
 福島—四國—徳島、香川、愛媛—京畿—京都、兵庫、大阪、奈良—東海—神
 奈川、静岡、岐阜、愛知、滋賀—中國—岡山、山口、鳥取、島根—九州—福岡、熊
 本、長崎、大分、鹿児島

(其一) 文藝の色彩

是れまで政權を握る者は、薩長土肥に限られてゐた。近年に至つて夫れ以外の地方から大臣が出たが、内閣組織者は依然として薩長土肥の閥外に出でない。閥外で政權を握つた者は、多數黨に擔がれた京都公卿の西園寺陶庵だけである。其の多數黨と無關係で大臣になつた者は、何れも薩長土肥の系統に屬した者である。其の系統外の者は、容易に其の地位を得ることが出来ない。處が、文壇には閥とか系統とか云ふものはない。縦令あつても、夫れに頼らねばならぬ事はない。紅葉の全盛時代には

師弟の關係で文壇に紹介され、今日でも赤門とか早稻田とか云ふ團體的勢力に推されて乗出す者の無いではないが、自分の文才力量で以て獨歩する事が出来る。國の薩長土肥を問はず、學閥の赤青を論せず、「力」ある者は、文壇に雄飛することが出来るのである。

閥外の陶庵が文士招待會を開いたのは面白いが、雨聲會など云ふ名稱の下に一種の團結を作つたのは甚だ感服しない。政友會總裁を辭した彼れは、雨聲會頭取をも罷めるのが順序である。文藝調査會も廢滅に歸した今日、私立文藝院みた様な會を存続するのは好ましくない。文藝には國境も無ければ黨閥も無いのである。政權を握るやうに、或種の者が權威となつて、擅に色彩を施す事を許さないのである。

文士の分布は自然である。政權掌握者が故意に、人物を偏在させた様な傾向がないのである。其の地方の氣風や、人物の感化に因つて、文士の輩出しない地方もあるが、夫れは故意に制限した爲めではない。自然に産出しなかつたのである。文藝の色彩と地方との關係を論究するのも興味があるが、此の自然に分布された文士の顔觸を見るのも亦一興であらう。

(其二) 關東

(4)

文士輩出地の第一位は東京で、第二位は長野である。之に亞ぐ者は秋田、岡山、愛媛、京都、兵庫、愛知等である。が、彼等の多くは東京に住居して居るから、殆んど東京化されて居る。其の作品に依つて、作者の地方色を讀み、郷土趣味を味ふことは出来ない。中には出身地の地方色、又は郷土趣味を表はした作品は無いではないが、甚だ少數である。

東京の出身には、新古さまざまの人物があるが、就中下町趣味を傳へたのは、山岸荷葉である。彼れは物知りの若旦那風と云ふ所があつて、にやけて輕薄らしいが、言語應對が快活である。其の作品にも矢張輕快な、通がつた所が表はれてゐる。『紺暖簾』は、其の代表作であらう。永井荷風は洋行前は『地獄の花』と云つた様な作物のみであつたが、洋行後は享樂主義の新しい味を傳へた。『ふらんす物語』は當時の文壇を刺戟した作物で、現今のデカダン風の先驅をなしたものである。其の後『隅田川』とか、『牡丹の客』とか、新しい江戸趣味の仄めく作品を試みた。

江戸時代の戯作者から脱化した人には、宮崎三昧、櫻庭篁村などがゐる。歴史小説家には、塚原謙、柿園がゐる。硯友社の殘黨には、石橋思案、巖谷小波がゐる。『五重塔』の幸田露伴がゐる。一時は文藝批評家で鳴つた内田魯庵がゐる。魯庵は丸善の番頭となつて以來、翻譯物でお茶を濁してゐる。其他翻譯で知られた人には、文博上田敏、平田禿木、藤澤古雪、千葉鞠香などがゐる。目下上田は京大

平田は高師、藤澤は學習院の教授で、翻譯は其の内職に過ぎぬ。

夏目漱石、柳川春葉、前田曙山、金子薫園、蒲原有明、笹川臨風、水野葉舟、小林愛雄、吉井勇、谷崎潤一郎、長田幹彦等も亦、東京の産である。但し蒲原の號の九州、巖谷の滋賀に縁あるは、父母の郷里を記念するものである。漱石は洋行後、東大文科の講師で、博士にもなれず不平でゐたが、『我輩は猫である』を公にし、『倫敦塔』『薙露行』等を續出するに至つて、文壇に雷名を轟かし、一兩年後には所謂小説大家となつたのである。其の時、文部省では、彼れに博士號を授けたが、今度は反對に肘鐵を喰はせた。今は『東京朝日』に據つて、例の胃弱文藝を試みるの外、他には創作を發表せぬ。春葉の『生さぬ仲』は關西では大評判だが、東京では一向に顧みられぬ。剩へ門下某の代作だと、指彈されてゐる。臨風は學校教師が本業だが、ちよいくと歴史物に筆を染めてゐる。薫園は河派歌人だが、常識の發達して居るだけ、金儲けが上手で、諸方の講義録に關係してゐる。中には小林愛雄の名を拜借して、執筆したのもある。

閨秀作家の三宅花圃は、最う古い。新進には長谷川時雨、田村俊子など云ふ白い顔が見える。俊子は露伴の門下で、佐藤露英と云つた女である。女優生活後、心機一轉して人妻となり、享樂主義の風潮に薰染してから、メキ／＼腕をあげて來た。大正文壇に於ける閨秀作家の白眉である。

(5)

群馬からは、自然派の田山花袋、閨秀作家瀨沼夏葉が出てゐる。夏葉は作家ではなく、露國文學の翻譯家である。そして、其の翻譯も大抵亭主の格太郎が手傳つてゐるのだから、自分一人の努力ではない。花袋は『蒲團』から生れて『生』妻など云ふ大作で名を成したのである。彼れの作品には地方色とか、郷土趣味とか云ふものが表はれてゐる。人生の深い觀察よりも、自然の描寫に長じてゐる。偶々彼れの書く文藝評論までが、評論ではなくて、描寫になつて居るから滑稽である。

地方色を最も鮮明に表はしたのは、茨城の長塚節の『土』である。彼れは日本派の歌人で、農業に従事して居たが、此の一小説によりて文壇の注目を惹いた。同縣の人物には、彼れの外、菊池幽芳、舍弟戸澤姑射、淺野馮虛がゐる。後の二人は赤門出身で、『沙翁全集』の翻譯者として知られたが、創作は美文位なもので、他に見るべきものが無い。幽芳は家庭小説『乳兄弟』の作者として低級讀者に歡迎されてゐる。

千葉には桑田春風、文博藤代素人、平木白星、埼玉には島村荃三がゐる。春風は新體詩人から一轉して手紙研究者となり、白星は遞信局より陸進して本郷駒込郵便局長となつた。素人は京大文科の教授、獨逸文學の紹介者である。荃三は注目すべき作家とも思はれぬが、埼玉には人が無いから、此の人を擧げたのである。

(其三) 信 越

長野の自然は、島崎藤村の詩に入つて現はれた。高原の様々の色彩は又、彼れの小説によりて光を放つた。『藁草履』『朝飯』『破戒』等の作物を読めば、其の色彩に觸れることが出来るのである。けれど、藤村の作物は、どれを観ても泰西作品の模倣——翻譯物と云つた風な感じがする。同じ長野の自然の描寫でも、日本畫ではなく、水彩畫で觀るやうな感じがする。木下尚江の『火の柱』や『良人の自白』にも、地方色は表はれて居ない譯ではないが、所謂尙江式の人物が活躍して居るので、郷土趣味を味ふの餘裕がない。

金子筑水、久保天隨、樋口龍峽、中島孤島、吉江孤雁、窪田空穂、中澤臨川等も亦、長野の産である。筑水は頭腦の可い人ではあるが、餘りに理に墮ちるので、彼れの文藝評論は生彩がない。新しい空氣に觸れてるやうな、又觸れて居ないやうな、間の抜けてる所もある。天隨はブックメーカー、龍峽は新政黨の同情者、孤島は翻譯家である。臨川は工學士で、京濱電鐵の技師長であるが、外國文學に目を曝して居るので、文壇でも棄て、は置かない。空穂は、近時旋頭歌の創作を試みてゐる。

山梨よりは中村星湖、三井甲之、前田木城、富山よりは三島霜川、尾島菊子、福井よりは文博芳賀

矢一等が出てゐる。芳賀は國文家であるが、固陋な偏見を抱いて居ない。比較的新しい文學も解つて居る。圓滿な人物である。が、酔ふと、少々酒癖を發揮する方で、先年は交番の前で立小便をやらかして、巡査に一泡食はせた事があつた。『國文學史十講』『國民性十論』などの著述がある。

石川の三宅雪嶺は、文博の學位よりも、人物に價値がある。『日本及日本人』を主宰し、言論界の權威者として立つて居る。彼れの文章は拮据聲才で讀み憎いが、演説の方が訥り乍らも力がある。大學教授にならずに、浪人で押し通す所に、彼れの人氣があるのである。泉鏡花は『外科室』以來聲名を擡にしたが、最下り坂である。けれども、妖艶の筆致、怪奇の構想は何人も模倣することが出来ぬ。下町には、まだ却々愛讀者を有してゐる。徳田秋聲は人物が温厚で、苦勞性の、くよくよ泣言を云つてると云つた風な人である。其の作物も沈鬱な、鉛のやうな感じのするのが多い。紅葉門下の出身で、新しい方面に進んで居るのは此の人だけである。が、決して模倣することはせぬ。自分の取るべき路を取つて、傍目もふらず進んでゐる。鏡花と云ひ、秋聲といひ、流行に追隨しないのは、北國氣質を現はしてゐるのかも知れぬ。

新潟からは、長谷川天溪、小川未明、吉田白甲、櫻井天壇、相馬御風等が出てゐる。天溪は早稻田の出身で、洋行前までは『太陽』の文藝評論を擔當して、自然主義の爲めに氣を吐いて居た。歸朝後は

博文館の幹事となり、『生活』を主宰してゐる。未明は大した作物もないが、特色ある作家と稱されてゐる。北國風の暗い感じのする作で、青年作家の戀愛物のやうに薄ッぺらでない。『惑星』『北國の鴉より』などの著作がある。

(其四) 東 北

秋田からは、眞面目な人物と、不眞面目な人物とが出てゐる。青柳有美は、不眞面目なやうだが眞面目な男である。其の著作は餘りに奇を弄するので、世間からは不眞面目と見られるが、本人至つて眞面目である。『戀愛哲學』『有美臭』など、發賣禁止物が二三種ある筈だ。伊藤銀月は、眞面目なやうで、不眞面目な男である。産後程なき政女を離縁して、其の妹の鶴子と再婚し、鶴子の姦通事件を種に小説を作り、一種の手段に供したなどは感服されない。後藤宙外、小杉天外、田口掬汀等は一時盛んであつたが、近來はとんと振はぬ。天外『無名通信』に失敗してから、貯金も遣ひ果して、元氣が更に揚らないやうである。

宮城の出身には、松居松葉、土井晚翠、吉野臥城、眞山青果がある。松葉は上毛系の人物で、純仙臺人ではない。『萬朝』記者時代には凄腕を揮つて、新聞界の耳目を聳動したが、洋行後は三越呉服店に

隠れ、駿河町人と號してゐる。脚本と劇評を試みる外、小説は作らぬ。晚翠は二高教授で、仙臺に止まつてゐる。彼れの詩作には、仙臺附近の自然を詠んだものが多い。青果の『南小泉村』は、房州邊の感じがして、郷土趣味に乏しい憾みがある。臥城には『明治詩集』小説『痛快』等の著作がある。福島よりは服部躬治、岩手よりは佐藤告天子、細越夏村、山形よりは梅澤和軒、千葉江東、青森よりは佐藤紅緑、薄田斬雲、秋田雨雀等が出てゐる。服部は歌人で、其の妹に水野仙子がある。告天子は『東京朝日』の記者で、辛辣なる筆鋒を揮つてゐる。和軒は『美術正論』の主宰者で、『西行法師傳』繪畫鑑賞法』等の著述がある。紅緑は男振は好いが、傲慢な所があるので、人に嫌はれる。俳句から小説に入り、更に脚本に轉じ、才氣があるだけに何れの方面でも問題になるが、夫れを貫かうとする確信がない。結局は、俳句の選者に逆戻して、餘生を送る事となるであらう。

(其五) 四 國

香川の大倉桃郎は『琵琶歌』が絶頂で、其の後の作は甚だ振はない。小島鳥水は山岳研究者で、特色を保つてゐる。

高知からは、大町桂月、馬場孤蝶、黒岩涙香、田村松魚、岡村楠紅が出てゐる。桂月は文章家で、

青年に崇拜されてゐる。彼れの著書を出版すれば、賣高が多く、従つて利益も多いといふので、出版書肆の人氣の焦點となつた。『學生』で、主筆に彼れを擔いだのも此の理由に基くのである。近時彼れの筆も漸く荒んで、『福の運』など云ふ著作を公にするに至つたが、以前のやうな盛況を見ることが出来ない。涙香は『萬朝』の社長で、昔は是れ娘の周六とまで怖がられた男である。女房の不身持で散々苦勞した爲めに、心機一轉、頓生菩提心を發して、『天人論』を著はし、聖人周六となり濟ましたのである。涙香の名は探偵小説で謳はれ、今も山村僻陬に讀者を持つてゐる。併し彼れの本領は是れでない。今や理想團の發展を冀ひ、婦道を鼓吹し、『婦人評論』をすら發行してゐる。松魚は米國より歸朝後、一向振はず、妻俊子の光芒の前に薄い影を曳いてゐるのみである。

愛媛は日本俳句の發生地で、文學史上に記念される郷國である。子規歿後の俳壇に、新傾向を唱へてゐる河東碧梧桐、ホト、ギスの壘を守つてゐる高濱虚子、選者で有名な内藤鳴雪、寫生文の寒川鼠骨は、皆其の産物である。虚子は一時小説を試み、『鶏頭』『俳諧師』等で有頂天になつたが、再び俳句に歸つて、雑誌經營に努力してゐる。其他同縣の出身には、須藤南翠、押川春浪、服部嘉香、片上伸等の古顔と、新進人物とがゐる。

(其六) 京 畿

京都は、土地其の物が、既に古典趣味を帯びてゐる。其産出する文士も亦、周囲の境遇、自然の感化を受けて、やはり古典的に出来あがつて居る。高安月郊、與謝野寛、姉崎嘲風、佐々醒雪、中川四明、皆さうである。月郊は泰西の新しい作物を讀んで居るが、其の創作は依然として古典趣味を脱しない。與謝野は洋行後、譯詩に努めて居るが、彼れの本領ではない。本領でない所に空な努力をするよりは、詩歌の畑に新しい鋤を加へるが可からう。嘲風、醒雪、共に文博の學位を以て満足してゐる。四明は『俳諧美學』の著者で、此の方面に研究の歩を進めてゐる。

生田葵は、小波の門人であるが、全く毛色が變つてゐる。屢々風俗壞亂の著作を公にしたので、其の筋の白い眼で睨まれたが、自然主義の作家からは排斥されてゐた。而して可哀いように、彼れの作物は似而非自然主義の名に葬り去られた。兎に角モオバサン風の小説を試みた先驅であるが、人物に重味がない爲めに、輕蔑されたのである。堀内新泉は成功小説の作家で、小川煙村は『やまと』の三面記者である。是れ等は、京都産でも、稍趣を異にして、前者よりも下つてゐる。

兵庫、大阪は、管轄の區域が廣いので、多種多様の文士が出てゐる。岩野泡鳴、前田林外、河井醉茗、三木露風、與謝野晶子、高須梅溪、武田仰天、水落露石、村上浪六などは、夫れである。浪六は撥鬢小説で賣り出した男で、相場もやれば山師もやる。人生の有らゆる苦楚辛酸を嘗め盡したと云

つても、必ずしも誇張ではない。『人間學』を著すだけの資格はある。淡路に生れた岩野泡鳴は、新體詩から評論に入り、近來小説に筆を染めたが、非常に上達して來た、『ぼんち』『脛の肉』熊か人間か』は其作中で注目するに足るものである。

醉茗は、新體詩人としては随分古い男であるが、大なる發展もしない。林外は詩集『夏花少女』『花妻』の著者である。近時露語研究に従事して、殆んど創作を出さぬ。晶子は、短歌壇の異彩であるが、亭主を離れて獨歩することは困難であらう。情熱は彼女唯一の資本で、是れが枯涸すれば、其の生命は終るのである。小説には、殆んど其の鬼才の面影を認めることが出来ぬ。

大阪市そのものは、俳句の盛んな地であるが、傑出した文藝家を出して居ない。彼等の矜る浪華の文學は、府下殊に堺地方の人の手を借りて勃興したのである。俳人として擧ぐるに足るは、僅かに小間物屋の水落露石くらゐの者である。奈良から、上司小劍が出て居るのは、意外である。神主の子―社會主義者と、斯う對照して見たゞけでも、舊都の色彩を帯びて居ない。京畿の作家中で、一番新しい作物を出してゐる。杉村楚人冠は和歌山の出身で、『大英遊記』『七花八裂』等の著書がある。

(其七) 東海。

神奈川よりは山崎紫紅、坂井久良岐、内海月杖、静岡よりは遅塚麗水、山路愛山、角田浩々歌客、が出てゐる。紫紅は脚本作家で、『史劇十二曲』七つ桔梗等の著作がある。そして、彼れが横濱市會議員の公職を帯びてゐるのも、何となく芝居じみてゐるではないか。麗水は『都』の記者で紀行文家として知られてゐるが、低級趣味の小説も書けば、美人系の研究にも思を潜めてゐる。常に色眼鏡を掛けて居るので、花柳界では眼鏡の先生と云つてゐる。愛山は史論家で、一種の文體で以て、讀者を引きつけてゐる。

岐阜は、文博坪内逍遙と、森田草平とを出してゐる。逍遙は老後の生命とした文藝協會を解散して、再び早稲田の教授生活を送る事となつたが、最近文藝史には忘れ得ざる一人である。彼れは『小説神髓』『當世書生氣質』の二書を出して、明治小説界の新氣運を促した。夫れから眼を劇界に轉じて『桐一葉』『牧の方』等の脚本を公にし、劇壇に新空氣を導き入れたのである。其後暫く倫理教師で眠つて居たが、氣運の熱するを見るや、再び文壇に現はれて『新樂劇論』『新曲浦島』『新曲かぐや姫』等著して、新樂劇を起すの新運動を試みた。彼れの作には振ひ付きたい程の物もないが、斯様な風に文壇に新境地を拓き、新刺戟を與へた所に價値があるのである。草平には、『煤煙』の外、『自叙傳』『初恋』等の著作がある。何れも情婦に取材したものである。

愛知は、美人國である。東海諸縣中で最も多くの文士を出した。其の美人國の文士の顔觸は、小栗風葉、岡本靈華、沼波瓊音、渡邊霞亭、村井弦齋、水谷不倒、野口米次郎と、先づ斯うである。霞亭、弦齋、不倒は現代の作家としては餘りに古い。殆んど前世紀の作物に接するやうな觀がある。風葉は『戀慕流』の出世作以來、『青春』を絶頂として、『天才』『戀ざめ』と漸次彼れの熱が醒めて行つた。今日は、最う死んだのか生きて居るのか分らぬ。縦令振ひ立つた處が、以前の風葉ほどの聲價を收め得ることは出來まい。野口は英詩人、瓊音は俳人であるが、後者には小説の著作もある。

滋賀よりは西村渚山、三重よりは文博佐々木信綱、西村醉夢が出てゐる。信綱は東京文科大學古典科の出身で、竹柏會の主宰者である。其の數多い著作の中で、『ちもひ草』と『日本歌學史』は出色のものであらう。

(其八) 中 國

岡山からは、江見水蔭、薄田泣菫、正宗白鳥、尾上柴舟など、異彩ある文士を出した。水蔭の今日は、冒險小説で餘命を繋いで居るが、硯友社の盛時は、一方の旗將として花々しい武者振を見せた。其の著作は、總べて『水蔭叢書』中に收められてゐる。泣菫は新體詩界に一時期を劃した詩人で、當

時は多くの模倣者を出したほど勢力を占めて居た。白鳥は短篇小説の創始者とも見るべき作家で、其の皮肉な觀察、内面的の描寫に成功した。人物は泣童は氣取つて高く止まり、白鳥は痛い程眼を光らして、冷かに視てゐる。柴舟は新しい歌の畑を耕した一人で、多くの門下を出した。其の門下生は信綱、寛等の夫れより、今日の新しい歌壇に活動してゐる。

『東京朝日』の石川半山、デカダンの近松秋江、『モリエール全集』の翻譯者草野柴二も亦岡山の産である。秋江は妻に去られて『別れたる妻に送る手紙』を作り、一時お白粉などを顔に塗つて、淋しい笑を洩して居るとの噂もあつた。『文壇無駄話』以後、文壇に認められて來た。

山口には傑出した作家はない。詩人兒玉花外、獨逸文學の紹介者片山孤村の外は、横山黒頭巾、淺田江村、井上劍花坊など云ふ手合である。

廣島よりは、登張竹風、小山内薫、岡田八千代、鈴木三重吉、正岡藝陽が出てゐる。竹風はニイチエの唱導者として、其の名を謳はれたが、今は二高講師で雌伏してゐる。小山内兄妹は青森系の人物だが、生地は廣島である。薫は赤門出身の才人で、新體詩、小説、脚本、行くとして可ならざるなしである。其の著作の重なるものは、『小野のわかれ』『夢見草』『窓』近代劇五曲』である。廣島氣質に東京趣味を帯びた人物で、舞臺監督などには、或は成功するかも知れぬ。三重吉の作品に觸れると、微

弱な電流を通じて居る電線で舌を刺すやうな感じがする。今年の文壇では、花袋、泡鳴、草平、俊子と共に其の努力を賞すべき作家である。

鳥取の杉谷代水、正岡秋子、坂本文泉子は、餘程燒きが廻つてゐる。生田長江は文藝評論家と云ふの外、取り立て、云ふべき事はない。文泉子は、以前本名の四方木を雅號の如くに用ひ、俳句、寫生文等で日本派に重きをなして居た。秋子は、藝陽の妻で、小説の著作がある。

島根よりは、森鷗外を筆頭に、島村抱月、中村春雨、伊原青々園、大谷纒石が出てゐる。鷗外は醫博、文博で、本職は陸軍々醫總監である。神經質であるが、精力主義の人で、毎月百頁の原稿を書くさうである。夫れが本職の餘暇に書くのだから、驚かざるを得ない。而して、其の著作も詩歌、小説、脚本、翻譯の多方面で、重なるものは『水沫集』即興詩人『うた日記』一幕物『青年』等である。名聲の高い割合に賣行の悪いのは鷗外と、夫れから上田敏であるさうだ。

抱月は藝術座を創立して、新生面を開いたが、夫れだけ多くの敵を作つた。『早稲田文學』の周圍にある、多くの乾兒のある間は、是れまでの勢力を支持して行ける。學殖は左程豊富とも思へないが、聰明な人である。女優問題で非難されて以來、だいふ色男らしくなつた。春雨は『無花果』の出世作の外、數種の著作がある。洋行後は、劇の研究に身を委ねてゐる。青々園は『歌舞伎』の主筆で、『日本演

『劇史』を公にしてゐる。阿國・淨瑠璃の島根から、是等四人の劇通を出して居るのは、一奇とせねばならぬ。

(其九) 九州

福岡は、思想史にも、政治史にも一種の異彩を投げてゐる。而して、其の出身には、福本日南、堺枯川、宮崎湖處子、小宮豊隆等がゐる。湖處子の名は『歸省』によりて文壇に知られたが、民友社を去つては香として聞えなかつた。其後宗教界より出で、『細君の自白』と云ふ發賣禁止物を試みたが、藝術の匂が餘りに稀薄であつた。日南は『元祿快舉録』で世人に記憶されたが、『日本』の記者時代には利鎌の舎と號して、萬葉振の和歌などを詠んでゐた。枯川は文藝評論家になりさうに思はれたが、『萬朝』の記者になつてから、社會主義に傾倒し、退社後は其の實行方面の運動を試みた。久しく牢獄に出入して居たが、今は賣文社裡に聲を潜めてゐる。豊隆は文藝評論と、創作の兩刀を使つてゐるが、まだ特色を持つて居ない。大分の野上白川程度の未成品である。

熊本よりは、徳富蘇峯を筆頭に、其の弟蘆花、戸川秋骨、土肥春曙、北原白秋が出てゐる。白秋は姦通事件を惹起したゞけの情熱があるから、いくらか詩人肌の所がある。熊本人の伶俐をデカダンで行

つた風の男で、人物は香ばしくないが、其の作品には見るべきものがある。秋骨は翻譯家、春曙は素人役者、蘇峯は新聞記者である。蘇峯の文章界に新生面を開き、平民主義を鼓吹して若い日本の心臓と躍らした事は夙に世の知る所である。蘆花の作品は、文藝專業者からは、淺薄だの、非藝術品だのと非難されるが、『不如歸』でも、『自然と人生』でも、『寄生木』でも、『みゝすのたはこと』でも、多きものは百幾十版、少きも十版以上を重ねるのは豪いものである。人物は偏屈だが、やはり熊本人の伶俐は有る。詩的農夫生活をやつて、靜かに筆を取つてゐる清興は、現代の享樂主義に背を向けて居るが、そこに又面白い味ひがある。自然を寫すの筆は、野川の清い流に秋草の花の映らふ感じがする。目下出版書肆の引ッ張り風になつてゐるのは浪六と、此の男とであるが、容易に著作を公にせぬ。自重するといふよりも、在來の印税で飯が食へるから、悠暢に構へて居るのであらう。

長崎の半井桃水は、低級趣味の小説を亂發するので有名である。亂作の點に於ては、霞亭に雁行してゐる。曾ては一葉を文壇に紹介し、一葉に戀された程の艶福者であつたが、今日は甚だ振はぬばかりでなく、最う文壇の落伍者である。廣津柳浪は『今戸心中』『畜生腹』『河内屋』等の諸作で、明治の文壇を動かしたものである。過去の功勞者として見るの外、今日の作物には敬意を表することが出来ぬ。

鹿兒島よりは西村天囚、昇曙夢が出て居り、宮崎よりは若山牧水と云ふ男が出てゐる。天囚は種子島の生れで、『大阪朝日』の記者である。『屑屋の籠』『日本宋學史』等の著述がある。曙夢は、大島の産で、駿河臺の正教神學校を卒業した。『白夜集』『決闘』等の翻譯物と、『露西亞文學の研究』とがある。牧水は、柴舟の門下で、青年歌人中ではものになつてゐる。——現代文士分布觀は、先づ此邊で御免を蒙る。

帝大總長論

山川健次郎——澤柳政太郎——眞野文二——北條時敬

(一)

山本内閣が行政整理を斷行するとなつた時に、僕は文部々内にも必ず何事かあるに相違なからうと思つて居た。これは現文相の奥田義人其人が、ナカ／＼普通の凡庸ではなく、原内相と共に現内閣の双璧だと聞いて居るので、先刻發表された司法官や、鐵道院の整理具合を拜見しては、トテも黙つ

ては居まいと睨らんだからだ。處がトウ／＼四大總長の更迭と云ふのがあつて、僕の期待が何うやら達せられた様になつたのが嬉しかつた。即ち東京と京都は、之れが總長たりし濱尾、菊池の兩氏が、昨年時を同うして樞密顧問官に任せられて以來、暫らく専任總長を缺いて居つたのが、その更迭で立派に極まつたのだ。これは教育調査機關の新設と共に奥田文相の御手柄であると云ふことが出来やう。

(二)

東京大學總長の理博山川健次郎氏は安政元年の生れだ。何んでも會津籠城の時は十五六で、もあつたらうか、而も城中では赤羽四郎や柴四郎等と共に、大に奮闘を續けたものだ。其後城が落ちてからは亡國の怨を懷いて、訛しき田舎の生活を送つて居たが、天晴れ有爲の青年を此儘廢らすも惜いものだと、東北の巨傑廣澤安任が肝煎で、藩の選拔生となり、外國へ留學したのが、慥か明治の三四年頃だつたと思ふ。初めは露國に留學して工學を修めたが、問もなく米國に轉じてエール大學に入り、明治六七年頃業終へて日本に歸つてからは、物理學を以て、東京理科大学に教授たること二十餘年。明治二十五年から三十四年迄理科大学長の要職に就いて居た。其後東京大學の總長ともなり、三十七八年戰役の起る前まで勤めたのであるが、例の七博士事件で、戸水寛人氏の休職と同時に責を負ひて、其

身を退き、暫らく閑散の境遇にあつたのだ。丁度その時、九州の富豪安川敬一郎氏が工學専門の學校を設立したいとあつて、これが一切の要務を彼れ山川に依頼して來た。頗る殊勝な心掛けだと云ふので、喜んでこれに應じ、諸事萬端彼れが指圖の下に出來上つたのが今の明治専門學校。慥か二三年間位はその校長になつて居つた筈だ。かう云ふ都合で彼れが九州に居つた間に、官立の九州大學なるものが出來た。別段總長となるべき人物がないと云ふので、遂に彼れをしてこれが長たらしめたのが、ツイ先頃、東京に轉ずる迄の彼れが經歷である。

(三)

山川は物理學の專攻學者なるに加へて、その元來の性質が頗る堅實に出來て居るから、一寸見た處では、誠に愛嬌に乏しい様な處はあるが、其氣骨稜々たる間にも自づと人を敬服せしむる處がある。彼れは自分の是と信ずる所は、敢然として之を語り、毅然として之を守り、更に決然として之を行ふ方だ。正しいけれども強い。僕は彼れが剛直なる二三の例證を知つて居る。

嘗て山川が卒業式の時、生徒に演説して、上流社會に淫靡の風が多いのを説き、當時の文相菊池に止められても、實例があるとして、斷じて聞入れなかつた相だ。殊に何時ぞや、東北を巡視して、八戸か何處かの演説會に臨み、苟くも國家の大臣が待合で賤妓と戯るなどは、風教の賊である、斯くの如き

大臣を頂くは國民の耻辱なりと、やつて退けたと云ふ事である。

例の七博士事件で、時の宰相桂公から宜しく之を鎮撫して呉れとの内命があつたのを、何條左る必要があらうと、斷然政府の干渉を刎ね付けた事があると云ふし、一昨年門司驛の一員が、先帝陛下の九州行幸に際し、職務上の過失を演じて自殺した時、山川の言なりとして、某新聞に載つた記事が端なく世の物議を招いた時も、彼れは其間に立ちて、毅然たりしと云ふが、事の善惡は暫く措き、流石に彼れの見識と氣力は違つたものだと思心する。何でも彼れは家に居ても、儼然として必ず袴を著け、一言一句、自然に武士の典型然として居る處、何う見ても、當世無比の君子人と云ふことが分る。而もこれ等の素質は全く母堂萱氏の賜物と云ふ。さもあらう、その阿兄に少將にして貴族院議員たりし山川浩氏があり、令姉に女流教育家の山川二葉及び山川操の兩氏があり、令妹に我が邦婦人界の魁洋行者、大山捨松夫人等あるのに徴しても知ることが出来る。今、彼れが再び來つて、東大總長の重職に就く。僕は中心欣喜の情に堪へないのだ。

(四)

京都大學總長澤柳政太郎氏は信州の人で、慥か二十一年の東大哲學科の卒業生だ。例の博士上田萬年とは同窓の一人で、其の文部省に入つてからも、大抵は一緒に進んで居た。然し一方は教授が本職な

ので、今でも、大學の教壇に立つ丈けであるが、一方は根が政治的色彩を帯べる丈けあつて、遂に京大總長にまで漕ぎ上げて終つた。澤柳と云ふ男は一寸見た處、別段コレがと思はれる様な人でもないが、それで居て、ナカ／＼の才物で、何時ぞや、第一次西園寺内閣の時文相牧野伸顯の下に次官であつた際などは、思ひ切つて切り廻した結果、随分評判の高まつたものだ。根が哲學出の文學士であるが、政治の事には明るしいし、それに辯舌も旨く、文章の才もあるもので、何時も問題の人物になるのだ。加之其思想の進歩的な處、一寸他に比類がなく、おまけに何處かに寛容の度胸があつて、多數の人を統御して行く術策を心得て居る。但し彼れの學校變動鎮靜に妙を得たのは、彼れが半生の經歷そのもの、齋す結果なのだ。即ち大學卒業後の澤柳は東本願寺中學、群馬縣中學、第一、第二高等中學、高等師範學校等の校長職を勤めて居るし、殊に群馬縣中學校及び第二高等學校では、紛擾後に赴任して大に成績の見るべきものがあつたのだ。

(五)

第二次桂内閣の當時、小松原文相の處置宜しきを得ずと云ふので、一ツ橋事件なるものが起つた時、校長松崎藏之助に代て、高商の善後策に成功し、坪野現校長をして泰山の安きに置かしめたる者は彼れである。從來兎角に秘藏主義の大學教育を開放して、自由にこれが聽講を許さんとしたるも亦彼れで

ある。今東北大學に於ける特別資格者の入學許容となり、延いて女子の聽講をすら許すに至つたのは、彼が總長時代に發芽した結果である。これ等の仕事は、何んでもない様だが、今までの官學者流には一寸出来ない處だらう。京都に赴任してからも、文博の谷本富氏や、理科の五六教授連を罷免して、何處までも澤柳の澤柳たる力量を示した。但し最近谷本教授の後釜を作らん爲めに、同じく東北の出身なる文學士藤井健治郎を早大より抜いて來たので、これに就ては随分世上の議論もある様だがその代り文部省から早大出身者を洋行させたのであるから、見様に依つては却て親切な遣方であつたかも知れぬ。

由來京都大學は創立の時から兎角に紛擾の絶え間がなく、何時も東京よりは難治であると思はれて居る。即ち故木下廣次博士や、男爵にして博士たる菊池大麓氏を以てすら、兎角圓滿には行き兼ねる場所なのだ。所で僕は澤柳氏が却て斯かる難治の衝に立ち、從來の精力を以て治蹟を擧げて貰ひたいと思ふ。

(六)

九州大學總長の眞野文二氏は、永らく文部省に在つて、中央の文政を按排して居つた人だ。その實業學務局長丈けでも十四年の永きに及んだと云ふから、彼れが如何にこの方面に多大の經驗を有するか

は、これだけ聞いても分る位だ。従て彼れはその間、五度の内閣と七人の文相に歴任して居る。彼れは静岡の人で、曾ては工部大學の官費生となり、その機械工學科を修めたのであつたが、單に日本のみでは充分でないであつて、三四年間、英國のグラスゴー大學に學び、歸來教授としてもナカ／＼有力の方であつた。彼れは技術側の學者で在つても、決して常識に缺けては居ない。従て實際の圓滿なる、一度文部の門を訪げれし人は誰れしも首肯する處である。今春山本内閣の行政整理で實業學務局が廢止さるゝこととなつた時、その局長たりし彼れが山川の後を襲うて九州大學に赴任したのは、文相奥田の働きであるとは云へ、彼れが能くその適材を認められて居つたからだ。良總長山川を失つた九大も、新に彼れを得て喜んだであらう。殊に醫、工の兩科を以て主目とし未だ法、文の設置を見ざる同大學では、眞野の如きサイエンスの人がわけても必要になつて來る。

(七)

東北大學總長北條時敬、この人は永らく地方に出て居て、ツイ中央に居たことがないから、殆ど世人に閉却されて居つた様だ。ソレが今春新に東北大學の學政を總ぶることとなつて以來、始めて生れてでも來た様に、四方からワイ／＼されるから可笑い。最も彼れは前記の如く大學を出てから、石川縣専門學校長、山口高等學校長、第四高等學校長を経て、最近廣島の高等師範に長たるまで、何時もか

う云ふ田舎廻り許り勤めて居たのだ。従て新總長連中では最も實際教育の經驗に長じ、行く處として名噴々たらざるはない。但し彼れは、只、實際教育家と云ふ許りでなく、今日の理學士中、數學にかけては殆ど天下一品の評さへある。數學家にして教育家たる者に、男菊池大麓、狩野亨吉の兩氏があつて、何れも理學博士の學位があるが、これに優るとも劣らない。彼れに學位號のないのは一寸物足らぬ感がする。然し今日迄の地方廻りでは、又止むを得ぬ處であらう。僕は近き將來、彼れが大學總長として、必ず學位を授與さるべき光榮あることを信じて居るものだ。

(八)

北條は金澤の人で、三宅雪嶺や故櫻井一久など、同郷だ。その廣島に居る時分から、一種の變り物、禪學家、そして人格の高い男として、今の東京高商の校長で、當時山口の高商に長たりし坪野平太郎と共に、關西教育界の二人物と注目されて居つたのだ。見玉へ、彼れの理性に長じ、沈著にして悠然たる、稀れに見るの紳士ではないか。蓋し彼の頭腦が極めて明晰なのは、數學の素養から來たのであらうし、沈著にして物事に騒がぬ所は、何うしても禪學の御蔭と認めざるを得ぬ。而も武士的修養があつて、未だ品格を崩した事がない。その日常家居の際でも、必ず袴を著用する處など、一寸山川に似て居る。これ等は彼れが個人としての特質であるが、然らば人を治め、子弟をなづける段は如何か

と云ふに、これも凡人の企及すべからざる腕前であるらしい。論より證據、彼れが東北大學に長たることが發表せられた時、廣島高師の生徒が、特に上京して、文相に面し、此の良校長を失ふの悲みを述べたと云ふが、師弟の間尙ほ斯る情誼が存在して居るかと思へば、嬉しくもあり、又尊敬したくもある。要するに、彼れが高師の長より一躍、大學總長となるは、單に文相與田の舊知己なりと云ふに止まらず、尙ほ能く彼れの人物を洞察したる結果ではあるまいか。由來東北には、札幌農學校と云ふ立派な一城廓が在つて、宛然一個の大學を形成して居るのだ。今彼れが根據、仙臺に在つて、この城砦をも支配するのであるから、並大抵の事ではなからうが、然し彼れに向ては案外、易々たる事かも知れぬ。

(九)

元來、大學總長は、各分科大學を主宰し、外に向つては、文政の府たる文部大臣の指揮監督を受くると共に、内は大學の事務、教務一切を總攬する役であるから、一寸有力なる學者でなければ勤まらぬ様にも見える。殊に各教授會とか、評議員會とか云ふ場合に、これが議長となつて、各分科大學の要求を按排し、或は甲是乙非を定むるに就ても、出來得べくんば、立派な學問を要するに相違ない。彼等多數の教授連中には、随分自分一人と極め込んで居る學者もあらう。これ等を統率する總長が、單

に學問上でも、一教授に負くる様な事があつては、その威嚴の上から見ても面白くないと云ふ人もある。これも一理だ。然し今日の如く各種の學科が、細かい専門に分別して來る時勢では、一人の頭腦で何もかも了解して行くことは、神ならぬ人間である以上は、不可能の事は解り切つて居る。茲に於てか、僕は學問そのものは第二流の者でも、苟くも人格の向上せる、立派な人物でさへあれば澤山だと思ふ。この點に於て、今の四大總長は何れも、其人を得て居るのだ。これ少くも與田文相が人材の配置、その宜しきを得たる結果である。後ればせ乍らも頌徳の辭を述べて置く。

私立大學の中心人物

鎌田榮吉—青木徹二—堀江歸一—氣賀勸重—神戸寅次郎—高田早苗—坪内雄藏
天野爲之—田中稔積—鹽澤貞昌—浮田和民—奥田義人—木下友三郎

(一)

▼奥田文相の臺閣に列してより私學の待遇問題は世人の口の上れり、これ彼れが自ら私學に關係深き人なるのみにはあらず、別に理由として學ぐべきものあれば也。

▼其費用多くして私人の經營に便ならざる理工農醫の如きは止むなく國家自身の事業となし、法文政商の如く比較的多額の費用を要せざる學科にありては、これを民間の施設に待つも敢て差支なしと認むるもの、これ現文相の胸中にはあらざるべきか。

▼彼れは常に一個の教育眼を有す、即ち國民の教育は國家の事業なるも只一に政府のみの占有にはあらず、公共團體、若くは一人のこれを經營するは敢て不可ならずとするに在り。

▼夫れは兎も角も彼れは就任勿々教育調査機關を設け、或はその祕書官として私學出身の鮫島氏を採用せるが如き、適々これが證左たらずとせず。殊に世上の流言にして眞ならしめば、當時の地方

長官大更迭に際し、中央大學出身者のこれが選に當れる者無慮五名を算するに至る、主として彼れが畫策に出づと云ふ。

▼この點に於て私學は幾分不利益の位置に立てり然れども凡そ教育の眞眼目は決して或種の職業を得んとする爲めのみにはあらざるべし、即ち一個善良なる國民として社會に立つの素質を授け、以て國家の文運を隆盛ならしむるを得ば足れり。

▼私學勃興の時は至りぬ、江藤哲藏氏の遞信參事官となれる、高橋光威氏の内務に勅參たる偶々これが瑞兆を齎せるに似たり。

▼余は斯く觀じ來りて世の識者が十分なる同情を私學に捧げ將來の發達を期待せしめ度しと思ふ、彼の米國に於けるエール、ハーバードの如何に巨大なるかを思はゞ誠に汗顔の至りに堪へず。

▼然れどもこれを今日に見る私學必ずしも官學に優れりとは云はず、修學年限の多少は暫く措くもその設備の如何に至りては多く言を用ふる能はざるを悲む。

▼果して然らば私學には系統に於て、設備に於て、特權に於て、官學のそれに及ばずとするもしかも私學獨特の妙所はある也。

▼されば完成せる設備に依り劃一主義の教育を受けんとする者は、勢ひ官學の領域に走る、今日の我が國に於ては比較的多數の青年がその方面に志す所以のもの亦茲に存す。

▼これ即ち私學の根本精神にして寸時と雖も離るべからざる特質となす、所謂中心人物の存在にあり、これなくては私學の運命覺束なく、これありて始めて茲に活躍せる教育團の一體を産出す。

▼況や官學出身者は其業を終へて、各種の職業に従事するに當り多くの特權と利便とを有するをや

私立大學の中心人物

▼慶應義塾に於ける故福澤諭吉、同志社に於ける故新島襄並に早稲田大學の老伯大隈重信の如きは、何れもその大なるものなり。

▼然れども單にこれ等僅少の人を以て能く今日の隆盛を致したりとは見る可からず。そこには多くの第二次中心人物あり、第三次の感化教育者もある也。

▼時に創立者其人にあることあり、學校經營者に存することあり、若くはこれが後援者に現はれ又卒業せる校友の間にすら生ず、吾人の茲に述べんとするは主として各種の方面に於ける私立大學の中心的人物を指稱す。

(二)

▼私學必しも少なからず、しかもこの間に傑出して能く官學と其覇を争ふもの誠に曉天の星に似

たり、余は慶應義塾と早稲田大學を以てこれが双壁となせど、未だエール、ハーバードの壯觀を現出せるにはあらず。

▼只慶應義塾は我邦最古の私學として聊か他の諸大學と其趣きを異にせるあり、これ決してその年代の古き爲めのみにあらず、創立者に其人を得たるも、義塾の方針が當時の我が社會に適合せるの結果に出づ。試みに史を緝いて維新の古へに遡れば吾人をして義塾今日の隆盛を首肯せしむるものあるを覺ゆ。

▼明治の初年我が邦教育界に特殊の光彩を放てるもの官にありては札幌農學校と開成學校の二校あり。私にありては京都同志社と慶應義塾の兩校なり。しかも前二者は技術工藝にあらざれば農業教育を主とし、後者の一は「キリスト」教の傳播を目的とせる宗教學校なるが故に世の青年にして志

を政治經濟の方面に立たんと欲せば勢ひ福澤先生の幕下に參じ義塾の學門を出入せざるべからざりし也。

▼福澤先生の世に稀なる教育者にして、しかも義塾の中心人物たりしは世上に隠れもなき事也、殊に彼れが平民主義を尊び將來の日本は算盤珠にあらざれば立ち行かざる可きを見越したる所流石に論吉翁の眞面目は躍如として史上に見ゆ。

▼爾來茲に五十餘年翁の主張は遺憾なく發揮せられぬ。今日我が邦の實業界を論ずる者必ずその筆端を義塾出身者の月旦に起さざるなし。實に彼等は一の慶應閥を造りて實業界の大半を支配し、後れて突進し來れる帝大、高商の官學連を後へに墮若せしむ。

▼況んや先生の教育は最新歐米の文明を輸入し主としてこれを我が國民情の實際に融和せしめたる

ものなりしが故に、當時西洋文明の知識を欲求して止まざりし國民の多數は、官私上下の別なく喜んでこの新教育ある青年の備聘に務めたりき。

▼昨は四疊半の破窓に呻吟せる一措大漢が今は世に時めく宰相の印綬を帯び夕には一單の食を求めし可憐なる青年も晨に綺羅を飾れる富豪の邸に列す。

▼斯かるは以て慶大の隆運を來せる事由とも云ふ可く、元を質せば創立者其人の功績に歸著すべし福澤翁の遺勳も亦大なる哉。

▼翁死してよりこれが遺鉢を傳ふ可き大人物なきは物足らざれど、翁の後を繼承して塾長の椅子に就ける者の概して人物揃ひなるは義塾の爲め慶賀す可き現象なる可し。

▼小幡篤次郎、門野幾之進、鎌田榮吉など歴代の首腦者は能く協力して翁の遺策を實行し以て同塾

人物研究

の今日を致したる也。

▼鎌田は紀州和歌山の産、その教育事業にたづさはりしは随分古き事也、即ち郷里自修学校の長たりしに始まり次では義塾の教師となり大分縣中學校の長となり若くは同地師範學校を宰して數年に及ぶ、彼れが慶大の首領として能く今日の治績を擧げ得たるもの實にこれ等の經歷に基く。

▼彼れ一度は馬を日比谷の原頭に進めて代議政體の實際を見たることもありき、若くは侯徳川(舊藩主頼倫)に隨ひて歐米に遊び具さに彼地の教育制度を研究し得たりと稱せらる。最近再び世界を漫遊す、齋す所のもの果して如何。

▼鎌田は今塾長の外に教育制度調査會議員並に貴族院議員を兼ね、これ彼れが爲めには極めて都合善き事なるべし、何となれば義塾今日の制度は一種の財團に依りてこれを維持しその理事なる者

は相集つて一個の協議會を作る、福澤捨次郎、池田成彬、門野幾之進、伊藤欽亮の如き即ちこれ也。

▼而して塾一切の事項は擧げてこれを協議會に持出しその協賛を待ちて始めて實行せらる、かるが故に塾長其人の意見如何に善美を盡すも協議會にして否決し去らば亦如何ともすべき様なし。

▼鎌田が塾長として別段の功績を唱へられざるもの主として此點にあり、これ早大の高田博士と異なる所也。

▼要するに鎌田は何處迄も義塾を堅守すれば即ち足る、この點に於て彼れを塾長に得たる慶大は最も幸福也、今日塾頭福澤一太郎氏を援けてあらゆる方面にその人物を紹介し置けば別に六ツヶ敷事はなし、學校の維持費など三田位富裕なるはな

く萬一足らざることあるも移檄一番忽ちにして巨萬の財は集まるべき也。

(三)

▼慶應義塾は其教授を養成するに多大の努力を用ゐ、能ふ丈け自校出身者を教壇に立たしむ、故に今日三田出身の學者とし云へば悉く慶大の教授に限られ、それ以外には一名もなしと云ひ得ざるに非ず、而も義塾教授の中に在つて最も其名聲を高くせる者これを青木、堀江の兩人に見る。

▼法博青木徹二氏は商法の大家にして慶大出身者中唯一の大學者なり、曩に彼れがものしたる商法論は初學者にも適す可く専門攻究者にも喜ばる、これに依りてこれを見れば彼れは一個の學究に過ぎざるが如きもしかも其意志堅固にして權勢に諛ひざる近時稀れに見るの快男兒とす、憲政擁護の聲盛なるの時に當り各所の演壇に彼れが名を散見し若くは新聞紙上塾長鎌田と衝突多きを傳ふる

もの一として彼れが稜骨の結果にあらざらんや。

▼法博堀江歸一は財政論を以て聞ゆ、殊にダンパ一の銀行論は軌近譯述界の壓巻として稱せらる、所也。彼は學に忠なる青木に劣らずと雖もその政治界に乗り出して自己の抱負を發表せんとはなせず、この點に於て早大の法博鹽澤に類せるものなくんばあらず。

▼慶大學界の代表者としてこれが中心人物たるは僅かに以上二人に止まる、その他、經濟學の堀切善兵衛、外交史の林毅陸、經濟政策の氣賀勘重、民法の神戸寅次郎等ありと雖も未だ學界のオーソリチーを以て目す可き程にはあらず。

▼政治舞臺の大立物は犬養、尾崎の兩人にしてこの二人者は義塾在學の當時より殆ど骨肉の交りを経て互ひに牛鍋の味を試みたること當時の逸話として今に香ばしき也。

私立大學の中心人物

人物研究

▼其後政變の移動は時に相反する位置にありて思はず政敵の嘆を深うせしめしと雖も今や再び舊に歸りて木悞兩堂の政見忽ちに一致し、一は國民黨を率ゐて天下に號令し他は政友俱樂部を提げて憲政の擁護を説く、盛なりと謂ふ可し。

▼慶應は政界の大立物としてこれ等兩雄を産す、從て第二第三の亞流なかるべからず政友俱樂部の竹越與三郎、林毅陸、同志會の箕浦勝人、加藤政之助、政友會の高橋光威、井上角五郎等其名現はる、殊に最近林のメッキリ人物を上げたると高橋の内務省勅参たりしとは注目す可きことなり。

▼操狐界に於ける慶大の地位は假令其數に於て早大に劣れりとするもその實力に至つては今尙ほ斯界の羈者たるに耻ぢず、然れども彼れが過去に産出せる『時事』の渡邊治、高橋義雄『報知』の藤田茂吉、矢野文雄等の如き到底これを今日に求む

可からず。

▼若し強てこれを探らば『時事』の主筆石河幹明『中外商業』の社長野崎廣太、『日本』の社長伊藤欽亮『大阪毎日』の社長本山彦一、『英文通信』の主幹望月小太郎等ありと雖も眞に筆を提げて堂々論壇の雄を争ふもの僅かに石河あるに過ぎざる也

▼然れども一度巻を重ねて實業方面を窺はんか、その綺羅星の如くに輝ける壯漢は容易に他の模倣する能はざる所也、銀行界には三井銀行に専務池田成彬あり、監査役に小野友次郎あり、営業部長に門野鍊八郎あり、三菱銀行部には莊田平五郎、豊川良平ありしも今は退隱して風月を友とす。

▼日本銀行は曾て山本達雄、伊藤欽亮の諸氏ありし時代に比し幾分其片影を薄めしが如きも今尙ほ理事木村清四郎、監事飯島武之助、國庫局長生田定久の諸豪あり横濱正金には東京支店長松尾

吉士、帝國商業には頭取岩井重太郎、十五銀行には、重役兼支配人成瀬正恭、豊國銀行には専務坂田實、重役岡本貞休あり北濱銀行に専務小塚正一郎あり。

▼保険業には千代田生命の社長門野幾之進、明治生命の社長阿部泰藏、共同火災の社長村上定、日本生命の社長片岡直温あり。

▼若し夫れ紡績業に至つてはその兩雄たる鐘ヶ淵に専務武藤山治、富士瓦斯に専務和田豊治ありて我邦紡績界の大勢を支配し、その生産界の責務を雙肩に荷ひつゝあるは喜ぶ可し。

▼製糖業にも亦その人なきに非ず、明治製糖の社長小川鉦吉、大日本製糖の社長藤山雷太等何れも三田學系の人ならざるはなし。

▼貿易事業の主腦たる大倉組を窺へば副頭取高島小金治、専務門野重九郎あり、森村組には副社長森村

私立大學の中心人物

開作、總支配人村井保固あり三井物産に磯村豐太郎氏ありしも今は炭礦汽船に専務たり。然れども由來慶大出身者中には自ら進んで貿易業者となりたる者少なからず野澤組の野澤源次郎、米井組の米井源次郎氏等は即ちこれ。

▼この外舉げれば幾らもある可し、古河鑛業の古河虎之助、三越の専務日比翁助、東洋印刷の手塚猛昌、秋田木材の井坂直幹等死かも雨後の筈にも似たり、要するに今後各種の學校卒業生潮の如く輩出して實業方面に走る可きありとするも慶應の地盤は容易に他軍の侵略を許さざるべし、即ち理財社會に於ける彼等の地位は先づ永久に安泰なり。

(四)

『都の西北早稲田の森に……』と聲高々に唱ひな

から幾千幾萬の健兒が紅燈片手に帝都の街頭を照したるはツヒ數旬の以前なりき、當時余はこの光景を眺めて早稻田學苑の盛なるに一驚せり。

▼若し既往に於ける同大學の地位が社會上別段の重きを爲さずとするも將來に於ける活躍殆ど測り知るべからざるに似たり、即ち從來その勢力範圍として算せられたる新聞界文學界は云はずもがな、政治方面に於ても慥かに有力なる活路を見出しつゝあるに似たり、下院に百名の選良を網羅する必ずしも難事にはあらざるべし。

▼殊に商科の開設以來實業界に向つてその突進する様の勇ましさ、今こそ三田、一ツ橋、赤門の徒に三舍を避くる勿論なりと雖も、コ、十年二十年の歲月を積まば或は天下を四分するの盛況を呈す可きか。

▼若し夫れ理工科の設備に至つては官學に比して

幾分の遜色あるは免かるべからずとするも一個私學の經營としては殆ど破天荒の觀なきにあらざ、曩頃三十年祝典の催さるゝに際し天下萬衆の前にこれが實際を展開してその運用の如何を示せり、吾人は早大が將來この方面に於ても一旗色を翻すに至る可きを思ふ。

▼早大の創立者大隈伯は政治界に於て少なくとも失敗の人たるが如し、然れども彼れが教育方面の成功は慥かに前者の損失を填補す彼れは期待したる政界に志を得ず却つて期待せざりし學界にその功を納じ、人事の豫測し難き大略この類のみ。

▼一度官民の間に誤解せられたる東京專門學校は創立二十年祭に於ける公伊藤博文の情誼ある告白に依つて初めて青天白日の思ひを爲せり爾來年毎に膨脹して遂に現時の大を致しぬ、これ元より社會の同情に依ると雖も亦伯の熱心努力にして其處を

得ずんば幾ぞ今日あるを得ん。

▼現今公職を帯びざる彼れは日々大學に臨みて親しく一萬の子弟に會し事あれば出で、自己の經綸を談ず、英雄の風貌を目前に胸めて豪傑の言辭を直接に聞く、多數青年の腦裡尙ほ能く彼れが感化を免るべけんや。

▼伯は慥かに現代有數の偉大なる人物也、彼れの言論は時に大風呂敷の譎りなきにあらざとするもしかも能く宇内の形勢を洞觀し兎角に小心翼翼たる我が國民の清涼劑となすに足るべくその一言一句は極めて重大なる通信となりて海外に打電せらる。

▼若し夫れ彼れが精力の絶倫にして如何に博識多才の老翁たるや一度その邸門を訪れたる者の等しく驚嘆する所也、百二十五歳説を把持する伯は近き將來に於て醫科大學を早稻田の學苑に設け完

全せる私立綜合大學の範を示すべしと傳ふ。その五十年祭の壯觀今より豫想さるべきなり。

(五)

▼然れども早大は決して一大隈伯の専有にはあらざ、從て如何に、自身の偉大なる人物を以てしても彼れ一人の力尙ほ能く今日の隆運を爲さしむべけんや、即ち其處にはこれが主腦たり中樞たるべき人材の存在を要す、この點に於て學長高田博士は最もその選に當るべき資格あるべし。

▼高田は埼玉の人明治十五年を以て東大を出づ、當時新文明の吸入者は如何なる方面にも歡迎せられ未だ乳臭を脱せざる若年の士と雖も直ちに社會有數の位置に拔擢せらる、殊にこの現象は官界に於て然るを覺えぬ、故に若し彼れにして當時仕官の望みだにあらば今日必ずしも臺閣の一員たる望

みなきには非ず。
 ▼然れども彼れは早くより小野梓氏の民権論を崇び主として身を社會教育の上に注がんと誓へり、後或は外務省通商局長となり或は文部省勅參の地位を占めしと雖も仕官は彼れが希望に非ず、伯の野に下るに及び共に官を辭して再び私學經營の事に従ふ。

▼彼れには早大經營の外一厘の野心なく一毛の慾望もなし、されば暫らく中外の望みを享受したる日比谷の原頭をも離れて意を學園に専らにす、これ早大の爲め最も幸福なると同時に彼れが處世上極めて伶俐の人たるを證するもの也。

▼高田は法博にして教育調査會委員を兼ね、しかも彼れは學者と云はんより寧ろ實際家たり事務家たるの素質を有す、故に彼れの抱負にして實現せられたるものは多く實際の理に適合し能く他の範

たるに足る、例へば中學卒業後四箇年半の課程制度は他の各私立大學に採用せられ彼れが従來用ゐられる専門學校なる名稱は今日官學の大部分に冠せらる。
 ▼殊に彼れの濃厚なる風貌と同情に富める薰陶振りは大に世の好評を博して殆ど人氣の焦點となれるの觀あり、早大發展の一因又茲にあらざるべきか。

(六)

▼高田博士と共に早大の中心人物として吾人の擧げざるべからざるもの二あり、一を法博天野爲之となし他を文博坪内雄藏と爲す、前者は經濟學界の泰斗として尊まれ後者は文藝方面のオーソリチーとして敬まはる。

▼三十年一日の如く淳々として携ます倦ます「ミ



川せいの秋 森田恒友氏作

ルの學說を敷衍し殆んどカニキ處に手の届く思ひあらしむる者は天野なり、一度文藝協會に手を焼きてスナリと劇壇を捨てたりと雖も昔取つたる杵柄とやら、行く處として可ならざるなきものこれ逍遙坪内先生にあらずや。

▼早稻田が比較的有力なる經濟方面の記者を出したるは主として博士天野の功績とす可し、赤門と共に文壇を二分して所謂早稻田派の根柢を作りし者は何と云つても博士坪内の賜物なり、前者よりは博士彌澤を出し後者よりは抱月島村を産す。

▼今年三十年祭の祝典を舉行するに當り、高田、天野、坪内の三氏が揃ひも揃つて式場の花となりしは嬉しかりき、彼れ等は早大創立の三博士として今に手を携へ合へるこそ目出度けれ。

▼慶應に青木、堀江の兩博士あるが如く早大にも田中穂積、鹽澤昌貞の二博士を有す、田中は信州

の産、財政學に通じその農村問題の如き近時の偉觀と稱せらる、彼れは學究の人にあらず、故に書齋にありて著はるよりも、壇上の花形たる可き素質有る也。その清秀なる風彩と抑揚自在なる雄辯とは彼れに取りて何よりの武器たらんか。

▼博士彌澤は水戸の人、經濟學界の一巨星として其名高し、然れども彼れの長所は決して講壇の上にあらず、寧ろ萬卷の書を誦して徐ろに自己の意見を陳ず、この點に於て彼れは方今得易からざる鴻儒たり。

▼法博浮田和民は同志社出身の一偉材にして久しく早大の爲めに其學を講ず、瘠身にして低聲なる初見者をして眞にこれが博士なるやを疑はしむる程なり、然れども諄々として歴史を講じ政治を論じ倫理道德を述ぶるに當つては聽く者をして自ら膝の進むを覺えざらしむ、彼れも早大に於ける有

数の教授たるかな。

▼この他交通論の伊藤重次郎、銀行及貨幣論の服部文四郎支那語學の青柳篤恒、殖民政策の永井柳太郎等あり昨年獨逸に留學を命ぜられたる寺尾元彦は新進の秀才にして最近藤井氏の代りに文部省より派遣せられたる杉森孝次郎は帝大にも得易からざる哲學界の學才と聞く。

▼文學に島村抱月、倫理哲學に金子馬治、教育史論に中島半次郎ありこれ等は何れも早大文科の花形と云ふ可し、若し夫れ帝大高商の出にして早大の爲めに講ずるもの哲學に文博波多野精一あり、英文學に内ヶ崎作三郎あり殊に現今支那政府の招聘に應ぜる博士有賀長雄に至つては殆ど早稻田に歸化せる有数の鴻學たらざるばあらず。

(七)

早大の中心人物

▼稻門の年齒僅かに三十餘年、殊にこの間は各種の學校並び起れるの際なるが故にその出身者が如何なる方面にも第一流者を以て數ふべからざるは止むなき事也、政治界と云はず實業界と云はず官界と云はず何れにしても眞にこれが中心と認む可きものなし。

▼但し將來に於てとならば随分列舉せられざるものあらず、試みにこれを議會の選良に見るに二、三有望の士あるは喜ぶべし、國民黨の西村丹治郎、關和知、柏原文太郎、増田義一、亦樂會の早速整爾、田川大吉郎、政友會の江藤哲藏等は即ちこれ就中早速は院内の財政通を以て聞え、田川は東京の爲政者として其名高く江藤は最近通信省の勅參となりて世に著はる。

▼官界は私學の爲めに好舞臺にあらず、偶々中央明治の諸大學より知事若くは局長の出でざるに

人 物 評 究

非ずと雖もこれ全く異数の事のみ殊に早大に至つてはその頭数の少なき驚くに堪へたり、即ち帝大教授としての法博山田三郎、文博内田銀藏の兩氏小樽高商の渡邊龍聖、朝鮮總督府の道長官川上常郎氏外務書記官の植原正直等に過ぎず、曩に坂本三郎氏行政裁判所に勅任評定官たるあり西村陸奥夫氏佐賀縣知事たりしと雖も前者は今退官となりて野に下り後者は明暗その處を異にす、但し最近江藤の勅参たりしは聊か私學の爲めに氣を吐くに足る。

▼新聞記者は早大の誇りとなせと未だ第一流の人物を出せるにはあらず、この間にありて稍々頭角を現はせるもの東朝の經濟部長松山忠二郎氏と報知の主事上島長久氏のみ、他に川島清治郎、中野正剛等なきにあらずと雖も未だ地平線に出でたるものにあらず。

▼辯護士に高根義人、上原鹿造等あり、司法官に三田幸司、小林登志吉等ありと雖もこれ亦何れも中心的人物と云ふ程にはあらずこの點に於て明大の今村恭太郎、中大の花井卓藏、大場茂馬の兩氏は比較的名の爲せる人々也。

▼去つて實業界の現状を見るに寧ろ寂寞の感ある者也、山田英太郎、上遠野富之助、渡邊亨等その優者として儕輩の推す所となれるもこれよりの早大出身には所謂第二流實業家の簇出を見ん、浦邊襄夫、鈴木寅彦、昆田文次郎、増田義一、村井五郎、大谷順作の諸氏即ちこれ也。

▼これに依りてこれを見るに單に實業方面の先輩よりして到底慶大の雄に及ばずと雖もその出遊軍の多大なる點に於ては容易に他校の企及すべき所にあらず、故に將來幾千の實業従事者と共に理工科出身の人々をも参加せしめばその前途は殆ど豫

測し得べからざるに似たり。

▼最後に余は早大が慶大に比して頗る遺憾とす可き一事あるを認む、これ決して實業軍の優劣にはあらず即ち寸言を以て之れを掩へば一人の大臣をも出さざる事也、試に慶大出身にして今日迄に臺閣の椅子に凭れる者を擧ぐれば尾崎、犬養の兩氏は勿論文部に小松原、久保田の二氏あり司法に岡部長職子あり、大藏並に農商務に山本達雄氏ありこれ云ふ迄もなく一私學としてはナカ／＼の壯觀にして、この點より云へば早大の前途は頗る遼遠なり。

(八)

▼余は既に早慶兩大學に就き一種の評論を試みたり、爾餘の大學に付ても多く言はんとするものなきに非ず、然れども最早紙數の既にく／＼盡きたる

私立大學の中心人物

を如何せん、只吾人の擷筆するに當り是非共加へ置きたきは中央、明治の兩大學とす。

▼中央大學は其名稱の屢々變更されたるにも似ず頗るデミなる學校也、殊に其收容生徒數の少なきは驚く程なれどもこれが卒業生の堅實にして所謂屑物無きは同大學の譽れとす、試みにこれを既往に見るもその輩出する人物の雄大にして毫も官學に遜色なき世上稀に見る處也。

▼而してこれが中心人物は云ふ迄もなく故人菊池武夫なりき、同氏世を去りて後現文相奥田義人氏の獻身的經營あり、輔くるに博士岡野敬次郎氏の援助を以てす、奥田氏の文相となるに及び、岡村輝彦氏之に代り、經營最も努む、將來の發展期し待つべき也。

▼由來同大學は官界及び辯護士界に重きを加へたりき前者に司法省參事官法博大場茂馬、鐵道院理

事森本邦治郎、秋田縣知事田中武雄、群馬縣知事大芝惣吉、高知縣知事永井金次郎、滋賀縣知事佐柳藤太、茨城縣知事岡田宇之助、大審院判事林頼三郎、ホノル、總領事永瀧久吉氏等あり後者に法博花井卓藏、卜部喜太郎、羽田彦四郎、横田千之助の諸氏あるを見る。

▼澁川玄耳、杉村楚人冠、長谷川如是閑、茅原華山等は操觚界の珍とす可く久米良作、中山佐市、田邊熊一、田中文藏氏等は中央大學を代表せる實業界の遊星たり。

▼これに對する明治大學は如何、その規模の宏大にして輪奐の美を極め、諸事概ね派手やかにして何れも積極的なるは早稻田、慶應のそれに比す可く現今私學の三傑とし云へば多くはこれ等の三傑を指稱するものと知る可し。

▼時々祝融の襲ふ所となり幾分學業上に妨ぐる所ありしに相違なきも、しかも躍如として日増に肥え太り行くは本大學の現況なり、これ主として故人岸本辰雄博士の拮据經營其宜しきを得たる結果に依る。彼れ今やなしと雖も、其後を繼げる者に木下友三郎あり、永らく官界にありて令名殊の外高く、一大私學の主腦として適任なりと噂せらる。

▼學監法博鶴澤總明も亦最近得易からざる學才と云ふ可くその政治的方面に於ても徐々堅固なる地盤と勢力を扶殖しつゝあるが如し、彼れが明大の學監たると同時に附屬中學の長たる、共に良師を得たるの悦びを禁ずる克はざる也。

▼明大は過去に於て多くの司法官を出せり、彼の日糖事件に若くは男三郎事件に令名ありし判事今村恭太郎は實に同大學の出身に係る、若し夫れ地方裁判所長若くは檢事正の類をも掲げんか、到底

數紙の能ふ所にあらざるべし、彼の駿河臺上に立てる紀念講堂が多く司法官の校友に依りて建立せられたるを見るに及び殊にこの感を深うする也。

▼さればとて同大學の出身には辯護士若くは行政官にその人なしと斷すべからず、町井鐵之助、小出五郎、長谷川吉次、井本常治等は前者を代表し長野縣知事依田銈次郎、衆議員書記官寺田榮、農商務書記官宿利英治等は少數ながらも後者の傑才として世に喧傳せらる。

▼只茲に同大學の一特色として擧げ度きは自治團體の組成に必ず其出身者を有する事也、一町一村落到に於ても乃至は市區の大なるに及んでも何時も自治體の一部に明大卒業者を有するは一奇なり、現に手近なる東京市はこの關係を明かにして餘蘊なし、見よ市會議長に江間俊一氏あり議員に安藤兼吉、溝淵正氣、山口憲、長谷川吉次の諸氏あり

私立大學の中心人物

何れも常磐會又は清話會の幹部と目され常に重要な職務に參與す、宛かも東京の市會は明大の舞臺とも見ゆ。

▼以上に於て四大私學の梗概を叙述しこれが中心人物の如何を示せり。これに依りてこれを見れば吾人は次の如く云ふことを得即ち慶應は理財の方面に活躍して實業界を支配し早稻田は新聞及び文學の方面に其勢力を伸張す、中央は辯護士と官界にはびこり明治は司法官と自治團體に優位を占むと。

杏林の逸材

青山胤通と三浦謹之助―緒方正規と佐藤三吉―北里柴三郎と金杉英五郎―佐々木政吉と高田研安―小此木信六郎と岡田和一郎―瀧田玄達と榊原次郎―佐多愛彦と緒方正規―土肥慶藏と山極勝三郎―其他官界及民間の逸材

青山胤通と三浦謹之助

▼刀圭界由来其の人跡からず、而も青山、三浦の名は、當分兒童走卒の間にも喧傳せられ、其の高名なることに於て、何人も其の右に出づることなし、偉しと謂はざるべからず。
▼醫は昔より仁術也、而して又人氣商賣也、其の名の聞ゆると聞えざるとは、即ち又ポケットの冷暖に影響す、諺に曰く貧すれば鈍すと、彼等の

汲々として名を賣るに努むる亦由ある哉。

▼博士青山は必ずしも賣名の徒にあらず、其の人格、醫師としてよりは政治家たるに適し、倨傲尊大、容易に他に下らざるも、亦權勢の前に叩頭して竊に阿堵物を懐中する位の餘裕はあり。醫家としての技術優秀なるにあらず。學深遠の域に入りといふにあらずして、而も其の帝大にある、宛然帝王の如きの威を示すもの、唯だ其の人格の、普通凡々のお醫者風情と異なり、何處となく傑出したるが如き風あるが爲のみ。

▼嘗て大學の手術室に在りて、尿毒症治療に使用したるコップにて水を飲み、學生を驚かしたるものは、博士青山也。曰く、筋脈を断たずんば善工と爲る能はず、糞尿を拘せずんば善農と爲る能はず、何ぞ是れ式の事に怖れて天下の大醫たるべけんやと。即ち此の藝當あり、而して此の放言あり蓋し博士青山の偉なる所以。

力有するに比し、此れは眞成の醫博士として、學生間に多大の人望を博するもの、自ら其の據る所なくんばあらず。

▼博士三浦は謹直の人、其の名の謹之助たるに背かず。先帝大故の事ありて以來、人の青山といへば直に三浦を聯想し、毎に兩者を併せ呼稱すと雖も、其の人物に至つては、全く相反せる性格を有す。

▼博士三浦は、蓋し醫師たるべく生れたるの人手其の人格、温乎として玉の如く、風貌亦貴公子の態なきにあらず、學問の獨立を重んじ、學者の權威を尙び、權門に拜跪して操守を二三にするを屑しとせず。其の學に望むや忠實、其の患者に接するや懇篤、帝大此の人ありて稍人意を強うするに足るといふもの、必ずしも過褒にあらざらん歟。但だ近來多少調子に乗り過ぎたる形あり、動もすれば惡言の聞ゆるなしとせず、三浦たるもの夫れ自重すべき也。

▼博士青山が、外豪放を裝うて其の實案外に小心なるは、博士三浦が、小心翼々たるが如くにして其の實膽大なると、恰好のコントラストを爲す。彼れが政治家的醫師として帝大教授間に不拔の勢

緒方正規と佐藤三吉

▼帝大教授となつて約三十年、斯界の元老として勢力あり人望あるものに、博士緒方正規あり、佐藤三吉あり、共に二十五年勳績祝賀會を開かる、亦學界の慶事也。

▼博士緒方は、我が日本に於ける衛生學の泰斗にして、亦御先祖也、頭腦必ずしも卓越せるにあらずと雖も、勤勉人に超え、才能優れたるにあらずと雖も、學に忠實なるは、蓋し博士の今日ある所以也。多年一日の如く、コツ／＼として赤門突當りの教室に器械と水と微菌とを相手にし、枯淡蕭條の生活に甘んじて聞達を人に求めざる所、蓋し博士の博士たる所以乎。唯だ其の專攻する所の衛生學は、今や既に學界に重きを爲すに足らず。

特むの厚くして、而も患者に對する用意の懇切なる、未だ博士の如きを見ず。蓋し内科に於ける博士三浦と相似て、更に其の上に出づるもの也。

▼少時東京開成學校に於て鑛山學を修め、轉じて大學東校に醫學を修む、其の深玄の學と、卓越の技術とは、相待つて夙に斯界の權威たりき。過般祝賀會の擧あるに當つて謂つて曰く、予や近年漸く老齡に入る、而も亦何ぞ大に返り咲の勇なからんやと、博士たる者夫れ自愛加餐せよ。

北里柴三郎と 金杉英五郎

▼外科の博士佐藤三吉は我が刀圭界の珍乎。何ぞ啻り帝大醫科の至寶のみと謂はんや。其の人恪謹にして學實、細心にして周到、其の自己の手腕を

▼醫界に高名なるものを屈すれば、青山、三浦と雖も一籌を輸するもの夫れ博士北里乎。然り北里の高名なるは日本的にあらすして世界的也。局部的にあらすして一般的也。今や傳染病研究所長

として、私立養生園長として將た非大學派の頭領として、隱然たる勢力を扶植するもの、蓋し此の高名の然らしむる所にあらすや。

▼然れども翻つて其の眞價を検すれば、名の實と相副はざるもの、未だ博士の如きは稀也。日本唯一のゴッポの高弟として、過つて細菌學の大學となりて以來、流石に其の名聲を維持するに腐心して、研鑽大に努めざるにあらざりしと雖も、元來其の能とする所は、學者的研究にあらずして社交的手腕也。横文字の醫書よりは相場附録を好み顯微鏡よりは貯金帳を大事にす。非大學派の名徒らに仰々しくして、其の實一箇のコケ脅しに過ぎざるもの、畢竟亦此の資質の由る所のみ。

▼其の人を見れば洒然落然たるが如くにして、而も狹量小膽、一擲千金を吞まざるの慨ありて、其の實車吝貨殖に餘念なきものは博士也。而も此の

人格の缺點は、必ずしも醫家としての博士の價値を累するものにあらず。憂ふる所は其の學者としての素養の、聊か名聲と相副はざるものあること是れのみ。

▼虛名ありて實力の副はざるに於て、博士北里と相似たるものに博士金杉英五郎あり。更に其の社交的手腕の巧みなるに於て、二者亦甚だ相似たるものなきにあらず。前者の肺結核に於けるは、後者の耳鼻咽喉科に於けるよりも、造詣の觀るべきものあるが如しと雖も、其の實際的の腕の往々數醫の範圍を脱せざるは、兩者共に未だ甚だしく軒輊する所を見ず。

▼異なる所は、前者が飽くまで醫家の態度を失はざるに比し、後者の徹頭徹尾政治家的にして、兼ねて劑間的なるに在り。豪放華麗、好んで客を引見し、談論風發、常に天下國家の事を論ず、其の

能く今日あるを致せしもの、知己を權門に求めて利達に怠らざりし結果のみ。

▼然れども博士を以て尋常一様の醫家と爲す、固より非難の免れざるものあらん。唯だ彼れは、醫を業とする政治家也。辯護士を業とし、新聞記者を業とし、農工商を業とする政治家あるが如く、博士の本領は、之を醫家として見ず、寧ろ醫を業とする政治家として見るに於て、初めて遺憾なきを得ん歟。その未だ大に本領を發揮せざるは、蓋し機會の熟せざるのみ。

佐々木政吉と 高田研安

▼都下病院經營者中、肺結核を専門として其の名の最も聞えたるもの、一を博士佐々木政吉とし、他を高田研安とす。二者共に駿河臺に居を構へて

隠然競争の態を爲せり。

▼博士政吉は、博士東洋の息、今や乃父に代りて其の病院を經營し、名聲更に乃父に過ぐるものあり。勉強家にして、又孝心に厚く、曾て獨逸留學中、其の儕輩の頻りに折花樂柳の遊びに耽るの間にありて、常に能く一室に閉ぢ籠りて書卷を放たざりし如き、以て其の資性を見るべし。

▼彼れ一見尊大の風あり、患者に接して必ずしも親切なりと云ふ能はずと雖も、無愛嬌の裡、自ら信服せしむるの風なきにあらず。特に其の打診は天下第一品と稱せらる。

▼博士たるべくして博士たらず、寧ろ博士たるべく信せられて未だ博士たらざるものに高田研安あり、官學に頼らず、肩書に倚らず、獨自一個の技倆と手腕とを以てして、能く民間諸大家を睥睨するの概あるもの、彼れまた一個の傑物と謂ふべし

▼資性濃厚にして而も氣骨あり、權門に阿らず、勢家に媚びず、唯だ終始兀々として自己の業務に忠實なるは、即ち彼れが今日ある所以ならずや。其の患家に親切にして専門の事に詳しき、當今斯界人皆之を推す。

小此木信六郎と 岡田和一郎

▼同じく耳鼻咽喉科を専門として、其の人格の月鑑宵壤も曾ならざるはドクトル小此木と博士岡田と也。前者は東北の出、後者は伊豫の産、蓋し東西其の途を異にするが爲めに然る乎。

▼ドクトル小此木は、少時後藤新平男と併せて藩中の麒麟兒なりき。久しく歐洲に留學し、其の學や深遠、其の技や精巧、當今斯界殆ど此の人を以て第一人と爲す。博士岡田の如き、亦實に其の一

門弟たるに過ぎざる也。

▼爲人素朴にして閑雅、名利に恬淡にして邊幅を修めず、自ら醫界の仙を以て目せらる。唯だ夫れ名利の念淡くして自ら信する厚きが故に、曾て權門勢家と雖も憚らず、洒然落然として其の言はんを欲する所を喝破す。板垣伯を診して耳疾にあらず、毫疎せる也と罵りたる如き、以て其の面目を窺ふに足るべし。畢竟此の賢、彼れが立身に累を爲せる歟。

▼博士岡田に至つては、其の性格全く之れと異なり。貪婪にして卑吝、冷酷にして無情、たゞ金さへ儲かれれば義理もへちまもあつたものにあらずといふは其の主義也、耳鼻咽喉科を専門として、大學の講座を擔當するも、其の技術に至つては、遠く弟子格たる博士久保猪之吉に及ばず、況や其師小此木に於てをや。唯だ勤儉貯蓄の効、近來甚だ

懐中の暖きを耳にするのみ。

を撃つと云ふ。

濱田玄達と

榊順次郎

▼當今産科婦人科の名醫といへば、人皆指を博士濱田玄達に屈し、次に博士榊順次郎を推す。

▼博士濱田は苦學の人、大學を出で、後一時熊本醫學校に校長たり、私費を以て獨逸に留學し、歸來久しく東京醫科大學長たりき。為人重厚にして争氣なく、造詣する所甚だ深し。現に東京産科婦人科院長として、専ら患者に應接す。

▼博士榊も亦婦人科醫として令名あり。温情直誠唯だ患家の爲めに忠實ならんことを期し、曾て諛言を人に呈せず。而も利殖の途に至つては、其の縁戚たる博士岡田と、駢馳して伯仲の間に在り。之れが爲めに居を隣して紛争常に絶えず。近人眉

佐多愛彦と

緒方正清

▼浪華の杏林、其の人少からざる中に、最も聞えたるものを博士佐多愛彦、緒方正清の二人とす。前者は官醫系の頭領にして後者は民醫系の重鎮也

▼博士佐多は現に大阪醫專の校長なり。潤達にして細事を顧みず、機略縱横にして統御の資に富む自ら斯界の親分株たり。好んで人目を集注し、機に乗じて名聲を博するに巧みなる、醫界亦此の人なかるべからざるを思はしむと雖も、醫家としての技倆に至つては、人の殆ど之を言ふものなし。

▼博士正清は町醫者の典型也、上に對しては諛言媚辭至らざるなく、下に對しては倨傲尊大、眼中人なきが如くす。讃岐の百姓に生れて名門の跡を

襲ぎ、幸にして今日あるを得たるは、偏に天の賜物也。斷じて彼れの力にあらす。

土肥慶藏と

山極勝三郎

▼博士土肥は現今皮膚病學の泰斗也。博學洽聞其の専門的學殖の外、古典を論じ、哲學を談じ、最も唐詩を能くす。鶴軒は其の號也。人格高邁ならざるも野氣なく、人呼んで醫界の聖となすあり。

▼博士山極は重篤の人、病理學を專攻し、造詣甚だ深し。名利に淡く、一葛一裘、能く十年を支ふ學ぶ所専門の範圍を出でず。趣味の廣汎なる素より土肥の如くならずと雖も、人格の一點に至りては、當今亦得難きの一人とす。

其他官界及 民間の逸材

▼以上試みに摘出せる外、所謂醫界の元老として世人の耳に熟する者、石黒忠憲あり、高木兼寛あり、佐藤進あり、佐々木東洋あり、井上通泰あり三浦守治あり、小金井良精あり。既に過去の人として葬り去らるる雖も、後進の誘掖に於て亦缺くべからざるの人ならずんばあらず。

▼醫界第一の博學として、又文豪として、最も推服に値する者にドクトル富士川游あり。精神病學の大家として、我國缺くべからざる一人に吳秀三あり。京都の醫界を風靡して、獨り異彩を放てる者に荒木寅二郎あり。禁酒禁煙を説いて十年倦まざるものに片山國嘉あり。生理學の大家たるものに大澤謙二あり。養子岳太郎あり。新進氣鋭の學者的風格を存するものに宮本叔あり。永井潜あり。

▼更に民間病院を經營する者に、整形外科の田代義徳あり、順天堂病院の大黒柱たる泌尿科の阿

人物研究

久津三郎あり。院長佐藤達二郎あり。耳鼻咽喉科に岸病院。長岸一太あり。皮膚病に岡村龍彦あり。婦人科に伊庭秀榮あり。胃腸科に北村病院長。北村精造あり。長與又郎あり。小兒科に額田豊あり。花柳病科に池田悦次郎あり。肛門病に谷泉あり。

其他著名なる者、無名なるもの、數へ來つて寧ろ煩に耐へざるを覺ゆと雖も、何れも日進の學を究めて、將來の醫界に覇を稱せんとするの概あるは喜ぶべし。(ABC)

法曹界新進の花形

泉二新熊——牧野實一——大場茂馬——山岡萬之助——松本蒸治
石坂音四郎——市村光惠——上杉慎吉——青木徹二——松田源治

▼法治国なる名稱は、風教を害し道徳を壓するの權威を法律に附與するが故に、實業も教育も、釋迦も基督も等しく其權威に羅拜せざるを得ざるものあり、此時に齊りて文官任用令の改正は法學出身者に對する一の打撃たるを失はずと雖も、更に試験制度の改正は、單に官學に對する打撃たるに止まりて、私學に對しては却て恩恵たり、於此乎才の英にして氣の豪なる者は、將來も亦後來の如く法曹界に出入すべきなり。然らば法曹界果して人材雲の如きか、否、法律學は新進の學問にあら

刑法學界の四星

法曹界新進の花形

ずして却て考古學に類す、彼等法學者の多くは歐米法學者の糟粕を嘗むるに餘念なく、其學説は羅馬法を引證するにあらずんば權威なし、此點に於て吾人は未だ醫學界の稍々權威あるを覺えずんばあらず。

▼之を所謂大家に見るに、リストの祖述者にあらずんばピンチングに行き、ビルクマイヤに往き、ウエリング、ザヒニー、デルンブルヒ等擧げ來れば皆之れ堂々たる日本帝國の大家を高弟に持つ、而して其高弟は其學説を自己の學説として公示し以て世間の學界の昧者を煙に巻きつゝあり、吾人は不幸にして學説に特許權なきを遺憾とす、此の如き鸚鵡的學者の間に、新進の花形を求めんとす蓋し難からずとせんや。

▼曾て岡田(朝太郎)對勝本(勘三郎)の論争は、法曹界の偉觀なりき、而かも岡田博士支那に去つて以來、勝本博士は京大に綱を負うて容易に放たず、學界暫らく沈衰の状態を呈したりしが新刑法の實施は端なくも四個の寧馨兒を産みたり。

▼「日本刑法論」の著者泉二新熊氏は鹿兒島の産にして明治卅五年の東大獨逸法科の出身なり、同期の卒業生にして其名の著聞するもの、曰く石坂、曰く市村、飯島喬平、宮島次郎、伴房次郎、立石謙輔等あり、彼れ泉二氏は帝大を出づると同時に司法官試補となり、累進して檢事となり、平沼順一郎の恩顧を受けて司法省參事官兼任となり、日本刑法論の好評噴々たるによりて帝大講師を囑託せらるゝに至れり。彼は才の人にあらず、絞心彫腔、自ら暈むるの人なり、故に必ずしも其頭腦は玲瓏なりと云ふ可からざるも、自彊息まざるが爲

めに、其頭腦の鍊れるに従ひ、其名益々聞著するに至るべし、彼れ嘗て足尾銅山の鑛夫の同盟罷工の際、同僚數氏と出張して檢察の任に膺る、偶々鑛夫の勢ひ猖獗を極め、ダイナマイトを手にして近づく可からず、時の縣知事中山已代三は止むなく軍隊の出動を乞ふに至れり、此際鑛夫數十名隊を組んで臨檢の判檢事を襲ふの風聞頗りなりし爲め、諸法官皆髯を剃りて隱身の術を施せり、時に彼れ一人、毅然として曰く、乃公官職を帯ぶ、何すれぞ髯を剃りて逃ぐるの醜態を演せんやと。斯くて此記事の東都の諸新聞に現る、や人皆彼の豪膽を稱せざるなかりき、然るに何ぞ圖らん、彼は色黒くして鑛夫の如く、髯あるも人之を檢察官と見るの恐れなからんとは。

▼泉二學士と正反對の性格を有する者は「刑法通義」の著者牧野英一なり、彼は岐阜縣の産にして明

治三十六年の東大佛法の出身なり、彼の同期生にして稍々其名の著聞する者には雉本朗造あり、池田寅二郎あり、菱谷新吾、岩崎勳、乙骨半二等あり、彼も泉二氏と同じく司法官となり、帝大講師となり、岡田博士が支那に聘せらるゝや、即ち彼を以て刑法講座を擔任せしめたりき、其如何に頭腦の明敏なりしかを想像し得べきにあらずや。

▼泉二對牧野の性格は勝本對岡田の性格に似たり岡田博士は才氣縱横の士なり、勝本博士は自彊不息の士なり、潑刺たる意氣は岡田博士の特長にして、深刻透徹の見は勝本博士の特長なり、泉二學士は勝本博士の如く、牧野學士は岡田博士に似たり、故に牧野氏には時に獨斷説あると同時に創見あり、泉二氏は一字一句を苟くもせざるが故に獨斷なく、又創見なし、牧野氏の誤謬は寧ろ獨斷に因し、泉二氏の謬見は未だ頭腦の鍊れざるに因す

牧野氏は總ての學說を綜合して之を簡單に自己のものに合し、之を演繹敷衍するや宛も別個の意見なるが如き觀を呈せしむる所に妙味を有す、牧野氏は岡田博士の推輓を受けたるも其學說の根本は伊太利の新學派にして勝本博士と同じく佛蘭西派の系統なり、泉二氏の學說の根本は獨逸の最新派なるも刑法條文の解釋は岡田博士と勝本博士の間にある。

▼私學出身にして泉二對牧野の二氏に比較する者を求むれば、大場茂馬、山岡萬之助の兩氏を擧ぐるを得んか、大場氏は中央大學の出身にして其年代より云へば寧ろ新進にあらず、博士花井と僅かに一二年の差あるのみ、彼は代言人時代よりの辯護士にして明治二十八年大館區裁判所の判事となり、轉じて神戸より名古屋に移り、明治三十二年藝妓の自由廢業問題當時の係判事として其名を知

らるゝに至れり、明治三十八年夏司法省、内務省臺灣總督府等の囑託を受けて獨逸に留學し、主としてミュンヘンに學び、刑事政策、感化救濟事業等を取調べ、留學中獨逸文を以て「刑事政策大綱」を著述し、明治四十一年歸朝後司法省參事官となり、指紋法を輸入して警察界に一新紀元を開けり、彼は學說としてはビルクマイヤーの祖述者にして刑法學界の所謂舊派に屬す、然るに吾刑法學界は殆んど新派を以て風靡し、更らに伊太利學派の起るに至りて主觀主義の學說益々勢威を揮ふに至れり、此際彼は敢然として立ち、舊派の城壘によりて開戦を宣言し「刑事政策根本問題」を著し、次で「刑法各論」上下二卷一千七百頁の大著を完成し其他判事の自由裁量論」を出版し「刑法總論」も又將さに完結せんとす、彼は必ずしも辯に雄ならず文も又必ずしも妙ならず、其述作の分量よりすれ

ば恐らく法學界未曾有の著述家にして傍ら官職を帯ぶるを見れば其精力の如何に絶倫なるかを想像するに足らん。此間彼は陪審制度論を提出して法學博士の學位を授けられ、同時に大審院判事に任ぜらる、此點に於て吾人は中央大學が博士花井と共に二人の刑法學の博士を出したるを看過する能はず。

▼「刑法原理」の著者山岡萬之助氏は日本大學の出身なり、彼は司法官となり、獨逸に留學し、歸朝後控訴院檢事として令名あり、大橋博士の頭腦が稍々泉二學士に似たるが如く、山岡氏の頭腦は稍々牧野と同型なり。

▼由來學者の頭腦は一方面に偏するが爲めに、通常人と比較して稍偏僻の識りを免かれず、大橋博士の如き即ち其一證なり、然るに山岡氏は圓満玉の如く濃厚、長者の風あり、大橋博士は自己の學

説と合はざるものは之を攻撃して餘蘊なからしめんとするに反し、山岡氏は如何なる學說をも尊重す、故に大橋博士の立論は複雑にして冗漫に近く之を解するに苦しむの點なきにあらず、反之、山岡氏の立論は明快鑿々として鐵を斬るが如し、大橋氏の刑法各論に臨む時は、恐らく此以上の蘊蓄なきが如き感を抱かしむるに反し、山岡氏の原理は綽々として餘裕を存す、之れ素より一は教科書用たるが爲めなるべしと雖も、又其頭腦の形式、人物の性格に影響なしとす可からず、是故に大橋博士の所論は時に矛盾なきやを疑はしめ、原則の那邊に應用されあるかを發見するに苦しましむるも、山岡氏の著作は原則を追ひて立論し、原則に立脚して結論するが故に、讀者をして思索を勞せしむるの虞れなし、要之、私學出身の新進法曹として、相反したる特長を以て進む所、又一の異

たりき、然るに彼は商法より更らに民法に移り、民商兩法に關して、其法理の闡明に於て頗る卓見に富むものあり、之れ蓋し民商兩法は其原則の互に共通せるのみならず、商法々理は取引の敏活に加ふるに従つて民法々理を形成せるが爲めに兩法研鑽の必ずしも相背馳するものにあらざるのみならず、却て兩法參觀するに於て始めて其法理の眞髓を領得するに便宜なるが爲めなるべしと雖も、又必ずしも何人も爲し得るの業と速断す可からず、川名博士(兼四郎)の如き深透の見に富む學者と雖も、未だ民法以外に其手を染めたるを聞かず、況んや其他の碌々名流をや。

彩たらすんばあらず。 東西兩大學の花形 ▼法學界の明星は多く東西の兩大學に集まる、既に白髪の名譽教授を始めとして斑白の勅任教授より、奏任教授、講師に至るまでを合算する時は其數大凡そ百に滿つ。然れど東西兩大學の花形として相對比する者を求めれば私法界に於ては東京の松本丞治氏に對して京都の石坂音四郎氏あり、公法界に於ては京都の市村光惠氏に對して東京の上杉慎吉氏を拉するを以て最も對照の妙を得たるものと信す。

東西兩大學の花形

▼松本氏は明治三十三年の東大出身にして其大學院に於ける専攻科目は商法なりき、彼は大學在學中より岡野博士(敬次郎)の推輓を受け、商法々理の研鑽に就ては第二代の岡野博士を以て目せられ

▼思ふに現代の法學界に於て、所有法律に精通せるものを求めれば、岡松參太郎博士と江木衷博士の外之れなし、兩博士の如きは素より法學界稀觀の英才にして到底常人の企及し得べきものにあらず、況んや其他の碌々名流をや。

ず、石坂博士は明治三十五年の東大出身にして當時の京大総長木下氏の推輓を得て京大に助教授となり、岡松博士の指導の下に其學を磨けり、之を松本博士と對比するときは、松本博士は堂々たる體軀を有し、斗酒尚ほ辭せざるの豪傑なるに反し、石坂博士は沈黙寡言、而して其容貌宛も百姓然たり、然れど筆を執つて立つの時は、博引旁證縱論横説、文に奕々たる光彩あり、松本博士の筆致は悠々迫まらざる所に津々の妙味を有し、石坂博士の筆致は説明の文に於て其特長を見る。

▼石坂博士は熊本の産にして一代の梟傑故星亨の娘を妻とし、其父兄は之を政治家たらしむるの志望なりしが如かりき、然れども彼は政治家たらんよりは學者として最も其適所を得たるものならずんばあらず、石坂博士が未だ東大にあるの時、勳參江藤哲藏氏と共に小石川傳通院の傍に、同郷の

學生十人餘を集めて指揮したることあり、而かも其斡旋の勞は多く江藤氏の擔任にして石坂氏は書冊を手にするの外、殆んど他を顧みることなかりしもの、如かりき、以て彼の政治家に不適當なりし一證とするを得ん歟、曾だ故星氏の知遇を得たるを異とすべきのみ、反之、松本博士は素より政治上に些の野心なきも尚ほ政治家としての素質を有す、其剛情にして我慢なる其落ち著きたる態度は政治家とするも尚ほ當世に顯榮の地位を占むることを得べし、曾だ斗酒累を爲して、其玲瓏の頭腦を壞すを虞るゝのみ。

▼石坂博士は筆に雄にして辯に雄ならざるに反し松本博士は寧ろ辯に於て特長を見る、蓋し其文を草するや、考案熟し、前叙後叙成立したる後にあらずんば筆を執らざるは松本博士の癖にして、石坂博士は略ぼ意見と段落とを決定して筆を執るや

意に従つて筆動くの態あり、松本博士の「商法原論」は數年前の舊著なるも尚ほ學界の珍品にして民法計釋全書「人法及人物」の全部脱稿するの日は法曹界又一の珍籍を加ふるの日なるべく、石坂博士の「日本民法論」は今や漸く債權總論を完結して紙數既に二千頁に垂んとす、其完成の日は恐らく學界空前の大著を見ん。

▼岡松博士は其口吻宛然古今の法學者を吞吐せるの概あるに反し、石坂博士は一呼一吸古今の學説を批判して自己の新意見を發表す、故に岡田博士の説は獨斷的なるに反し、石坂博士は歸納推理の上で成立す、松本博士は稍々岡松博士に似て、而して更に其考證を明快にする所は之を岡野博士に得たるが如し、故に石坂博士の文は説明體にして稍々冗漫の嫌ひあれども、松本博士の文は簡潔にして明快なり、一は學者の墨を固守して之を出で

ざらんとし、一は學者の墨を出で、之を守るが如き態あり、共に其趣味なく、銜氣なく、坦々たる性格は學者に稀れに觀るの資質なるべし。

▼公法學界に於ける市村博士對上杉博士の論戰は實に近來の見ものならずんばあらず、上杉博士は桐花學會の主唱者として、君授神權説の主張者穂積博士の愛婿として、其名學界に著聞するの人なり、人は或は穂積博士を以て曲學阿世の學者となす、蓋し其君授神權説が既に歐洲の學界に於ては一顧の價値なきに拘らず、尚ほ我國體に合すとして主張せるが爲めならずんばあらず、然れども若し穂積博士にして憲法は一國家の典章にして、世界共通の典章にあらざるが爲めに、日本帝國憲法の解釋は帝國の國體に合するを以て主眼とすとすの前提より立論せるものなりとせば、君授神權説も必ずしも不可ならず、只其前提を説明せざりし手

落ち素より批難を免かれず、上杉氏が君授神權説を主張するは果して斯くの如き前提の上に立つか否かを知らずと雖も、穂積博士の愛婿たる關係に先輩美濃部博士と憲法講座を争ふの野心に出でたるものなりと喧傳さるゝに至りては、博士たるもの一言の辯明なからざる可からざるべし。

▼上杉博士は明治三十六年東大政治科の出身にして同期の學生中博士たる者氏を以て嚆矢とし刑法學界新進花形たる牧野氏の如き未だ博士たる能はざるなり、氏は石川縣の産にして性甚だ潔癖あり敵としては飽まで戦ひ、熱しては時に其品性を疑はるゝまでに罵倒の筆を弄することあり、斯る頑固の性格を有しつゝ尙ほ且舅父の信用を得たるの點を觀察する時は、或は茲に博士獨得の處世術なきにあらざるかを疑はざるを得ざるものあり、百萬石の加賀藩に生長す、加賀氣質の時に閃電の如

く閃くものあり、特に攻撃の包围中にありて尙ほ頑強に抵抗する所、茲に其執拗性を見ざる可からず。

▼博士が後輩の身を以てして前に教授となり、博士となれるを聞き問々の情、遣る所なかりし人物あり、京大の教授博士市村光恵即ち其人なり、市村氏は明治三十五年の東大獨法科の出身にして、其獨逸語に精通せる點に於ては上杉博士の遠く及ぶ所にあらず、而かも上杉氏は穂積氏との閥閥關係ありと見えて其昇進も亦速かなるに反し、市村氏は常に鬭争の意を含み、上長に宜しからず、之を以て其昇進の速度は到底後輩たる上杉氏に及ばず之れ兩者の殆んど犬猿齟らざる關係を生せし私情にあらざるなきか。

▼市村氏は土佐の産にして、其生地の氣質を有す其辯論も土佐辯の流暢なるものにして、文も亦健

なり、而かも常に土佐特有の筆を畫くと共に、時に任侠自ら任じて事を行ふの風あり、而して上杉博士と同じく敵に對しては頑強に抵抗し、執拗に争闘し、又著しく排敵行動の潔癖を有す。此故に其學生に對する上に於ても容易に許さず、一毫の非點を發見せんか極度の低點を附して平然たり彼は大學教授の官職を帯びつゝ、政治演説を爲し同郷の友を補けて選舉運動に従事する程に任侠自ら任ずる所あり。

▼上杉博士の執拗性は稍々女性的なるに反して、市村博士の執拗性は男性的なり、一は南國の氣風を有し、一は北國の氣質を有す、而して兩者相對峙して詆背到らざるなきに至つては蓋し學界の奇觀たらざるばあらず、見よ約十年の間、上杉博士の論説の現はるゝや、市村博士に直ちに反駁文を草して之を發表し、而して原稿料の有無は之を問

はず、故に市村博士をして筆を執らしめんとせば先づ上杉博士の論文を掲ぐるを要す。
▼要之、兩者の其論争を息むるの時恐らくは一方當事者の死亡後ならん歟、曾だ吾人傍觀者は上杉博士が更に男性的に堂々と自己の所説を告白し、以て一層の奇觀を添へんことを翹望せざるを得ざるなり。

在野法曹の二俊

▼私學出身にして博士たる者必ずしも少からず、中央に花井、大場の兩氏あり、早稻田に田中、廣池の二氏あり、慶應の青木氏あり、然れども法律學の博士としては花井、大場及び青木の三氏に過ぎず、廣池氏の如きは法律は即ち法律なるも寧ろ法制史の專攻者なり。

▼青木徹二氏は明治三十年慶應義塾を出で時事新

報記者となり、判檢事試験に合格して神戸に赴任し、半歳ならずして官を辭し、再び時事新報記者となり、後ち慶應義塾より派遣せられて獨佛二國に遊び、商法を専攻し歸來辯護士を業としつゝ、義塾の教授たり、聞く博士が未だ學生たりし時代、彼は卓上往々棋盤の圖を畫き、潜かに石勢の變化に潜念し、圍碁三昧に耽り居たりと、果然彼は今日に於ては素人碁客中の白眉たり、此逸話は彼の性格を遺憾なく發揮せるもの、如し、蓋し彼は非常の凝り性にして、一度考案に耽るや斷定を得るにあらすんば夜を徹するも寝ねず、一度業を起すや竣成するに非らずんば、如何なる困難をも突破して進むの概あり、其凝り性なるが故に又潔癖を有す、一度自己の權利を侵害せられんか、必ずや法廷に争ふも尚ほ辭せず、嘗て某學士有價證券論を著はす、而して其立論要見多くは同博士著の

商法論と相同じ、然るに有價證券の概念に於て、曾だ一箇所、同氏の説を無造作に貶したる箇所ありたるを以て、同博士は赫然として怒り、大體の意見説明を剽竊しながら此點に於て無造作に貶するが如きは不都合千萬なりとし遂に著作權の侵害として法廷に黒白を争ひたることありき、蓋し彼の潔癖は正義非正義の甄別を峻烈にするにあり、一毫の罪惡も看過せざる點にあり、故に正義を執つて立つや、利害もなく情實もなく、先輩もなく友人もなし、彼が歸朝後義塾に教鞭を執るの時、塾の經營方針に關して鎌田塾長と争論し、議遂に合はざりし爲め、斷然教職を辭したることありき彼の喧嘩腰の強きこと斯の如し、不正義を憎むこと蛇蝎の如き結果として、正義に對して遵奉の心深く、隨て正不正不明なる場合に於ては何人に對しても濃厚篤實にして一見平和の君子人の如し、

這回憲政擁護の運動起るや、彼は政治上の趣味を有せざるにも拘はらず、敢然陣頭に立ちて、今日の時局は之を一言にして盡せば日本國民の獨立戦争なりと叫び、政客と連携して奔走したりき、政友會が薩派と苟合して、政權に阿附し、友黨を賣るに至るや、彼は其不正を憎むの公憤心を發作して閥族と共に黨閥をも併せ討滅すべしと叫び、擁護會中の硬骨黨の一人なりき、又以て彼の性格を判するに足らんか。

▼彼に商法論の著あり、全編五冊、數千頁の大著なり、就て見るに法理の闡明に於て必ずしも深遠ならず、條文の解釋に於て時に誤謬なきにあらざるも、平明暢達の記事を用ゐて穩健鞏實の解釋を施せる所、赤門出身者の學び得べからざる筆致あり、實務家の參考書として唯一の良書なるべく其辯護士としての眞價は原嘉道、岸清一の墨を摩

しつゝあり。

▼日本大學の出身者として曩に山岡萬之助氏を擧げたり、同大學の出身者として更に一人の擧ぐべき人材あり、政友會の松田源治氏之れなり、松田氏は大分縣の産にして、日本大學を卒業するや判檢事辯護士試験並に高等文官試験に及第し、辯護士を開業し明治四十一年逐鹿場裡に立ちて首尾よく中原の鹿を得ると同時に其名漸く江湖に喧傳せらるゝに至れり、彼が逐鹿場裡に立つの時は、人皆元田の附荷として果して能く當選し得るや、議員としての職責を全うし得るや否や疑ひたりき、幸にして無事當選するや、彼は満面髯の中より破鐘の如き音聲を以て、演壇に立ち、秩序整然たる演説を敢てし、名聲一時に噴々たり、特に彼が其四角なる容貌、堂々たる體軀、満面の髯は人の注目を惹くこと易く、且年壯にして氣鋭、百姓職